

ぐだ男と野獣のクッキーkiss

野鳥先輩

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ぐだ男が何故か野獣先輩を召喚してしまったお話。プラズマさ氏の二番煎じです。

ぐだ男を掘る展開は無いからノンケ諸氏も安心して見てくれよなあ〜頼むよ〜。

時系列バラバラの短編集です。気が向いて筆が乗ったら投稿します。つまり不定期更新です。

## 目次

登場人物一覧(随時更新・最新話準拠)	1
冬木にて。ビーストと	15
オレルアンにて。竜の魔女と	20
カルデアにて。知将と	26
冬木にて。少年と	34
セプテムにて。おじさんと	40
一部BBについての見解	48
お菓子の国にて。石と	50
ネロ祭にて。迫真空手VSアクシード三銃士(前)	55
ネロ祭にて。迫真空手VSアクシード三銃士(後)	61
カルデアにて。セイバーと	70
無限の野獣製(Unlimited Todorokoro Work s)	75
(再)楽聖レ○プ！レストラン鑑賞(修正済み)	81
特異点K A.D. 2005 尻穴怒涛強襲岡山	86
特異点K A.D. 2005 尻穴怒涛強襲岡山(2)	92
特異点K A.D. 2005 尻穴怒涛強襲岡山(3)	96
SCOOP!!! 種火イカセ隊結成!	104
クリスマスレ○プ！ようじよと化した先輩!	110
不死VS不死	118
昏睡レ○プ！デンジヤラスビーストと化したマシユ!	124
何処にでもいて、何処にもいない獣	130
七つの大罪感じるんですけどよね?	134

## 登場人物一覧（随時更新・最新話準拠）

【真名】 無銘（野獣先輩）

【クラス】 ビースト

【性別】 不明（男性とも女性とも）

【身長・体重】 24歳 170cm 74kg

【属性】 混沌・悪

【スキル】

道具作成：C―（睡眠薬のみ）

変化：EX

無辜の怪物：A

自己改造：EX

【宝具】

『切り貼りされし我身』  
せんばいびーびーシリーズ

自身の姿が利用されたBB素材。その全てがストックされている。変化を行う際はまずここにアクセスする。また彼の変化スキルでは、この中に入っていないものには変身出来ない。

『第四章・野獣と化した先輩』  
よんしょう・やじゅうとかしたせんばい

体内展開型の固有結界。じりじりと他者の体力を削る空間。太陽に愛された等の逸話がある英霊には無効。敵の体力が一定値を下回る、または昏睡したと判断した場合、地下ステージへと移行し敵一体を束縛する。

『空手部性の裏技』  
からてぶせいのうらわざ

体内展開型の固有結界。物凄く狭い。風呂がある。リンチに最適。

【真名】 三浦

【クラス】 ライダー

【性別】 男

【身長・体重】 21歳 176cm・78kg

【属性】 混沌・中庸

【ステータス】

筋力 B 耐久 B  
敏捷 D 魔力 D  
幸運 A 宝具 B

【スキル】

対魔力：D

騎乗：A―（MUR肉のみAランクで行使出来る。他のものに対してはE―）

迫真空手：C

便乗：A

本来持ち得ないスキルも、他人が使用している間だけ自分も行使出来る。

該当するスキルは騎乗、剣術、芸術、芸術、カリスマ、軍略、等。

ランクA以上ならば、肉体面での負荷（神性など）すら獲得できる。

理性蒸発：C―

蒸発している期間に波があり、最低でスキル無し相当まで変化する。

天賦の叡智：A

前人未踏の領域へ辿り着いた英霊に匹敵するほどの才能、観察眼、そして思考速度。人数を問わない戦略眼と不屈を得る。現在はスキル理性蒸発により機能していない。

【宝具】

『MUR肉』

肌色の珍妙な生き物。魔獣。池沼時の自身と同程度の知能を有する。

『誘惑のラビリンス』

ゆうわくのらびりんす  
二人の友、そして自らの師範を召集する。ただしこの宝具はあくまで召集を行うのみ。

【真名】ひで

【クラス】アヴェンジャー

【性別】 男

【身長・体重】 18歳 158cm・53kg

【属性】 中立・中庸

【ステータス】

筋力 A 耐久 A+

敏捷 D 魔力 D

幸運 E 宝具 EX

【スキル】

忘却補正：A（ほんとお？）

自己回復：A

紅顔の美少年（偽）A：人に不快感を与える偽の美少年としての性質。成年でありながら少年としてのロールを余儀なくされた事に起因する。男女を問わず魔術的效果として働くが、抵抗の意思があれば軽減出来る。対魔力スキルでの回避は不可能。

被虐体質EX：最早呪いの領域である上に、他者への復讐心すら肩代わりする。サンドバッグに最適。

頑健C

【宝具】

『悶絶少年（大嘘）』

自身に向けられた憎悪を吸収する。吸収速度は自己回復スキルのランクに比例する。

【真名】 葛城蓮

【クラス】 アサシン

【性別】 男

【身長・体重】 22歳 172cm・67kg

【属性】 混沌・悪

【ステータス】

筋力 C 耐久 B

敏捷 A+ 魔力 C

幸運 B 宝具 C

【スキル】

気配遮断D

加虐体質EX　：少年特攻にリンクして強く発動する。少年特攻対象外の相手にはDランク相当。

少年特攻A　：少年の範囲は実年齢20以下又は『紅顔の美少年』及び『紅顔の美少年（偽）』の所有者。攻撃力が増大する。

専科百般C―　：適用されるのは剣術、馬術、銃術、迫真空手等武芸に限られる。

透化D

【宝具】

『虐待流儀蹴闘殺法』

全ての隙を圧縮して放たれる必殺の連続蹴撃。バトル淫夢で培った伝統のアレが放たれる。蹴撃中に敵が壁に引つかかれば更に繋がる。

『瞬間移動（偽）』

かの有名な漫画ドラゴンボールの、あの瞬間移動。とはいえ対象は自分だけであり、原典とは比ぶべくもない程度の移動距離。これもバトル淫夢にて培われた技術。

『邪剣・夜』

葛城蓮がアサシンのクラスで現界した場合、本来持ちえない剣技。だが自身のアサシンとしての剣術にケリをつけ、剣だけは正々堂々と振るう事を決めたことで解放された。漆黒のオーラを刀身から湧き出した後に放つ、正面からの刺突。発動時は筋力が2ランク上昇、敏捷が1ランク下降する。

【真名】ピンキー

【クラス】バーサーカー

【性別】女

【属性】混沌・悪

【ステータス】

筋力 E 耐久 B  
敏捷 D 魔力 B  
幸運 E 宝具 EX

【スキル】

狂化：EX

フェア魔 B：キス魔の亜種

無辜の怪物 A：顔だけの化け物。

変化 B：不定形の肉体。自身の大きさがある程度変更できる。召喚時より小さくは出来ない。

【宝具】

『男喰らいの怪物』

男性に対し圧倒的なまでの恐怖を押し付け、心肺停止させる。多くのホモを心肺停止に追い込んだ逸話が昇華したもの。女性には効果が薄く、聖人レベルの良い人なら擁護すらしてくれる。

注釈：顔だけの状態で浮遊している。原典の影響から、若くてイケメンな男に対し執着する。つまりぐだ男君は……あっ（察し）

【真名】UDK

【クラス】アーチャー

【性別】女

【身長・体重】17歳

【属性】中立・中庸

【ステータス】

筋力 E 耐久 D

敏捷 A 魔力 B

幸運 C 宝具 A

【スキル】

対魔力 B

単独行動 B

魔術 C：強化魔術を行使出来る他、イワナカッターといわれる光



弾での攻撃も行える。また霊脈の探索にプラス補正。

仕切り直し B―：戦場から逃走する能力。ターンの巻き戻しは出来ない。

カリスマ C：本人は軍人で無かった為、あくまで人望の類に留まる。彼女のカリスマにあてられた者達が求めたのは、彼女自身であった。

#### 【宝具】

『恋符・マスタースパーク』

アーチャーの演じたキャラ、東方Projectの霧雨魔理沙を象徴する宝具。魔理沙としてのアーチャーの知名度に引きずられる形で宝具となった。八卦炉より放たれるその破壊力は原典通り、山をも貫く。

『星へと至る道標』

彼女が生前書いた絵である。発動した場合、巨大なボールが上空を浮遊し、アーチャーはそれを意のままに操る事が可能。単純な質量兵器だが、発動時に自身の位置が丸分かりになるのが困りもの。

#### 【真名】HNS

【クラス】バーサーカー

【性別】女

【属性】中立・中庸

【ステータス】

筋力 A 耐久 B

敏捷 A 魔力 B

幸運 D 宝具 A

【スキル】

狂化 E++：魔理沙（アーチャー）に対してのみ異様な執着を持つ。

心眼（偽） B+

高速詠唱 B：狂化のランクが低い為、それなりに機能している。彼女が主に用いるのは石の投影であり、ほぼノータイムで投影可能。不死殺し A：宝具からの派生スキル。あらゆる蘇生、復活を無効化する。

【宝具】

『罪姫・正義の柱（偽）』

後天的に付与された、ギロチンの刃。原典とは何の関連もないが不死殺しの力を有する。

【真名】 秋吉亮

【クラス】 キャスター

【性別】 男

【身長・体重】 188cm 83Kg

【属性】 混沌・悪

【ステータス】

筋力 A 耐久 B

敏捷 B+ 魔力 B

幸運 B 宝具 A

【スキル】

陣地作成D

道具作成E

迫真空手 A：魔法へと至ろうとし失敗した夢の跡。原典の時点で神秘の秘匿が既になされていなかったため本来魔術として行使できないが、ある事情で使用が可能になっている。

魔力放出 B：オーラを全身に纏い、身体能力を強化する。

心眼（真） A

【宝具】

『炎神全開』

魔力放出のランクを一時的に2ランク上げる。当然消費魔力は大量となり、特殊な条件下で無ければ使用できない。また身体的負担が

大きくかかる。

『聖拳・月』

キャスターのサーヴァントの枠に収まりきらず発現しなかった、秋吉亮必殺の右。今回の戦闘で魔力放出を駆使し疑似的に再現した結果、利用が可能となった。

【真名】 K B T I T

【クラス】 キャスター

【性別】 男

【属性】 混沌・悪

【ステータス】

筋力 B 耐久 B+

敏捷 B 魔力 B

幸運 D 宝具 EX

【スキル】

陣地作成 C：調教部屋を製作可能。

道具作成 C

高速詠唱 C—：詠唱文が噛み噛みになり無駄な分量がかさむ。詠唱は厨二の特権。

被虐の誉れ B：タクヤさんはマゾ。でもタクヤさんのマゾじゃ売れないからS役やってるってどっかのホモが言ってた気がする（うろ覚え）

芸術審美 A：多くの芸術家であるK B T I T一族と同一視されたことに由来。特に英霊の宝具や言語には強く、宝具を見ればほぼ間違いない真名を見切る事が可能。

【宝具】

『非法な契約書』  
アクション・コントラクト

杜撰な契約書。対象の真名をK B T I Tが記入するだけで効果が発動する。調教部屋内において、対象の対魔力を無効化する。

『卍解・天鎖斬月』  
むかんけいなだんゆう

卍解と名乗ってはいるが、その形状は始解である斬月そのもの。ま

た彼が纏う死神装束も始解した黒崎一護のそれである。筋力、敏捷が1ランク上昇、代わりに耐久の+補正が消え、更に1ランク下がる。『瞬歩』など、この状態でしか行使できない術も保有している。

【真名】 平野源五郎

【クラス】 ライダー

【性別】 男

【属性】 混沌・悪

【ステータス】

筋力 C+ 耐久 C

敏捷 B 魔力 A

幸運 A 宝具 EX

【スキル】

対魔力 C

騎乗 B

店長権限 EX：陣地作成には劣る速度で調教部屋を作成出来る。

また調教部屋内にいる時、全能力を1ランク上げる。

専科百般 B

ストーキング D：キモオタ平野時代の技能。

【宝具】

『緊縛の縄』

自身の筋力ランクで相手の筋力と競合、勝利した場合対象一体を拘束し支配下に置く。更に自身の魔力ランクで相手の魔力ランク+対魔力ランクと競合。勝利した場合、対象の保有するアクティブスキル全てを対象を通して利用できるようになる。

『陰茎引きし台車』

対象に括りつけた紐を、重りを乗せた台車が一人で引く。対象の痛覚が操作され、その痛みは陰茎への苦痛に等しいものとなる。ただあくまで精神ダメージであり、強力な物理的ダメージはこれだけでは期待できない。

【真名】 木村直樹

【クラス】 ランサー

【性別】 男

【属性】 中立・悪

【ステータス】

筋力 C (B) 耐久 B

敏捷 B (A+) 魔力 A

幸運 C 宝具 EX

【スキル】

対魔力 A+：魔除けとしての側面もあるとされる、ガーゴイルと同一視されたことに由来。

迫真空手 C

魔力生成 A：自分で法外な魔力を生成する事が可能。ストックするなり、バイパスを作って他の者に回したりと融通が利く。超覚醒木村は使用しない。

創造 EX：投影魔術とは似て非なるものだが、結果は大体同じ。

莫大な魔力を消費し、創造されたものは数分後には塵に帰る。超覚醒木村の場合は『穿つ武器』しか生成できないという縛り付き。

【宝具】

『起源覚醒人格・展開』

『穿ち』の起源に覚醒した人格、超覚醒木村へと肉体を明け渡す。魔力が底を尽きた場合、超覚醒木村の人格は強制的に引込む。また超覚醒木村は創造した槍に、『敵を穿つ』という因果逆転の呪いをかけることが出来るがこれまた莫大な魔力を消費する。

【真名】 アルトリア・ペンドラゴン (NRK)

【クラス】 セイバー

【属性】 秩序・善

【ステータス】

筋力B 耐久力C

敏捷C 魔力B

幸運E 宝具A++

【宝具】

『風王結界』

『約束された勝利の剣』

『全て遠き理想郷』

【真名】衛宮士郎（AOK）

【クラス】アーチャー

【ステータス】【スキル】は衛宮士郎に準ずる。ただし投影魔術については

下記の方法を用いて再現する。

【宝具】

『Unlimited Todorokoro works  
無限の野獣製』

万能素材たる野獣先輩を素材として、投影の真似事を行うことが出来る空間。武器の本質を理解してしまえば、ラグはあれどAランク宝具すら投影出来る。最初は何もない荒野だったが、ギルガメッシュとの決闘により大量の武器を投影する事に成功、無限に剣の突き刺さる荒野が完成した。この方法で投影した武器は性能こそ真作に等しいが、事あるごとに蠢いたり野獣の咆哮があがったりするのが欠点である。

【真名】GO

【クラス】セイヴァー

【性別】男

【身長・体重】21歳 176cm・78kg

【属性】混沌・中庸

【ステータス】

筋力A 耐久A

敏捷C 魔力A

幸運 B 宝具 EX

【スキル】

カリスマ EX：他者を引き込む力、ある種の呪い。彼のカリスマに魅入られた場合、セイヴァーの信者となる。

神性 EX：変動する神性。その世界における信徒の割合によって、持ちうる神性は大きく変化する。

【宝具】

『アポロン・ウイング陽光の六翼』

——私にとって彼はアポロンでした。発動している間、神性A+を得る。

『ゴード・イズ・ゴッド機械仕掛けの唯一神』

自身の神性によって、自身が望む様々なスキル、能力を付与、ステータスを上昇させる。神性が極まっていれば、唯一神と同等の事象を発生させることすら可能。

【真名】 変態糞親父

【クラス】 キャスター

【性別】 男

【属性】 混沌・悪

【ステータス】

筋力 B 耐久 B

敏捷 E 魔力 C

幸運 A 宝具 A

【スキル】

陣地作成 B：

道具作成 D：サーヴァント化した結果、イチジク浣腸くらいなら自作できるように

無辜の怪物 A

黄金律（体） D：何故か彼の周りには同志が集まる。

高速執筆（パソコン） E：高速詠唱の亜種で、タイピング速度に影響。掲示板での報告が達筆であったことに起因。パソコンと魔術の

相性が悪い為、有効活用は難しそう。

【宝具】

『黄金煌く白濁の狂宴』  
おうこんきらめくはくたくのきょうえん

かつてキャスターが岡山の県北の川の土手で敢行した糞遊びの心象風景を依り代として、莫大な魔力を伴った幻影を作り出す。魔力は周辺の自然などから吸収する為非常にリーズナブル。幻影により敵を押し返すことも可能ではあるが、本来の使い方は数人の味方のステータスを補強する事。ついでに自然側からしたら問答無用で魔力を取られるだけなので、対抗手段があれば切ってくる可能性が高い。

【真名】 野獣先輩・サンタ・リリイ

【クラス】 セイバー

【性別】 幼女

【属性】 中立・中庸

【スキル】

対魔力：C

騎乗：B

聖者の贈り物：B

心眼（偽）E

魔力放出（茶）：C BB素材群に存在する幾重もの心臓を核とし、無限にも等しい魔力を放出する。茶色い。くさい。そしてビーストが幼い為、規格外の出力は出ない。

【宝具】

『邪剣・夜域魔鐘音』  
じやくけん・よるいきましようね

ビーストがセイバーと呼ばれた場合『邪剣・夜』を携えて来るが、こちらはそれがサンタ・リリイの霊基にリンクして若干変質した姿となる。黒いオーラ、黒の魔力放出は共通するが、こちらは相手の視界を奪う力を持ち、魔力放出には教会の鐘の音が発生。

以下被害者名簿

シエイクスピア（淫夢） 真夏の夜の淫夢による風評被害。



ギルガメッシュ（淫夢）（ニート） バビロンステージによる風評被害。

アマデウス（淫夢） モーツァルト？ ほんへでNRKが間違えた為に風評被害。

ネロ（淫夢） バビロンステージによる風評被害。

クーパーリン（キャスター） 空気。マジメ君。特に風評被害は受けていない。

## 冬木にて。ビーストと

事實は小説より奇なり。それは古今東西、時代を問わない。

——道端に転がる汚物を、ただ目に入ったからと弄り回す者はいるだろうか。中には拾い上げた者の脳に異常があるだとか、強烈なインスピレーションを受けただとか、そういった屁理屈をこねる事もあるだろうが、常識的には、否と答えるべきだろう。有り得ない選択肢の一つであることは、疑いようもない。

——弄り回された汚物を、人々は笑いながら受け入れるだろうか。中にはその場にいた者全ての脳が一般から離れていた等と、苦しい屁理屈をこねる者もいるだろう。だがこれも、常識的には否。有り得ない選択肢から派生した、更に有り得ない選択肢の一つだ。

オレの目の前に現れたコイツは、言ってしまったえばそんな、幾層にも重なった有り得ない選択肢全てを潜り抜け続け、全世界へと躍り出た。奇跡の起こり得ない、神秘とは真逆の統括された電子の海を縦横無尽に駆け巡り、多くの人間の脳裏に焼き付いて離れない。それは時々に応じて形を変え、役柄を変えた。彼の五体は切り抜かれ、数々の派生が生まれた。そんな男を——

「24歳です。学生です。オッスお願いしまーす」

——奇跡の産物と呼ばずに、なんと呼ぼうか。

「うわぁ野獣先輩だー！」

ロマンの素っ頓狂な驚きが、オルガマリーの苛立ちを逆撫でする。「ロマニどういう事? この、海パンしか履いてない薄汚い男の正体を知っているというの?」

「知ってるも何も……なんだこれは。たまげたなあ」

「あの、先輩。ドクターの様子がおかしいのですが……」

ああ。オレも、彼と同様の悩みを今抱えてしまった。コイツの事は

もう知ってるけど、とてもじゃないが穢れを知らない婦女に語れる内容ではない。

野獣先輩。現在のクラスはビースト、というらしい。同性愛者向けビデオ、俗にいうホモビデオの男優である。脂ぎった肌に決してイケメンでない顔、画面越しに見ただけでも臭いが伝わってきそうな不潔感から、生粋のホモには受けが悪かった。代表的な作品は『真夏の夜の淫夢』『バビロン』だろう。それだけであれば、とてもではないが英霊足り得ないはずだが……

「……おまけにビーストつてなによ。基本クラスにもそんなものはないわ」

「この辺がセクシー……エロいッ！」

ビーストが興味を示したのは所長ではなく、オレだ。ビーストは同性愛者なのだから当然の帰結だろう。野獣の眼光をきらめかせ、ズボンをずらそうとしてくる。

「あつ、ちよつと！先輩に何してるんですか！」

マシユがビーストを押しつけ、オレの片腕にしがみついてくる。一瞬だがずれたズボンの方へと視線が逸れていた。

「せ、先輩。大丈夫でしたか？」

「ああ、うん大丈夫」

「……しようがないね」

「や……ビーストは同性愛者のサーヴァントだ。所長やマシユは絶対大丈夫だけど、君はくれぐれも気を付けてね」

「ちよつとロマニ！いいから野獣先輩の正体を教えなさい、こつちも困惑してるの！」

それにしてもロマンめ。それなりにサブカルチャーに通じているとは思ったけど、まさか淫夢にまで辿り着いていようとは。何処にいるか分からないな、淫夢厨っていうのは。

「先輩！また骸骨です！」

見やれば召喚サークルは、骸骨に包囲されていた。

「俺が立たせてやるか。しようがねえなあ」

「……なにが出来るといふのかしら」

ビーストが一步前進したかと思うと、彼の両腕の関節が折れ、陰部を隠していた、何処かの人事部長の男の顔面が二つに割れた。そこから這い出たのは、およそ人体に埋め込むには強力過ぎる銃火器の数々。

「ンアアーツ!!」

野獣の咆哮と共に、それらは実弾を発し、ビーストの口からは白いビームが吐き出された。それらは圧倒的物量を以て、群がる骸骨たちを蹂躪していく。その光景を、マシユは、そしてオルガマリー所長は茫然と見ていた。

「あ、あれなんてBBだっけ……見た事はあるんだけど」

「フルオープンアタック先輩BB」

「ああ！ 君知ってたんだ、てつきり知ってるの僕だけかと思ってたよ！」

大方予想通りの能力を持っている事が把握出来ただけ僥倖だろう。ビーストは、本編のみでは決して英霊足り得る資質を持ちえない。その一言一句は淫夢語録と呼ばれ、多くの人間の言語野に染みついてはいるものの、それ以上にはならない。ならば、彼を描いた物語で彼の人間性そのものを、英霊足り得るレベルまで補強すればいいのだ。その材料は、インターネットに無数に存在する彼を切り抜き改造したBB先輩シリーズ、全く別の存在とビーストとを結び付ける野獣先輩新説シリーズ、そして、BB先輩シリーズを用いて構築される物語群であるBB先輩劇場。全ての野獣先輩を以てビーストを補強。イレギュラーながらサーヴァント足り得る程度の力を持たせた。

実際に可能か否かはともかく、理屈はこんなところであろう。だとすれば今のビーストは、これ以上無いほど原点から乖離した無辜の怪物だ。そもそも彼は睡眠薬を用いて強姦を敢行した水泳部の先輩でもなければ、空手部にて先輩と共謀し後輩をレイプした強姦魔でも無い。当然体中に銃火器が詰まっている訳も無ければ、金箔の貼られた機械に変化するはずもない。

—— 本来の彼は、ごく普通の、TDNホモビ男優だったはずなのだから。

「……所長」

「なによ」

「コイツは確かに良く分からないけど、決して完全でなかった召喚システムから偶然召喚出来た、襲っても来ない戦えるサーヴァント。それだけ出来て、文句を言うのは筋違いだと思う」

「べ、別に文句なんて言ってないわ……」

そのビーストはというと、何処からか赤マルとライターを取り出し涅槃顔を晒していた。あれも確か何かのBBだったな。

「気持ちいい。やっぱ僕は王道を征く——」

「赤マルが王道なのか。いや、未成年だから分からないけども」

「医療班の大人としては一応、止めといたほうが良いと警鐘を鳴らしておくよー」

ビーストはふとこちらを向いた。不機嫌そうではあるが、確か彼の振り向き素材はインタビューの時の上目遣いのものくらいだった様な気がする。手を差し伸べた。

「——よろしくな。ビースト」

「……ウン」

これが、オレとビーストの始まりだった。

「……野獣先輩。2010年代からネットで異様に流行ったホモビ男優で、その真名は不明。真夏の夜の淫夢つつうカテゴリーの顔みたいなもんだった」

今にも暴れ出しそうなほど不機嫌な顔になりながら、呪詛の様にそれを紡ぐ、ケルトの大英雄クローリン。キャスターとして現界している、はぐれサーヴァントらしい。

「ったく。サーヴァントには現代知識が付与されるらしいけどよ。はつきり言っちゃまうが、今までで最低最悪の現代知識だ。現代人って何考えてるか分かんねーな」

「ケルトも中々キテると思うけど、その辺りは文化の相違で割り切れ  
ば良いと思う」

「ケツ。言いやがる」

クーフリーンが言うには、知識としての野獣先輩は聖杯によって与  
えられるようだ。その意味する所は、これから出会うサーヴァント  
全てが”真夏の夜の淫夢”を知っているという事。真名が分からな  
いのは救いだが、その正体を隠すことは限りなく難しいだろう。普通  
の聖杯戦争で万が一召喚してしまえば、その神秘の薄さも相まって普  
通の魔術師に撃破されかねない。ピーキーでイレギュラーなサー  
ヴァントだ。

「先輩！ ドクター！ 所長が、所長が泡吹いて倒れてます！」

「……ちよつと刺激が強すぎたかな」

「オオン！ アオオン！」

「悲しんでくれてるのか。人は見た目に寄らないな」

## オレルアンにて。竜の魔女と

ある者は言った。あの悲劇の聖女が憎悪を抱かぬはずがない。自身を裏切りし祖国に、煉獄が如き憤怒を向けぬはずがないと。偏見はやがて虚なる影を生んだ。影は自らが望まれた通りに振る舞い、オレルアンを恐怖のどん底に陥れた。聖女が決して辿り着くはずもない、人に造られし英霊。

「人生を他者に否定され改竄され、好き放題言われて……クク。本当に哀れね、貴方も。私も」

ビーストはどうだろうか。彼の本体がTDNホモビ男優であることは自明である。それ以外の要素は全て、他者に付け加えられたもの。身長と体重はインタビューでの自己申告であるが、田所浩治あるいは浩二という名は、真夏の夜の淫夢が知れ渡った頃に起きた、田所という姓を持つ性犯罪者の名を継ぎ足されたに過ぎない。

「んにやび。やっぱり自分が一番ですよね」

ビーストを一言で表すならばそれこそ、『人に造られし真作無き英霊』であろう。彼はその骨子以外の全てを他者に形作られた存在。真の姿と呼べるものは、最早何処にも存在し得ない。

——彼女とビーストは、何処か似通っている。

「先輩。あの汚いのと同列にするのはまずいですよ」

長い旅路を経て、すっかり毒舌と化してしまったマシユ。個人的には、ビーストに慣れてくれた事に一抹の安堵を覚える。怯えられてはたまったものではない。

「うーむ。これは実に面白おかしいカードですな。どちらも吾輩の著と関わりがあるというのは、何らかの因果を感じざるを得ません」

オレの隣で意気揚々と筆を走らせるシェイクスピア。ビーストを召喚して以降、召喚に成功した唯一のサーヴァントだ。彼の代表作と言えば真っ先に思い浮かぶのはハムレットやリア王、ロミオとジュリエット辺りだが、A Midsommer Night's Dream『真夏の夜の夢』だろう。個人の意見を言わせてもらいな

らば、ホモビ会社がシエイクスピアなんて知っている訳が無いから松任○由実の『真夏の夜の夢』のパロディだと考えるが。

またシエイクスピアは著作にて、ジャンヌ・ダルクを魔女として書き下ろした事があつた。多少悪いことをしたかもしれない、なんてぼそつと呟いていたが、敵として相對しているジャンヌが魔女化していると聞くとまたハッスルしていた。書き終えたら物語をマスターに真つ先に見せてやろうと意気込んでいたが、多分ジャンヌはまた愚かな田舎娘役だろう。

「期待しておりますぞービースト殿。吾輩ここで執筆活動に勤しみますから」

「ぬわああああん疲れたもおおおおおん！ 辞めたくなくなりますよ」

「……疲労を訴えている、という事でしようか。先輩どう思います？」  
「状況的にそうなんだろう」

マシユが着々と淫夢語録を取得していつているようになによりだ。根が素直なのだろう、例え個人的に相手が苦手だろうと、きちんと向き合うのはマシユの良い所だ。

ここに至るまで。ファフニールやジルをビーストは一人で屠つて来た。少々酷だが、非戦闘要員のサーヴァントが一人と防御型サーヴァントが一人では、正直援護のしようがない。

「……ファフニールを倒したのが、こんな汚物なんてね」  
「ファッ!? 頭に来ますよー!」

憤怒の表情を浮かべ身を震わすビースト。味方サイドにも散々汚物扱いされているが、敵に言われるのは我慢ならぬらしい。とはいえ彼は、例え糞アドリブを連発しようが腐っても男優<sup>アクター</sup>。心底怒り、挑発に乗る事はしないだろう。

先に動いたのはビーストだった。ビーストは珍妙なフォームで駆け出す。頭を上下に振り、陰茎を勃起させて海パンを隆起させ、右手は常に掌底を前に出す。ハッハッハッハッハッとまるで機関車の様に出す様は、およそ人と形容するのが難しいほどだ。シエイクスピアはこみ上げる笑いを堪え切れていない。



「……『吼え立てよ、我が憤怒』！」

瞬間ビーストは紅蓮の業火に包まれる。更に追い打ちとばかりに無数の黒槍が撃ち込まれた。マシユの宝具、そしてシェイクスピアの自己保存により後方への被害は最低限で済んでいるが――

「ビーストツ!!」

「バツチエ冷えてますよー!」

炎より飛び出したビーストの姿は更に変質していた。妊婦の様に膨れた腹を天井に向け涅槃顔を晒し、その体色は先ほどまでの浅黒い茶色から、目に悪いピンクと水色に変質していた。上げた足には落書きの様な眼が描かれている。

ポリゴン2GB。ボテ腹先輩BBから派生したGBであり、ポケモンのポリゴン2の能力を一時的に得る。かのポケモンの能力は弱点の少なさと超耐久力、そして自己再生。ファフニールと戦った際もその吐くブレスを、対魔力性能の低いビーストが切り抜ける際に切っ掛けとした。

これも野獣先輩のスキル『変化EX』による、自身を構成するBB全てに一瞬で変身できる能力のほんの一端。新説シリーズと呼ばれるものは、ある程度名の知られた有力説で無ければ能力の一端しか得られず、変化に時間がかかるため、基本は内蔵したBBを用いる戦闘を行っている。

「ホラホラホラホラホラ!!」

飛来したビーストは再び変化し、無数の腕を顕現して怒濤の拳撃を浴びせる。だがその攻撃は、ジャンヌ・オルタにあっけなく振り払われてしまった。野獣ラッシュBBはかませとはいえ、見掛け倒しにも程がある。

「ビースト! 令呪を以て命ずる、宝具を使用しろ!」

「ファツ!!」

ビーストは驚愕するが、すぐに従った。先ほどまでとは打って変わって、威風堂々と、ねっとり歩を進めるビースト。纏う雰囲気すら違って見えた。ジャンヌ・オルタもそれを感じ取り、警戒する。

「まずウチさあ。屋上、あんだけど――『焼いてかない』?」

「嗚呼、良いっすね」

野獸先輩の宝具の発動条件は特殊で、対象の同意を必要とする。対象の同意を得て初めて、周囲の生命体全てを、彼の領域へ引きずり込むことが可能になる。同意を得る相手は一人で構わない。

ならば結論は至ってシンプルだ。マスターたるオレが了承するだけで何の問題もなくそれは発動する。一瞬世界は、青一色に塗り潰された。

やがてジャンヌ・オルタが目を見開き驚愕する。そこに広がるのはオルレアンの城などではなく、東京都世田谷区北沢に存在するコート・コポーレーションの屋上。曇天の空と蟬兄貴の迫真の演技が光る。それは何千万回と再生され、幾度となく消失を繰り返しても不死鳥の如く復活した、真夏の夜の淫夢を見たすべての人間の心に焼き付きし心象風景。

「こ、固有結界!?! そんな、馬鹿な」

『よんしょう・やじゅうとかしたせんばい第四章・野獸と化した先輩』は、ジャンヌ・オルタが言うように固有結界。一つ注釈を付け加えるならば、『体内展開型の固有結界』だ。体内展開であるから抑止力の影響は受けず、ビースト程度の魔力でも、こんな未熟なマスターの魔力でも長時間の展開が可能となる。

一瞬展開された青。あれは何も描かれていないブルーバックを継ぎ接ぎに展開したものであり、当然ビーストの本体でもある。変幻自在なビーストならではの、強引な展開だ。

「+悔い改めて+」

ビーストの一言に、ジャンヌ・オルタは歯噛みをする。先ほどの『焼いてかない?』という発言、全身を焦がすような熱気の中でのその一言は、ジャンヌ・ダルクという人物にとっては強烈な挑発になり得る。本来の聖女であれば立ち止まれたであろうが、『自分を焼き殺した者全てを恨む事を強いられている』今のジャンヌ・オルタに、乗らないという選択肢は存在しなかった。

激昂したまま旗を振るうジャンヌ・オルタ。それを刀による斬撃でいなしていくビースト。一瞬見出したジャンヌ・オルタの隙に放ったのは激烈な蹴り上げ、邪翼崩天刃。大きく吹っ飛ばされた彼女だがま

だ体力は尽きていないようだ。

「せ、先輩……」

「む。限界ですか？　もう少しの辛抱ですぞ」

……サーヴァントの抵抗すら貫いて、じりじりと体力を削る固有結界だ。そんな中にマスターが入って、無事でいられる道理はない。だがまだ、我慢が出来ない範疇ではない。皮膚がじりじりと焼けるように痛いのは、オイル無しで焼き上げる為に出力を上げている為。

「じゃけん夜行きましようね」

何気なくビーストが発した一言。その次に放たれた斬撃は、それまでのものとは次元が違っていた。空中のジャンヌ・オルタを空間ごと引き裂き、そこで一旦固有結界は暗転した――

「加熱した欲望は、ついに危険な領域へと突入する――！」

シェイクスピアが朗読調で語っている内に視界が帰って来た。今度は地下室である。先ほどまでの身を焼き焦がすような暑さはもう既に無い。

ジャンヌ・オルタはベッドに寝かされて拘束されていたが、意識はあった。睡眠薬を混入したアイスティーを盛っていないから当然ではあるが。ただ、もがく程度で抜け出せる拘束ではなかったようだ。

「キツかったすねー今日は」

「よくやったビースト」

「アーイキソ」

この地下室へ飛ぶには条件がある。敵対者の精神が混濁する、あるいは敵対者の体力が、拘束を解けないレベルまで損耗しているとビーストが判断したとき。今回は後者だった。

つまりは、この地下室へと飛んだ時点で勝敗はほぼ決しているのだ。後は素直にとどめを刺すだけなのだが、今度はシェイクスピアが止まらない。何故か、負けた相手に感想を聞く。ただそれだけの為だ。

「ふむふむ。見事に負けてしまった訳だが。感想はどうかね？　是非お聞かせ願いたい」

「……早く殺しなさいよ。それで、この特異点も終わりなんですから」「感想になっていないではないか、ん?」

ギリギリと歯音を立てるジャンヌ・オルタ。  
ふと気になる事が脳裏に浮かんだ。

「ところでジャンヌ・オルタ。聞いておきたいんだけど」

「……話す事なんてない」

「いや。野獣先輩を知ってるってことは、真夏の夜の淫夢も知ってるってことで。つまりそこで行われた行為も知ってるはずだよね?」

ジャンヌ・オルタは一瞬言われた事の意味が分からなかったようだが、やがて理解したのか白い顔を耳先まで真っ赤にして抗議し始めた。

「ち、ちち、知識だけ! 知識だけです!」

「へえー……」

「流石吾輩を召喚せしめしマスター、何と面白おかしい着眼点! これは後で白い方のジャンヌ・ダルクにも詳しく聞かねばなりませんなあ! ハッハッハ!」

「……あーもう! 早く、早く殺しなさいよ! 私何か悪い事した!? ねえ、ここままでされるほど悪い事した!」

「……ビーストさん」

「ハイ」

「その、これは……止めた方が良くないでしょうか」

「……駄目みたいです」

その後、オレの魔力が尽きるまで質問攻めにした。そしてシエイクスピアはオレルアン編の執筆を終えた後、BB先輩劇場を作る様になった。シエイクスピア（淫夢）。

カルデアにて。知将と

「誰の許しを得て服など着ている。獣め」

「オオン！ アオオン！」

跪き野太い喘ぎ声を上げるビーストを見下ろす金色の英雄王は、ソファにもたれ掛かりながら、チラリとデスクにあった紙へと目を向けた。

「そのの貴様。マシユといったな」

「ひっ……」

「この獣の服を脱がせ。あくせよ」

ニヤリと邪悪な笑みを浮かべて見せる英雄王。対するマシユは猛禽に睨まれた小動物が如く縮こまり震えていた。

「……いや待てよ。止めだ。脱がすのはそのの、『選ばれなくてほっと胸を撫で下ろした』貴様だ」

「わ、吾輩!?!」

戸惑うシェイクスピア（淫夢）。確かに何一つ失点の無い可愛らしい女の子に罰ゲームを任せた上でほっと息をつく様な者には、それこそ罰が必要だろう。例え彼が脚本を書いたとして、そんな登場人物がいれば悲劇、喜劇に問わずそれなりの結末を用意する事だろう。観客のカタルシスの為に。

「……凡夫め」

「ぐうっ!?!」

普段他者を呼ぶ際には雑種という言葉を使うギルガメッシュが、凡夫と口にした。即ちそれが最も効果的にシェイクスピアの自尊心にダメージを与えられるという確信を持つての事だ。

「仮にも演者の端くれなれば、我を楽しませるべく疾く演じよ。あくせよ」

「ぐ、後生な！ この視界に入れただけで異臭を放つ、中世パリの擬人化の様な男の服をなど……」

「ロンドンも似たようなものであったようだが。些末な事だ、あくせよ」

「せ、先輩——！ 助けて、先輩——！」

マシユが継るような声で助けを求めていた。超豪華メンツによる真夏の夜の淫夢一章再現は見ている分には中々に楽しいが、あいにくオレはロマンとダヴィンチちゃんに呼び出されている身だ。いつまでも寸劇を眺めている訳にもいかない。フオウ君を連れて、その場をそそくさと立ち去った。

「やれやれ。ようやく召喚システムが機能したのかと思っただけどね」  
「いやいやちよつと待ってダヴィンチちゃん。召喚自体は成功してるんだ、それも飛び切り強大な英霊の」

「とは言うけど、本人が『戦う意思はない』なんて言うんだ。これは失敗と取っていいんじゃないか」

「いやだからそれは……あくまで召喚に応じた英霊個々の話であってハード面の不備は——」

「そこが発想の穴だ。むしろ、『戦う意思のない』サーヴァントばかりが召喚されるという可能性を考慮に入れるべき——つと。来たみたいだね」

ギルガメッシュは召喚時に、戦う意思はないと断じた。この戦いに特別興味も無ければ、顛末も見えている。我は主賓の席にて傍観に徹する、と。

「……英雄王の件は仕方ない。次を見据えよう」

「前向きだねえ君は。普通ならもつと発狂してもおかしくない、中々絶望的な状況だよ？」

「なんだかんだ、どうにかなってるので。そこまで絶望的ではないです」

戦闘員は確かにビーストとマシユ、そしてクーフリーンくらいだ。シェイクスピアはカルデアでPCの前に座りBB劇場を作り、ギルガメッシュは暇そうにしているが、一向にカルデアから出ようとしてない。それでも何とか、第一の特異点は解決できた。

「……召喚、試してみるかい？」

「はい」

「もしかしたらギルガメッシュの召喚を経て何か変化があったかもしれないからね」

「ポッチャマ……」

ロマンもダヴィンチも、驚愕を隠し切れない。きたない髭に五厘刈りの頭、上下の下着は白の、何の変哲もない一般人の様な外見。まるで糸が切れた人形のようにへたりと座り込み、口をポカンと開けて座り込んでいる。

だがそれでも――

【真名】 三浦

【クラス】 ライダー

【性別】 男

【身長・体重】 21歳 176cm・78kg

【属性】 混沌・中庸

【ステータス】

筋力 B 耐久 B

敏捷 D 魔力 D

幸運 A 宝具 B

【スキル】

対魔力：D

騎乗：A―（MUR肉のみAランクで行使出来る。他のものに対してはE―）

迫真空手：C

便乗：A

本来持ち得ないスキルも、他人が使用している間だけ自分も行使出

来る。

該当するスキルは騎乗、剣術、芸術、カリスマ、軍略、等。

ランクA以上ならば、肉体面での負荷（神性など）すら獲得できる。

理性蒸発：C―

蒸発している期間に波があり、最低でスキル無し相当まで変化する。

天賦の叡智：A

前人未踏の領域へ辿り着いた英霊に匹敵するほどの才能、観察眼、そして思考速度。人数を問わない戦略眼と不屈を得る。現在はスキル理性蒸発により機能していない。

【宝具】

『MUR肉』

肌色の珍妙な生き物。魔獣。池沼時の自身と同程度の知能を有する。

『誘惑のラビリンス』

二人の友、そして自らの師範を召集する。ただしこの宝具はあくまで召集を行うのみ。

——戦えない性能は、していないッ！

「はえ〜……すつこいポジティブ」

「馬鹿言ってる場合じゃないよロマン。これは明らかに、イレギュラーな英霊だ。待っていたまえ、少々解析する」

「それにしても、MURかあ」

淫夢厨である可能性が高いロマンがそんな事をぼやく。三浦先輩、『BABYLONSTAGE27 誘惑のラビリンス』の第三章、空手部・性の裏技にてビースト（その時の役柄名は鈴木だった）と共演したホモビ男優である。その時はビーストの糞アドリブに翻弄され、便乗と強引な話の進め方しか出来なかった。ビーストと共演している以上確かに知名度は高いが、戦闘のイメージはあまりないキャラクターだ……

「また外れか……英雄王クラスまでは望まないけど、せめて戦闘能力



の高いサーヴァントが欲しいね。戦いは激しくなるばかりだし」  
「——そうだよ」

先ほどまでの呆けていた無精髭の男は何処へやら。今そこにいるのは、白のポロシャツを着た、きりつとした眼差しを此方へ向ける青年であった。先ほどまでと纏うオーラが余りにも違う。

「先ほどの無礼は許してほしいゾ」

「もしかして、その状態が君の本調子なのか？」

「そうだよ。理性蒸発が機能していない、次の波が来るまでの短い間ゾ。今の内に、英霊の立場から一通り説明しておくゾ……まずこの召喚システムだけど、既に修復不可能なレベルで変質してるゾ」

「そ、そんな馬鹿な！」

真つ先にロマンが反論した。

「英霊の召喚には成功している、現に今君だっつてこうして」

「召喚可能なサーヴァントがほんのごく一部、特定のサーヴァントに限定されてしまっているゾ。多分この召喚システムの、本来のスペックからは遥かに遠ざかっている。正常と呼ぶには少々苦しいゾ」

「ごく一部……まさか！ ビーストに関連する人物しか呼べないようになっていると言っても言うのか!？」

ダヴィンチちゃんの推測を、MURは首を縦に振り肯定した。

「ご明察ゾ。正確には、”真夏の夜の淫夢”というカテゴリに関連した存在以外の召喚が不可能となっているゾ」

「……そんな」

「きっかけはやっぱり、ビーストの召喚？」

「飲み込みが早いマスターで助かるゾ……そもそも召喚システムは、エクストラクラスであるビーストの召喚に対応してなかったんだと思うゾ。それも今回のビーストは飛び切りのイレギュラーサーヴァント。召喚の際に、システムにダメージを負わせるくらいに」

「拳突つ込まれ過ぎて尻穴ガバガバになったみたいなの？」

「ちよつと例えが汚すぎるんじゃないかなあ！」

「素晴らしい例えゾマスター」

「ええっ!? それでいいの!？」

ロマンのツツコミが冴え渡っているが、敢えて無視しようと思う。普段なら付き合うけど、今回の話の主役は制限時間付きだ。

「じゃあ、シエイクスピアやギルガメツシュは……」

「シエイクスピアは言うまでもなく『真夏の夜の夢』、ギルガメツシュは恐らく『バビロン』繋がりゾ」

「うわあこんな事英雄王に知られたら黙っちゃいないぞお」

ロマンはこんな事を言っているが、むしろギルガメツシュほどの男が、真夏の夜の淫夢周りの知識を与えられた上でこんな事に気づかないはずがない。むしろ勘付いてしまったからこそ興味もやる気も失せ、引き籠り宣言をしたのではないだろうか。

「待った。……君はその推論を、どうやって引き出したんだ？」

「召喚装置をちよつと観察すれば分かったゾ」

「そうか。止めて済まなかった」

……しかし修復不可能とまでできたか。おかしいとは思っていたが、事態はどうもこの場にいる全員が予想していたより遥かに深刻だったようだ。僕らには人類史がかかっているというのに。

「それと俺は、本来なら無辜の怪物として召喚されるはずだったんだゾ。でもその能力は——」

「……無辜の怪物のスキルを、持っていない」

「単純な否定であれば話は簡単だったんだゾ。ただ今回は状況が違う、これは確証は持てないけど、無辜のスキルは持っていないんじゃない。預けたんだゾ」

……仰る意味が良く分からなかった。

「俺は自分の存在の在り方を、”真夏の夜の淫夢”という物語群及びその象徴たる鈴……ビーストに依存している。つまり今の俺は、ビーストみたいな多くの人が作り上げた”三浦大先輩”ではなく、真夏の夜の淫夢という物語の”登場人物”ゾ」

「……つまり？」

「ビーストが座に帰ったら、連鎖して俺が消えてしまうかもという架空の話ゾ。一応、頭の片隅に置いていてくれ」

「……分かった。これからよろしくな、ライダー」

オレの差し出した手に応じ、握手を返してくれたライダーが露骨に昂ぶり始めた。

「……年下の後輩はいいゾ〜これ！」

「あ、あはは……」

「マシユがいたらまたブロックされてたねえ」

「……あつ」

唐突に。ライダーが声を漏らした。ライダーは頭を掻き、残念そうにこちらを見る。

「……そろそろお別れの時間みたいだゾ。次の波は多分、明日の昼下がりにくらいになりそうだゾ」

「……そっか」

「ま、待て待て！ 君はそんな不規則な事まで予測できるのか？」

「天賦の叡智でちよつとシミュレートしただけゾ」

ライダーは誇らしげにそう言った。それに食いついたのはロマンではなく、ダヴィンチちゃんだった。今まで見た事も無い真剣な面持ちを浮かべている。

「——最後に一つだけ。私の個人的な質問をいいか」

「良いゾ。なんでも聞いてくれ」

「……君は、自分の智慧が抜け落ちる瞬間が、分かるのか？」

「分かるゾ」

「……怖くはないのか？ 自分が今まで考えていた事が、途端に分からなくなる。喪失を、恐ろしいと感じた事は無いのか？」

「考えてたことも分からなくなるから大丈夫ゾ。それに——」

ライダーはそれを言葉に乗せ切る前に、糸が切れたように座り込んでしまう。髭がまた伸び、服装もいつの間にか先ほどまでの、白いシャツとパンツという格好に戻っていた。

「……ポツチャマ」

そこに、先ほどまでの叡智に溢れた青年の面影は無かった。

「……分からない。どうしてだ、何故ここまでの退化を恐れずに受け入れられる。例えもう一度手に入るものだと分かっても……」

「MURさん！」

何処からともなくビーストが現れた。ライダーは、ビーストの姿を視界に入れた途端表情を明るくし、目に見えて喜び始めた。

「おっいいゾ〜コレ！ ケツの穴舐めろ!!」

「ファツ!? これもうわかんねえな、お前どう？」

「僕も分からないや。ごめんねビースト」

「……駄目みたいですね」

それでも何だかんだ言いつつ、ビーストとライダーは仲良く何かを喋っていた。もしかしたらビーストも、口には出さずとも寂しさを感じていたかもしれない。同郷の者が来れば安心もするだろう。

「ダヴィンチちゃん」

「……なんだい？」

「オレは、なんとなく分かった気がする」

「ほう？」

「彼が何も分からなくなっても。彼が便乗しか出来なくなっても、一応は慕ってくれる人がいる。だから多分彼は、そこそ家のソファ―に飛び込むように安易に智慧を捨てられるんだと思う」

私には分からなさそうだ、天才のまま座に座れたからね。ダヴィンチちゃんは、盛り合うビーストとライダーから目を逸らさないまま、微笑みを湛えていた。

## 冬木にて。少年と

“アヴェンジャー。”復讐者”のサーヴァントであり、ビーストと同じエクストラクラス。だが彼は決して復讐者などではなかった。復讐者を考えるかもしれない相手はいるものの、実際に行った訳ではないのだ。

見るもおどましい、自分を少年と名乗る男は誰からも憎悪を向けられた。凄惨な虐待を受けている姿を見てなおそれは変わらず、彼の名自体がやがて、相手の死を望む呪詛にすらなつた。彼以外の者に向けても、彼の名が送られるようになったのだ。

——ぼくひで。ひでしね。ほんとひで。

何気ない侮蔑かられっきとした殺意まで。彼の名が口にされる度に、全ての憎しみを一身に受け、変質に変質を重ねた。憎悪は膿の如く蓄積し、やがて彼自身は微塵も持ち得なかつた”復讐者”としての資質を得る事になる。

「ひでしね」

マシユは通り魔の如く冷徹に言い放つた。

「あつ。ごめんなさい、何故だかこう、無意識に。口を突くように出てしまったので」

マシユは本来、そんな言葉を吐く人物ではない。だがそんな心優しい彼女でも抗えないほどの不快感を、その全裸に白靴下の男は放つていた。

某女優を彷彿とさせる顔面ががちりとしたガタイは、とてもではないが少年とは形容しがたい。ひで。a c c e e d 作品に”少年役として”出演していた男優であり、出演作として有名なのは『シヨタコン』や『悶絶少年 其の伍』の『少年拉致強姦』だろう。どちらも彼は”小学生”という設定の下、a c c e e d 特有のマジキチ脚本を演じさせられた。

『ひでしね——あつ。また言っちゃったや。ここまで来ると一種の呪いだね』

モニターのロマンがはっと軽妙に笑う。実際の所はアヴェンジャーのスキルである『紅顔の美少年(偽)』による魔術的効果であるから、呪いという表現は全く外れていない。当のアヴェンジャーは特に気にすることも無く、全裸のまま廃墟の町を、一年生になったらなどどほざきながらスキップで進んでいた。

今現在俺たちは、特異点冬木にレイシフトしている。といっても半ばアヴェンジャーに連れられるようにだが。好意的に見るならば、特異点に何かしらの異常でも見つけたのかと思うが……

「うー☆うー☆」

本当に何か考えているのだろうか、あれは。原作のホモビでも散々職業意識の低さを露呈させていたアヴェンジャーの事だ、人理修復という大事に対しても、持ち前の性格の悪さと意識の低さ全開で挑む事だろう。まだシエイクスピア(淫夢)の方が自分にストイックである分ましな性格かもしれない。

「ひでしね」

「それは喋れるんだな、ビースト……」

今回はマッシュとアヴェンジャーの他にビーストも連れて来た。見た目は汚いが、戦闘要員としてはこれほど優秀で汎用性の高いサーヴァントもそういない。

『——つとー！ 敵性反応だ！ 数は30以上、骸骨だよ』

ロマンから通信が入る。骸骨か。何かいるなというのは此方からも観測できていたが。というのも前方から、『ヒデシネ』という呪詛の大合唱が此方まで響いてきているからだ。骸骨にまで死ねと言われるのは、果たしてどんな気分なのだろうか。

「ビーストー！」

「白菜かけますね〜ホラホラホラホラ」

日本刀を両手で握り、淡々と骸骨に対して袈裟斬りを仕掛けていく。全ての骸骨はビーストなどお構いなしで、まるで誘蛾灯に引き寄

せられるかの様にアヴェンジャーへと向かっていた。眼中にない状態となったビーストは、さながら薪割りのように面白いほどに骸骨を斬り捨てていく――

被虐体質EX。それがアヴェンジャーの二つ目のスキルだ。他者に向けての憎悪すら自らへと向けさせる究極の自己犠牲。因果応報とまで言うつもりはないが、ここまで極まると逆に便利だ。彼が戦場に出ている間、ほぼすべての敵がアヴェンジャーを狙い、憎悪を叩き付ける。

「Hu〜く気持ちいい〜」

『それにしても、この数は流石に妙だよね』

事が終わってからロマンが呟いた。

「そうでしょうかドクター」

『うーん。なんというか、引き寄せられてたりするのかな?』

「あまり憶測で物事を語られても困るのですが、もしかしたらアヴェンジャーの被虐体質が働いたのかもしれないね」

……戦闘中アヴェンジャーを観察していたが、本当にこいつ微塵も戦う気が無いな。骸骨が近寄ってきていても無視していた。精々、斬りかかって来た骸骨の斬撃を受けて、反撃の拳を浴びせたくらいか。筋力Aであるからそれなりに強力な打撃だ。

『——つと!? 不味いぞ皆! 強大な敵性反応発生! 数は——とにかく沢山だ!』

ロマンが言うのとほぼ同時に、それは轟音を立てながら地面より湧き出た。純白のヴェールが被さった、髑髏の集合体。魂の群れ。傍から見てわかるのは、それらが抱える妄執の重さのみ。

「アアツ……アツ」

ビーストが目を見開き震えていた。ホラーには耐性が無いらしい。と、なにやら不快な音が鳴り始めたのでマシユを抱き寄せ視界を塞ぐ。

「なツ!? ちょよ、ちょつと! 先輩?」

「ブツブチュチュツツ！ プツ！ ブツチツパ！」

「せ、先輩！ これでは敵も見えません、せめて状況把握だけでも」

「ビーストが出て来た巨大亡霊にビビッて脱糞した。覚悟が出来たら離れていい」

「うっ……」

マシユは嫌悪感で顔を歪めながら、それでもすぐに僕から離れた。そして見てしまう。ビーストの周辺に撒き散らされた下痢便の沼を。彼の脱糞シーンはイチジク浣腸によるものだ、淫夢を知る者は”下痢便”以外のイメージを知らないから、こうなるのも無理はない。ブツチツパという音がなまじ有名になりすぎたのも災い的一端を担っている。

「あっ……出る……!!」

不幸は時として重なるものだ。アヴェンジャーは何か言ったかと思うと、音を立てて小便を漏らし始めた。マシユが泣きそうになりながらも、必死で亡者の集合体の方を向いて、オレを守る様に盾を構えている。

「う、うう……」

「気をしっかりもって。マシユ」

「は、はい先輩……」

女の子ばかり戦わせて自分達は失禁とは良いご身分だ。少し強制が必要だな。

「——令呪を以て命じる！ 戦え、ビースト、アヴェンジャー！」

「ファッ!？」

「やだ！ 小生やだ！」

ビーストはまだ抗戦の意志が残っていた。まるで後輩を掘っているときの様な苦悶の表情を浮かべながらも、何処からかブローニングm2重機関銃を取り出すと、銃口を上げて放ち始めた。重機関銃、といってもそれも彼を構成するBBの一つ。一種の神秘を持つのは当然であり、亡霊の集合体に対し一定のダメージを与えたように見受けられた。

一方のアヴェンジャーも、弓を使つての抗戦を行っている。筋力A



から繰り出される矢は、例え技術が伴っていなかつたとそれなりの打撃にはなつていた。

亡者の塊から生える、二対の巨大な腕が振り下ろされる。かまいたちが発生し、メンバー全員が巻き込まれた。

「アオオンー！」

「くうっ！」

「痛いんだよおおおおお!!！」

痛いのは分かつてんだよオラア！ と叫んでやりたい所だ。そもそもアヴェンジャーは耐久A+で頑健スキルも持っているから一番被ダメージが少ないはずなのに。

『ああ逃れられない!』

その場にうずくまったアヴェンジャーの眼光が光り、狂気の笑みを浮かべた。その双眸が亡者の塊を捉える。

ビーストは必死で重機関銃を乱射し、マッシュも盾での攻撃を行っているが、あの圧倒的な物量には届かない。そもそもビーストたちはその霊格や能力の低さから、超高性能の一を相手取るのが極端に苦手だ。手札はあるが全てを踏み潰されては元も子もない、という奴だ。現に今がそれかもしれない。

「ロマン。万が一には撤退を——」

『ま、待った！ 敵性反応がいきなり消え始めたぞ!?!』

アヴェンジャーの全身に文字が浮かび上がる。日本語によるひでしねという四文字が、まるで紋様の様に刻まれていった。文字が刻まれる度に亡者の塊は縮小していき、やがて跡形も無く消え去った。

「……ぼくひで」

すべてが終わった後、アヴェンジャーの全身から紋様が消え失せた。

「な、一体……なにが?」

「一旦帰還する。ロマン、お願い」

『あ、ああ。分かった』

——こうして冬木での探索は、良く分からないうちに終了した。残ったのはマッシュの心的疲労だけだ。

「結論から言うよ。アヴェンジャーは、あの亡者の群れの憎しみを食い尽くした」

ダヴィンチちゃんの分析によると、それがアヴェンジャーの能力らしい。向けられた憎悪を、自己回復ついでに食らい尽くす。

「本来憎しみなんてね、八つ当たりでどうこうなるもんじゃないんだ。でもアヴェンジャーに対しては……」

「肩代わりしたのか？ 全部」

「どつちかというと、散々恨み辛みをぶつけてスッキリしたと言った方がいいかもね。つまりはサンドバッグさ」

怨霊なんてものはつまり、何か心残りがあるから地上に縛られている。ならそれを根こそぎ奪われれば？ 当然魂はあるべき場所へ帰るだろう。復讐心を振り所にしている者がいれば、その支えも根こそぎ奪われれば存在も危うい。

「言ってしまうば、対復讐宝具。宝具と呼ぶには特殊過ぎるね」

つくづくイレギュラーなサーヴァントだ。マナプリに変えてやりたい。それでも使い所は見つかった以上、使いこなしてみせるのがオレに課された役目なんだろう。

「……やっぱりあれの相手をずっとするのはしんどい」

「ははは。それも含めてそろそろ、彼が出て来るといいね」

ロマンがそんな事を言う。ああ、アヴェンジャーをまともにしなきゃ倒せるのは、原典に沿って考えるならあの人くらいだろう。彼ならば戦闘能力も高いだろうし、申し分ない。



ら繋がりが無かったものの、空手を指導している事から彼らの師範とされた人物である。それは数々のBB劇場で採用されてきた設定であり、原典へと食い込んだ形になっていた。彼もMURの宝具『誘惑のラビリンス』に招かれたサーヴァントである。

AKYSに話しかけられた男は答えるでもなく、眉間にしわを寄せながら紫煙を燻らせていた。土足で畳の上に立っている、赤いコートを羽織った彼はロードIIエルメロイ二世。この場に招かれし、敵対者だ。

「風呂でも入るか？」

「遠慮させて頂く。出来れば風呂なんぞより、椅子を用意して頂きたいものだが」

「なんで椅子なんか用意する必要はあるんですか。ここ畳部屋ですよ？」

KMRが吐き捨てるように言うと、エルメロイ二世はますますもって不機嫌を募らせていった。

「これだから……」

悪態を突きながらも周囲の観察を怠るエルメロイ二世ではなかった。とはいっても此処は彼にとって敵陣。そしてサーヴァントが四体、この狭い空間で自身を取り囲んでいる。今は攻撃を加えてくる気配こそないものの、撃破を狙えば一瞬。手詰まり感が強かった。

そもそも、ここに引きずり込まれる以前にこれだけのサーヴァント集団に囲まれた時点で、エルメロイ二世の当初の計画は殆ど破綻していたのだ。

「……ただ、君達のマスターをここへ連れ込まなかったのは、君らにとって最大の負け筋だがな」

AKYSは内心困っていた。マスター、正確には自分を召集したMURのマスターであるが、彼ははぐれサーヴァントであるエルメロイ二世を説得し、味方に付けようと試みていた。が、肝心のMURが即池沼化し、相手は中々首を縦に振ろうとしない。

オレ達はアレキサンダー、そしてエルメロイⅡ世と相対した。再三に渡り背後から攻撃を仕掛けてきた連中がもし動くのならば、突如戦場に姿を現したダレイオスに注目が向けられている今だと、カルデア一の知将が読んだのだ。それは見事に的中し、結果としてオレ達にとって途轍もなく有利な状態までもつていく事が出来た。

「……ただでは通してくれなさそうだね」

黒毛の巨大馬に跨る赤毛の少年が、爽やかに笑っている。諸葛孔明はライダーが掠め取る事に成功したが、随分な余裕だ。こちらも正直負ける気がしない。オレの隣には、アサシンがいる。

「おじさんはねえ！ 君みたいな可愛いねえ、少年の悶絶顔が大好きなんだよ！」

迫真の性癖暴露をアレキサンダーへと浴びせるアサシン。その腰には日本刀がかけられていた。葛城蓮。通称、虐待おじさん。様々なレベルで幅広く活躍したホモビ男優だ。様々な作品に登場しているが、有名なのは『悶絶少年 其の伍』だろう。そう、あのひでの共演者である。この特異点にやって来る前に、召喚に成功したのだ。

「そもそも最初から、こういうのは僕のやり方じゃなかったんだ。先生には悪いけど」

アレキサンダーの纏う雰囲気が変わった。少年を姿をしているとはいえ相手は征服王、紛れもない大英雄。クラス的にも優位は取っているが、油断は禁物。

「——そうだよ、始まりの蹂躞制覇!!」

黒馬の嘶きが、蹂躞の開始を告げる。即座に動いたのはアサシンだ。アサシンは、オレを抱え上げると、一瞬で突進の軌道を回避した。まるでドラゴボールの瞬間移動の如く。今回マシユは控えに待機させていたから、必然的にオレの守りは薄くなっている。もっとも彼女がいたとして、これほどの突進を完璧に防ぐ技量があるかと言われれば危ういが。アサシンはすぐさま、何処からか取り出した二丁拳銃を連射した。だがそれは、オレ達を突破しようとするアレキサンダー

を捉えるには至らない。

「動く当たらないだろ！」

「まずい、ネロの所まで行く気か！」

ネロは未だ本陣にいる。ブーデイカも一緒にいるが、恐らく彼は止められないだろう。この場で止めねばならない、今すぐに。

「アサシン！ アレを通すな！」

「悪い子はお仕置きだどー！」

筋力不足のアサシンには酷な依頼だというのは重々承知しているが、ブケファラスの足についていけるサーヴァントなんて、この場においてたった一人だ。アサシンは瞬間移動の様な移動法で、ブケファラスの前面へと躍り出る。

「——速いね」

「オイオラー！」

空間を塗り潰すような一閃が、馬上のアレキサンダーを掠め取った。落馬したアレキサンダーは受け身を取って着地したが、深い傷を負っていた。

アサシンの持つスキル『少年特攻 A』、そして『加虐体質 EX』がこれ以上なく刺さる相手だ。相性は極めて有利、だからこそライダーをエルメロイⅡ世に当て、アサシン単騎で勝負を仕掛けるという手があった。

「YOO！」

また一瞬で間合いを詰め、横薙ぎの一閃を浴びせようとするアサシン。しかしそれは、ついに放たれる事が無かった。

天をも穿つ轟雷がアレキサンダーへと降り注ぐ。咄嗟にバックステップしたアサシンだが、こちらへ戻って来た時には全身に火傷を負っていた。

「——怒らせちゃったねえ！ 俺の事ねえ！」

……まずいな。加虐体質の副作用が既に出始めている。今のアサシンは加虐に取りつかれ、まともに判断が出来ない状態にあるだろう。しかしこの雷は——

『ゼウス・ファンダー神の祝福』。神の子としての自己認識』

土煙から現れた彼は筋骨隆々とした青年の姿になっていた。そこにはもう先ほどまでの、少年のあどけなさは残っていないものの、相も変らぬ爽やかな気風を感じ取れた。

「……まさかここで使う事になるなんてね」

彼の元にブケフアラスが走り、また騎乗する。威風堂々とした立ち振る舞いには圧倒されるばかりだ。ふとアサシンのの方を見ると、アサシンはそれを意にも介さず煙草をふかしていた。

「……アサシン？」

「全く、困ったもんじゃい」

その眼にはある程度だが、正気が宿っている。彼の『加虐体質』は少々特殊で、『少年特攻』にリンクしてその程度を変える。攻撃対象が『少年特攻』の対象である場合はA＋ランク相当、そうでない場合はDランク相当になる。非常にレアケースだが、戦闘中に対象が『少年特攻』の対象から外れたとなれば当然、アサシンは冷や水を浴びたように冷静さを取り戻す。

平たく言えば今のアレキサンダーが、彼のストライクゾーンから微妙に外れたという事だ。とはいえ完全に外れた訳でもないだろう。相手の『紅顔の美少年』はまだ残っているし、アサシンの原典から考えてもまだ許容範囲内のはずだ。

「——とはいえこれ以上『神の祝福』ゼウス・フアンダーを使われたら、力負けのリスクがある……推測だがあれにも欠点がある。アレキサンダーを、馬から降ろさないように」

「了解した。マスター」

走り出したアサシンに瞬間強化と応急手当をかける。

瞬間、再び姿も無く間合いを詰めた。場所はアレキサンダーの真ん前、疾走するブケフアラスの頭上である。

「真ん中来いよおー！」

凄まじい剣戟音。アサシンが放つ太刀筋が見えないほどの高速の斬撃に、アレキサンダーは確かに対応していた。だがその体には一つ、また一つと小さな傷が刻まれていく。僅か一秒にも満たない神速の攻防は、暴れたブケフアラスによって中断された。

今度はブケフアラスの尻に降り立ったアサシン。彼の手にはもう刀は握られていない。アサシンの、虐待おじさんの技術は多岐に渡るが、その最もたるは『格闘』である。残像が現れるほどの怒涛の蹴撃がアレキサンダーを襲った――

「工事完了です……」

「……この身体じゃ、ここまでかな」

アレキサンダーは馬を止め、アサシンはすぐに飛び降りた。今にも消滅しそうなアレキサンダーだが、その顔に後悔の色は無い。

「……『神の祝福』<sup>ゼウス・フアンダー</sup>は使わなかったな」

「君のマスターの考え通りだ。ブケフアラスに乗ったまま、『神の祝福』<sup>ゼウス・フアンダー</sup>を用いれる道理はないさ」

「そうか……」

アサシンに見届けられながら、アレキサンダーは消滅した。

「ぬわああああん疲れたもおおおおん！」

「ちかれた……」

ビーストの呑気な雄叫びが、終わりを告げる。オレはAKYSに話しかけた。

「どうだった？ AKYS」

「野郎、かの王以外に仕える気はないの一点張りだ。挙句外の気配を察して自害しやがった」

「そうか……」

エルメロイⅡ世がネロ軍の軍師に入ってくれば有り難かったんだが。はぐれサーヴァントで、アレの行いを肯定していた訳でもないから、無理な相談ではないと踏んだんだが、見込み違いだったか。仕方がない、向こうも人だ。矜持が合わない、というのはよくあることさ。

ふと見ると、AKYSとアサシンが会話していた。

「秋吉……」



「葛城、サーヴァントとやらになってもやるじゃねえか。次は俺とだな」

「冗談はよしてくれ。また今度な」

……サーヴァント同士の普通の会話というだけで、ここまでほっとするのもそうないな、全く。

それにしてももう何というか、精根尽き果てたな。そもそも軍隊に混じって移動するのがたまたまなく面倒くさい。どうせ特異点なんて後で修正されるんだ、過程よりも結果だ。

「なんかめんどくさいし、あれ使おつか。ロマン」

「ええっ!? あ、あ、あれを!? というかちよつと待った。今めんどくさいって言ったね!? やめてくれよ（絶望）」

「折角召喚出来たんだ。使わなきや損だよ? はは……」

先日召喚に成功した、召喚システムに応じた初めての女性サーヴァント。本気を出させればもう一つ特異点を生みかねないから、ロマンから使用を禁じられていた。その封をここで解く。

「……やっっちゃえ。バーサーカー」

それに応答するようにデデドンという音が鳴り、景色が暗転した。

「あれもまた、ローマに他ならぬのか」

「お、おい! ロムルス!」

レフは焦っていた。ロムルスはそれに睨まれたのみで消滅し。自身もまた同じ運命を辿ろうとしている事に。

彼らの前に相対するのは、見上げるほどの化け物であった。人の背丈ほどの顔面には言語にて表現するのも悍ましくなるほどの、心の奥底から恐怖を掻き立てられ、心肺がその活動を停止させるほどの酷さであった。かろうじて、女であるという判断が出来たレフは、それを目前に何もすることが出来なかった。

『一万円くれたら、しゃぶってあげるよ?』

「は、はははは！ サーヴァント風情が何を、ななな、なにを偉そうに！！ 私は、私は！」

全ての勇気を振り絞り、心肺を力づくで動かし続けるレフ。そうでもしなければこの怪物を前にして、生命機能の停止は避けられなかった。だがそれでも最早、彼の頭脳は正確な状況判断能力を失っている。

「私は、レフ・ライノール・フラウロス！ 七十二柱の魔神が一柱なのだ！」

魔神柱へと姿を変えたレフ。だがその醜さも悪逆たる意志も、その化け物には遥かに劣る。

瞬間、化け物の顔が真顔に戻った。

「ハ、ハハハハ！ 凡百のサーヴァントめ！ ひれ伏せ、ひれ伏せ！ ひれ伏せええ！」

だがレフの冗長も長くは続かなかった。化け物を構築する黒い胴体は、さながら世界全てを包む蛇のように変質を開始した。身長の間は瞬く間に覆り、魔神柱はただ、睨まれた蛙の様に、自分の終幕を待つより他なかった。

『しゃぶってあげるよ？』

「う、うああああああああ あ あ あ あ………アッ」

化け物、ピンキーはそのまま、魔神柱にしゃぶりついた。首を上下させる度に魔神柱は正気を失い、間もなく跡形も無く消滅した。

ローマは確かに救われた。不幸にもその光景を目撃してしまった、ぐだ男とそのサーヴァントを除く多くの男性の犠牲の果てに。決して記録には残らない、残してはならない歴史的一幕。

## 一部BBについての見解

正直ふつうのバトル淫夢書こうと思ったただけだったんだけどこんな話しなきゃいけないとは思っても無かった。バトル淫夢に原作スベックのイデオンなんて出せる訳ないだろ！

ひでしね（八つ当たり）

指摘あったらこ→こ←に随時追加していきます。

野獣先輩の設定であるBBについて、一部読者から指摘があった為こ→こ←である程度はつきりさせようと思います。こ→こ←以外で説明されている要素は軽く流して頂ければ幸いです。

感想欄で質問があった一部の先輩BBによるバランスブレイクですが、全BBはサーヴァントになった結果ある程度力が抜け落ちてるって結論にします。出力90%じゃあ、精密機器は動かせないです。これが大前提。

近代兵器については『行使している』という事実がBB内で確認できない能力に関しては、その能力を行使できない事にします。当然ジェット噴射で音速飛行とか、爆撃機からの爆撃は不可能。BBなんか横スライドで動くくらいでいいんだ上等だろ。また、先輩は全ての武器の真名を知らないという事にします。

後サイズは、ホラホラ野獣先輩BBの色変えものは一括野獣先輩と同身長、野獣先輩で構成されたものに関しては、ある程度のサイズまでは元となったものの大きさに合わせますが、流石にこれは大きいなと判断したら人サイズにします。巨大ロボサイズは無しの方で。

能力については、サーヴァントの域を超えない程度でBB元の能力を利用できます。超合金装甲はNG。

めんどくさいから結論を言うと、バランスブレイクしそうなものは全部無しです。なんらかの事情で利用できないと補完しといてください。元はここまでできつく制約しないつもりだったんですけど、指摘されちゃしょうがないね。

ついでに淫夢鯖の強さは、凜マスターの青王に偶発対面したらはつ倒される程度というのを基準として、アバウトに決定しています。あんまり強すぎても困りものだし、多少の謙虚さはね？

【真名】 無銘（野獣先輩）

【クラス】 ビースト

【性別】 不明（男性とも女性とも）

【身長・体重】 24歳 170cm 74kg

【属性】 混沌・悪

【スキル】

道具作成：C―（睡眠薬のみ）

変化：EX

無辜の怪物：A

自己改造：EX

【宝具】

『切り貼りされし我身』  
せんぱいビービースリーズ

自身の姿が利用されたBB素材。その全てがストックされている。変化を行う際はまずここにアクセスする。また彼の変化スキルでは、この中に入っていないものには変身出来ない。

『第四章・野獣と化した先輩』  
よんしょう・やじゅうとかしたせんぱい

体内展開型の固有結界。じりじりと他者の体力を削る空間。太陽に愛された等の逸話がある英霊には無効。敵の体力が一定値を下回る、または昏睡したと判断した場合、地下ステージへと移行し敵一体を束縛する。

『空手部性の裏技』  
からてぶせいのうらわざ

体内展開型の固有結界。物凄く狭い。風呂がある。リンチに最適。

お菓子の国にて。石と

「あーはい大丈夫ですよ。大丈夫」

棒読みでそう語るのは、オレの隣を歩く少女。金のロングヘアの上に黒のトンがり帽子を被り、眼鏡をかけた少女。東方projectのキャラ、霧雨魔理沙を彷彿とさせる外見で召喚に応じた彼女は、UDK。UDK姉貴とも。とうとうクツキーキャラが召喚されるようになったのだった。クラスはアーチャーである。

『魔理沙とアリスのクツキークiss』という東方二次創作動画が淫夢入りを果たしてしまった経緯は少々複雑である。端折って説明するならば、”声優の棒読みっぷりが淫夢二章に似ていた”という点から淫夢厨による同動画への突撃があった。クツキー☆という通称が存在する。その後なんやかんやあって、その動画に参加した声優が晒されたり別の人が続編を作ったりと、中々に闇の深いジャンルである。ついでにカルデアで暇をしていたシエイクスピア（淫夢）にクツキー☆を半ば無理矢理見せた所、紅魔館の場面までに舟を漕いでいた。

彼女、UDK姉貴は霧雨魔理沙役でその動画に参加していた。眼鏡は恐らく声優の特徴が入った結果であろう。

「あの。先輩、UDKさん」

「ん？」

「あれ、どうするんですか？」

マシユが諦め半分に、道の先を指さす。

「アハハハハ……」

東方projectのアリスを彷彿とさせる（といっても、原作と違いストレートヘアだが）姿の少女は微笑みを湛えながら、ファンシーでメルヘンなお菓子の国を嬉々として蹂躪していた。鬼神の如き活躍を見せる彼女はALC。HNSとも。バーサーカーというクラスを聞けばあの暴れっぷりも納得出来るものである。

「え、えー……」

同行しているイリヤには、少し刺激が強かったようだが。

「魔理沙、魔理沙……うふふ」

煌々と目を輝かせ、何の変哲もない石を振りかぶる。笑顔の書かれたビスケットゴーレムの顔面が無残にも四散し、その余力のみで一気に胴体部まで貫通。ビスケットゴーレムはその活動を停止した。

バーサーカーはアーチャーの事を、原典にある通り魔理沙と呼び執着する。その辺りは声優の性質ではなく、原典たる動画の要素が強く反映されているのだろう。意思疎通に問題がないアーチャーはともかく、バーサーカーに関しては墓穴を掘ってしまったわぬよう、きちんとデータを取り把握しておく必要がある。

「ところでアーチャーは戦わないの？」

「うえ？ あ、あたしだって戦う事はあるぜ？」

「ふーん」

分かりやすい戦闘拒否だが、特に思う所はなかった。戦闘拒否のサーヴァントに慣れ過ぎたのかもしれない。シェイクスピア、ギルガメッシュ、ひで。そうそうたる面子が今日もカルデアで、PCの前に座りながら引き籠っている。今更一人増えた所で何が変わろうか。精々女性比率が変わるといふ、統計的な変化に留まる。

「ほら、全然壊れてないよ？ 魔理沙の気持ち」

そんな事を言いながらバーサーカーが行っているのは、背を向けている一般お菓子の国民の虐殺だが。家に籠ろうとした住民は、扉ごと石に叩き潰され、背を向けて逃げれば投石によつて息の根を止められた。魔法少女石殺☆ALC。不意にそんな言霊が脳内を支配する。

虐殺を行っている彼女の言っている事が支離滅裂だがバーサーカーだから仕方がない。いや、良く分からない魑魅魍魎めいたホモビサーヴァントしか召喚できない欠陥品の召喚システムから出て来た以上、仕方がないのだ。

「……これはお菓子の城まで辿り着くのに時間がかかりそうだな」

どうもバーサーカーは、ここら一体の住居に至るまでを破壊し尽く

さないと気が済まないようだ。城の位置までは判明しているが、この速度では――

「あつ、あれ見て!」

イリヤが指さす先。城の上空付近には幾つもの影が飛翔していた。よくよく見てみるとそれはうちの穀潰し筆頭、ひでに実によく似た外見をしていた。ただその肌は紫に変色しており、てつきり青痣の類かと思つたもののそれも違った。背中からは悪魔の羽を生やし、手で顔を押しさえつけている。デビルひで、か。BB劇場では常にやられ役であつたが……これは、使えるか。

「アーチャー」

「え、なにー?」

「令呪を以て命ずる。先行して偵察を行え」

「え、なにそれは!」

アーチャーは抵抗するが、その程度の霊格で令呪に逆らおうとする浅はかさは愚かしい。それも違うな、こちらは令呪が切れた後も笑つて事が終わるといふ確証を以て運用している。ホモビサーヴァントの数少ない利点の一つとして、胸を張って言えるのはその常識人っぷりだろう。怒りっぽい、ゲス、池沼、屑など罵倒用の文言を数えればキリがないような彼らの性格だが、それも現代一般人の範疇だ。現代の倫理である程度の意志疎通が可能で、なおかつ事の重大さもキチンと理解してくれている。一部の例外が、ピンキーやALCといったバーサーカー勢であるが、正直、制御は容易い。

「無理があるでしょ!?! ちよ、もう訳分かんない! でゆわあああああああ!?!」

「すぐにわかるさ」

「せ、先輩。悪人面が出ちゃってますよ……」

箒に跨り敵陣への単独突撃を敢行するアーチャーを尻目に、バーサーカーへと声をかける。バーサーカーは破壊活動を停止した後、訝し気にこちらへと視線を返してきた。

「バーサーカー、魔理沙が捕まった。あの城へと連れていかれた」

敢えて単調な言葉で語り掛ける。

一瞬、バーサーカーの口端が垂れ、眼が大きく見開き赤く染まった瞳孔が揺らめいた。

Yetzirah  
「形成——」

何処からか、少なくとも彼女のものとない声が響く。彼女の腕は青く染まり、そこからは刃が現れる。あの宝具の真名は『罪姫・正義の柱』という、端折って説明するならばギロチンの刃である。が、彼女は絶対にかの武器の真髄に至る事は出来ない。そもそもあの武器は、石と共に世界に刻まれてはいるものの、後天的に付与された、姿形のみを真似た紛い物である。

俺達が把握しておけばいいのは、あれは『形成』<sup>Yetzirah</sup>という文言を起点に発動し、不死殺しの特性を帯びる事。その二つは動画によるイメージであるから、その宝具の特性となったのだろう。後は普通の刃物であるといった理解が、最も真に迫ったものであろう。

バーサーカーは凄まじい速度で石畳を駆け抜けていく。遥か彼方まで去った所で、アーチャーが戻って来た。

「大丈夫かアーチャー」

「はい大丈夫ですよーじゃない！」

とは言うが彼女は特にダメージを負っている様子もなかった。スキル『仕切り直し：B』を用いてさっさと帰還したのだ、当然だろう。

「イワナ、書かなかったコメント？ 仕切り直しは確かに持つてるけど乱用させるなって！」

「令呪まで使ったんだ。ちよつとくらい答えてくれてもいいだろう、追うよ」

「……よっしゃ！ やるか！」

切り替えが早いのはアーチャーの良い所だ。

「あの、あれって良いんですか？ 味方騙してますよね？」

「……先輩が言うには時には必要な事だそうです。先輩が言うには」

……二人はそのままの心優しい君達のまま在ってほしい。マシユは今後を考慮すると望み薄だが。しっかし一つ目の国からこの有り様では、先が思いやられる。ピンキーの投入も視野に入れて、根気強



く進めていくか……

## ネロ祭にて。迫真空手VSアクション三銃士（前）

かつて第二特異点が存在し、それを大量殺戮兵器キリによって封殺されたローマ。かの地を治める皇帝ネロが提案したのは、闘技大会であった。

もしカルデアに多くの英霊が力を貸していれば、こぞって参加し大盛り上がりを見せたであろうことは、想像に難くない。だがしかし、少々事情が違った。

「これより！ 第二次ネロ祭を執り行いたいと思います！」

壇上よりマシユが進行を務める。観客である一般ローマ市民によって、闘技場は歓喜に包まれた。気のせいか女性の声ばかりが聞こえるが、まだピンキーが歴史に与えた傷が癒えないのだろうか。

このカルデアは兎にも角にもイレギュラー。端から端までホモビで出来ている。偉大なる英雄譚を駆け抜けた英霊たちが、華麗なる武を振るいしのぎを削る訳でもなければ、持てる叡智全てを振り絞り美しい激戦を繰り広げた訳でもない。もしかしたらそういう世界線があったのかもしれないが。

恐らく主催者であるネロ皇帝はそんな光景を夢想していたのだろう。だが武勇はともかく、如何せんホモビサーヴァントがきたないのはどうしようもない。現に挨拶すらマシユに任せ、奥に引き籠っている。今頃は持病の頭痛に悩まされている頃だろう。

「解説席には最近全く働こうともしないシェイクスピア（淫夢）さんと、ギルガメツシユ（淫夢）さんがいます。どうぞ」

「じゃあ吾輩、ギヤラ貰って帰るから」

「ギヤラは出ません。全編ボランティアですよ」

「なんですと!? ふざけんな！（声だけ迫真）」

「貴様ら我オレの玩具でよいのだ、上等であろう」

「戦う前から戦意を削がないでください」

「マシユ。貴様随分と減らず口を叩くものだ。窓際行って……シコレ」

「シコレません」

流石マシユ。幾つもの修羅場を潜り抜けただけあって、少々のも事で怖気づかない。思えばマシユも随分と逞しくなったものだ、汚いにもセクハラにも慣れてしまったようで、少し寂しくもある。

「二戦目のカードは、『迫真空手部』VS『アクシード三銃士+』です！」

両陣営が闘技場に入場すると共に、客席から黄色い歓声が上がる。あんまりにも歪で、これからのローマの行く末を案じざるを得ないが……まあ、若い男が半分死滅して飢えているという事にしておう。

「平蓮！ 平蓮はいいですわゾ、〜！」

「ミウキムですって、それ一番言われてますことよ？」

「スズミウに決まってるんですわゾなあ……悔い改めてくださいまし」

飢えているという事にしておこう。迫真お嬢様部かな？

改めてみると、『迫真空手部』はライダー<sup>M</sup>が召集した迫真空手部の三馬鹿にAKYS師範を足したメンバー。対する『アクシード三銃士+』は例の三人にひでを加えた四人パーティ。どちらも決してバランスは悪くない。

「今回の闘技はキャスタークラスを考慮に入れ、5分の準備期間が設けられています」

「うむむ。でなければあんまりにもボロボロでございますからなあ。いや吾輩からすれば、5分でも相当ひどいとは思いますが」

解説席のシェイクスピアが愚痴るのも無理はない。ぶつちやけ五分で陣地作成を行使し、工房を作るなんて真似はそれこそ高速詠唱が必須。逆に高速神言であればオーバーなほどだが、あいにくうちに神代を生きる英霊はいない。

AKYSは相対する者達を睨みつけていた。約一名を除き、アクシード三銃士+は強豪が揃う。一瞬でも気を抜けば即座に、決着がつく事を確信していたのだろう。そしてそれは、アクシード三銃士側も

考えていること。ライダーが池沼化しているとはいえ、脅威であることに変わりはない。

「攻めるにも守るにもアレが厄介だ。まず全力であれを潰す。MURはついてこい」

「おっそうだな」

「KMRはいつも通り後方支援、鈴木は護衛だ。返事イ！」

「分かりました……」

「ハイ」

陣形を組み、万全の状態を見せつける迫真空手部。一方のアクションド三銃士はというと――

「……タクヤさん」

「蓮さんごめんなさい、ちよつと今、て、て手こずっています」

黒いグラサンをかけた男は、網掛メツシユけタンクトップに包まれた上半身のみが異様に鍛えられていた。KBTIT。某漫画家に似ている等というトンデモ風評被害から注目を浴びた、acc<sup>キヤスター</sup>eedの男優だ。ごく短い一般会話すら噛み噛みの詠唱者の屑であり、魔術に頼らない近接攻撃の手段や、条件を整えれば敵の対魔力を克服する能力を持つ、彼らしからぬ非常にバランスの良いサーヴァントだ。

「2, 30分で終わると思いますんで」

それがジョークである事をアクションド三銃士は十分に理解している。残りの待機時間を用い、更にある程度時間を稼げばそれなりのものが作れるだろう。

「葛城くん。最悪”調教部屋”は諦める事にしましょう」

「あっそうっすね」

作務衣を羽織る高身長の男はにこりと笑みを浮かべる。平野は現在、ライダーとして顕現している。だがその周りに、彼の乗り物の姿はない。

「ぼくひで」

ひでが三銃士の輪から僅かに外れた、ほんの一瞬だった。

「炎神全開!!」

「ぶち込んでやるぜ!!」

闘技場の中央から鈍い音と主に土煙が舞い上がる。上がった歓声は、轟雷と例えても過言ではない程であった。

「ひーでっしね!」「ひーでっしね!」

「ひでしね」の大合唱が響き、盛り上がりは一瞬にして絶頂へと達する。

「なっ!? ちよ、ちよつと待つてください! まだ五分経ってませんよ!・これは駄目です、ルール違反です!」

「まあまあマシユ殿」

「シェイクスピアさんは黙っててください! 止めないと(使命感)」  
「まあマシユ」

ヒートアップするマシユの肩に手を添えてやる。

「会場の熱気は最早、あらゆるものの介入すら許さないだろう。いいんじゃないか、続けても」

「……せ、先輩がそう言うなら」

「あれは策という奴だ、獣の本能に限りなく近くはあるがな」

本来ネロが座るはずであった、今は主無き黄金の椅子に座りながら、意地の悪い笑みを浮かべて見せるギルガメツシユ。そこでようやくオレは、迫真空手部の戦略を見出すことが出来た。

「ぼ……ひ、で……」

「ちっ、まだ死なねえのか!! オウラ!」

「ポツチャマ!」

「ぐふっ!」

魔力放出を行使したAKYSの迫真空手、そしてMURはそれ

に『便乗』して同威力で行使。空手部は徹底した速攻により、圧倒的な耐久を誇るひでに対し、一瞬で甚大なダメージを与えることに成功した。ひでの『被虐体質EX』は場に存在するだけで、相手の戦略を大幅に狭める。いずれにせよ沈めなければならぬ相手だった。問題は如何に速く、であり、解決策がこうだったのだ。

「ぎけんじゃねえよオイ! 誰が先攻して良いつつたオラアア!」

激昂した葛城が神速の居合を放つ。蜘蛛の巣のように浮かび上がる残光の中に、AKYSはいなかった。彼らは既に、次の獲物に取り掛かろうとしていた。

「ぐだ男。貴様はあれを可笑しいと思いはしなかったか」

「……なにを」

「真に迫る空手とやらだ。武芸が迫真でどうする。迫真の武など、見掛け倒しに過ぎん」

それは確かに、ギルガメツシュの言う事も一理ある。ただ迫真空手部というのは、確か視聴者が勝手に名付けた名前……待てよ。今の彼らの出典は、視聴者のイメージも込み込みの『真夏の夜の淫夢』という物語。AKYSが空手部の師範であるように、原典よりもイメージが優先されることだってあるのでは。

「……ギルガメツシュは、何か他に意味があるか？」

「我はな——迫真空<sup>オレ</sup>手を魔術の端くれと見た。真へと、根源へと至ろうとした術だ」

AKYSとMURが定めた目標は、後方で陣地作成を行使しているKBTTIT。万が一調教部屋なんてものが闘技場内に完成してしまえば、空手部側は一気につらくなる。現状、調教部屋の完成度は傍から見て70%ほど。妨害できる最後の機会かもしれない。

「エンジン——」

迸るほどの魔力を帯びた蹴りが空を切る。

「全開!——何っ!?!」

「あつ——」

AKYSが放った渾身の上段蹴りは、全く同じ威力によって相殺され、KBTTITの元へは届かなかった。AKYSとMURが向かい合うという異質な光景が生まれている。

「あつ店長！」

KBTITの声色が明るくなった。MURの四肢には既に幾本もの麻縄が巻き付いていた。平野店長の宝具『緊縛の縄』は、捕縛に成功した相手を自由に操ることを可能とする。今回は恐らく、便乗を発動した直後にMURを捕縛、直接AKYSへとぶつけたという事だろう。

「空手部の下衆はスケベな事しか考えないのか」

軽蔑の籠った笑みを浮かべる平野店長。だがその視線の先、AKYSの背では、既に大きく戦況が揺れ動いていた。

「ンアーツ!？」

良いように斬り結ばれる野獣。相手が敏捷で大きく勝る葛城では、得意の手数押しも出来ない。葛城の居合一振りがホラホララツシユの一撃よりも速いといえ、その絶望っぷりも理解できるだろう。野獣は変化スキルを駆使した防御で何とか生き残ってはいるが、時間の問題だ。

「鈴木！ KMR！ ツ人間の屑がこの野郎……！」

「本陣をおろそかにした結果だよ。どうする？」

「ぐっ……！」

戦闘はまだ、始まったばかりだ。

## ネロ祭にて。迫真空手VSアクシード三銃士（後）

「――秋吉先生！」

MURが言葉を発した。理性蒸発の波が去ったのだ。今そこにいるのは紛れもなく、知将MURである。

「三浦！」

「駄目だゾ先生！ 先生には向こうを助けてほしい、こっちは策がある！ 先生は、俺が生きてる限りこいつらに勝てない！」

「……ッ！」

平野が意地の悪い笑みを見せた。平野の宝具『緊縛の縄』には、筋力を参照した競合による束縛の他にもう一つ。魔力を参照した競合による、対象が保有する自由意思をトリガーとするスキルを操る事を可能とする能力がある。基礎ステータスが低いMURはまんまと平野店長の支配下にはいつてしまった。以後、束縛から逃れない限り『便乗』は平野の手の内にある。それは即ち、ひでを一瞬で屠り去った超火力の封印、そしてAKYSが持ちうる全ての高火力技の封殺を意味していた。

「……三浦、お前がどうかしろ。分かったな？」

「分かってるゾ！」

AKYSは鬼気迫る顔で背を向け、駆け出した。

「……追うかゾ？」

「そんな事はしませんよ。アナタを引きずって走るのは、少々重たいのでね」

MURは忌々し気に舌打ちを打つ。

「――だがそんな心配は、すぐにしなくていいようになります」

「平野店長！ 完成し、したつす！」

KBTITが言うや否やそれは展開された。四方10m程度の堅牢な鉄格子が彼らを内に取り込む。牢の内部は体中を締め上げるような湿気と、鼻を裂くような悪臭に満たされている。MURはすぐにその正体を、地下室における糞尿と血という答えを割り出すことが出来た。



「ようこそ、緊縛ショーへ」

「いらっしやいMURさん！」

KBTITは醜悪な笑みを浮かべながら、一枚の用紙を召喚した。KBTITの保有する宝具の一つ、『アクシード・コントラクト非合法な契約書』。サインした者の対魔力スキルを、KBTITの陣地である調教部屋内でのみ無効にする効果を持つ。

アクシードで使用された、法をガン無視した非合法なる契約書。それにサインした若者達はその後、地下室にて72時間にも渡る拷問へと身を投じる事となった。

そういつた逸話が昇華し宝具化した今、それは最早同意すら不要となっていた。真名さえ著名されていればそれだけで効力を発揮するという、悪辣極まりない契約書と化している。KBTITはこれを、自身のスキルである『芸術審美 A』により最大限に活かすことが出来る。

「今日は逆さ責め、鞭責めをしよう」

KBTITが一工程で生成した光の細紐はMURの足首を絡めとり宙吊りにする。本来ならば対魔力で無力化できるそれも、『アクシード・コントラクト非合法な契約書』により無効化出来ず、MURはただされるがままになるしかなかった。苦悶の表情を隠し切れないMUR。

「従順になるまでやるからなあ？」

鞭を持った平野とKBTITが、さながら処刑の執行人のように、MURへ歩み寄った。

「アアツ……アツ……」

地面に這いつくばる野獣の口から漏れる声は微かであった。BBの変更により外傷こそないものの、その体力は既に限界まで削ぎ落されている。

「や、やめてくれよ……」

腰を抜かしその場にへたれているKMRの前に、刀を腰に差した虐

待おじさんが歩み寄った。放たれる神速の居合は、KMRの胴に紅く一文字を描く。

「ぐっ……！」

「……全く困ったもんじゃい」

葛城は次々に斬撃を放つ。まるで鞭で虐めるように、執拗に。その太刀筋は最早、操る葛城自身すら見失いつつあった。

「……次で最後だ」

振り下ろされた刀が透き通った金属音を鳴らす。サイクロップスと化した野獣の左腕が辛うじて太刀筋を防いだのだった。葛城は野獣に、あしろう様に二、三の斬撃を浴びせた。野獣の鮮血が飛び散り、飛沫がKMRの頬にまで届く。

ついでとばかりに振り下ろされた刀が、今度は完全に破碎される。

葛城は瞬間移動（偽）により、瞬時に距離を取った。

「……葛城」

AKYSは憤怒を顔面に浮かべながらも敢えて冷静に、その名を呼んだ。先ほどの日本刀の破壊は、彼の『魔力放出』を帯びた蹴りによるものだ。

「秋吉か」

「てめえ……なんだその、闇討ちみてえな剣術は！　そこまで堕ちたか、葛城!?!」

我慢出来ずに叫ぶAKYS。対する葛城は、笑っていないかった。

「堕ちた？　違う。俺の剣は元来こうなんだ。俺は *accel* の、虐待おじさんなんだからな」

自嘲気味に語った葛城はまた瞬間移動を行う。

「戊辰——オオンー！」

顔を蹴り飛ばされ、無様に地面を転がる野獣。それだけの一撃を放ちながらも葛城は、全く隙を見せず、直立の姿勢を崩さない。

「打ってこい打ってこい！」

「わざわざ出向くものか。行けば空手の餌食だ」

葛城は止まらない。今度はKMRに標的を定め、執拗に蹴撃を浴びせていく。そのあまりの速さに、KMRの傍にいたAKYSすらも碌

に追いつけないのが実情だ。AKYSの脳裏に、『炎神全開』を発動すれば追うくらいは出来るのではという推測が一瞬よぎるが、即座に否定する。これ以上の『炎神全開』は、肉体的にも今後の戦闘にすら大きく影響を及ぼすだろう。

「——オラァー！」

AKYSの一瞬の思索が、その隙を作り出してしまったといっても過言ではないだろう。

「木村！」

「え……」

満身創痍のKMRへと葛城の足が吸い込まれるように伸びていった。

——よお、どうしたホモの兄ちゃん。

——やめてくれよ。

——もう終わりか？

——やめてくれよ……！

「アァン!？」

葛城が驚くのも無理はない。今まで何ら反撃に移る気配すら見せなかったKMRが、自身の蹴りを片手で受け止めたのだ。

「おい。お楽しみはこれからだぞ?」

強気の笑みを見せるKMRの手は軋み、音を立てているが、彼は全く気にする気配も見せない。その異常さを葛城が認識したのは、瞬間移動（偽）で拘束から逃れ、距離を取ってからの事だった。まず纏うオーラが明らかに違っている。AKYSなどとは違うものだが、確かに戦いに身を置く者のそれであった。先ほどまでのように怯える事も、迫真空手の構えを取る事すらない。

「——『創造』」

KMRの傍らから一本の槍が現れ、射出された。葛城は紙一重で躲そうとしたものの、”回避行動をとった直前に軌道を変えた”それに

対応できなかつた。槍は葛城の左腕へと食らいつき、肉を抉り飛ばした。

槍。それはKMRの起源である『穿ち』に由来する。本来根源に定められし彼の方向性は『穿ち』、つまりS役であるのだ。だがKMRはそれを目指さなかつた。自身の起源に背を向け師匠、そして先輩たちと共に、迫真空手の道へと足を踏み入れた——はずだった。

超覚醒木村。彼はつまるところ、起源覚醒者としての一側面に過ぎないのだ。

「——嗚呼、良いっすねエツ！」

葛城は目を血走らせ、闘争本能を剥き出しにしながら襲い掛か——ろうとするも、すぐに立ち止まって距離を置き、転がっていた野獣に對し蹴りを放つ。その様は明らかに、何かを我慢しているように映つた。

「邪劍——夜！」

息も絶え絶えな野獣は、不安定な格好から『邪劍・夜』を発現し、葛城の蹴りを防いでみせた。葛城はまた瞬間移動（偽）で大きく距離を取り、機会を窺おうとした。

——そこで、彼の視界から迫真空手部が姿を消した。

「私を愉しませるんだろう？」

ギチギチと音を鳴らしながら、重厚な鉛の塊を乗せられた台車はひとりでに、緊縛対象から離れるように進む。MURの全身が縄で縛られ、計6台の台車が彼を締め上げていた。想像を絶する激痛が全身を襲つてなお、MURは屈さない。

「まだ……まだ……」

「マジむかつくなコイツ……店長、どうしますか？」

「けしからん……」

平野が握っていた鞭を手放し、MURと目と鼻の先の場所まで近

寄った。そして、何の躊躇もない右腕が振るわれる。平野源五郎が撮影中に放ちまくった伝家の宝刀、一切の慈悲もないガチビンタ。それはある種宝具といっても過言ではない。先ほどまで意識を保っていたMURの意識が、脳へのダメージによって混濁する。波もすぐそこまで来ていた。

「あ……あ……」

「こいつ、笑っちゃうぜ！ 最後の一発くれてやるよ！」

心地いいくらいの鞭の音が二発、牢内に反響した。

「――屑どもがアツ！」

怒気の籠った罵声と共に、刃と錯覚するほどの一閃がKB TITを襲う。

「オツス……お願いしまーす！」

瀕死ながらも全身を奮い立たせ、平野に対し『邪剣・夜』を振るう野獣。その後方には超覚醒木村が控えていた。全てを真っ先に理解したのは、MURを支配下に置いていた平野だった。

『俺が生きている限り』。全ては知将MURのこの一言に通じていた。MURが生きている限り、魔力放出と便乗によるシーソーゲームが繰り返られるだけ。ならば空手部側はどうするか、『MURが脱落したタイミングで』攻撃を仕掛ければいいのか。

この『調教部屋』は、外界との隔絶という効果も持つ。外から侵入しようとするのは見かけの割に限りなく難しいのだ。物理的な手段に頼るのみではまず不可能なほどに。その調教部屋への侵入経路としてMURは自身の宝具『誘惑のラビリンズ』、空手部の召集宝具を用いるという結論に至った。

つまり彼が狙ったのは『自分が脱落する直前に、空手部を調教部屋内に雪崩れ込ませ奇襲する』という作戦だ。そしてそれは今まさに、実践されている。

MURはもう使えない。AKYSの超高出力魔力放出を遮る方法がない。

今すぐ葛城を頼る事は出来ない。そもそも葛城は先ほどまで、外で

敵の後衛と交戦しており、この一瞬のタイムラグに対応できていない。

調教部屋での籠城戦は瓦解した。

平野は袖から縄を展開し、手近な野獣を拘束する。だが野獣はニヤリと笑い

「KMRア……い！」

「……ウオラー！」

超覚醒木村の握る槍は野獣諸共、平野を『穿った』。だがそこで、KMRの魔力は完全に底を尽く。もう一つの人格にして起源覚醒者である超覚醒木村は、その時点で表の人格であるKMRへとバトンを渡さざるを得なかった。

「……え」

そこでKMRが目にしたのは、自らの握る槍が野獣を貫いている様。意識もない内に行われた突然の出来事に、彼の脳内は白く塗りつぶされた。

絶対的優勢に生まれた一瞬の間。それこそが暗殺者<sup>アサシン</sup>にとって、最も狙いやすいものだ。

持ち前の神速で戦場へと駆け付けた葛城は、野獣が握っていた『邪剣・夜』を奪い去り、返す刀でKMRを斬り付けた。傷口から勢いよく鮮血が噴き上がる。元々極限まで追い詰められていたKMRは、その一撃を受けてなお立ち上がる気力を持ち得なかった。

『邪剣・夜』を振り、飛沫を払った葛城は膝をつき、平野を抱え上げる。

「平野店長……」

「葛城……」

「待っていてください店長。必ず勝利を——」

「……馬鹿者」

「!!」

葛城は目を大きく見開く。

「……作戦など気にするな。お前は、好きなようにやれ」  
「店長……い！」

それが、店長の発した最後の言葉だった。葛城は平野を地面へと置き、邪剣・夜を振るう。

AKYSの拳と自身の調教部屋に板挟みとなったKBTITは、ゆっくりと崩れ落ちた。それと同時に調教部屋は跡形もなく消え失せる。

「……お互い、最後だな。葛城」

「……ああ」

AKYSはそこで、葛城ライバルの表情の変化に気づいた。彼は、葛城の顔には先ほどまで無かった笑みが戻っていた。

次に放つのが最後の一撃。両者ともそれを言葉に乗せずとも理解したのか、凄まじい程の闘気を放つ。

「聖拳……」

AKYSの放出した魔力が全て彼の右拳へと集中する。それは純白のオーラと化する。

「邪剣……」

葛城の握る邪剣・夜が、闇夜の如き漆黒のオーラを放つ。

「――『月』!!」

「――『夜』!!」

激突は一瞬であった。互いのオーラが喰らい合い、白と黒は塗り潰し合った。オーラ同士がギチギチと物理的な音を立てるその様は、正に鏝迫り合いだった。

葛城。

なんだ。

何故、打ち合ってくれた。

――剣に。暗殺者アサシンの剣にケジメをつけたいと思ったんだ。  
そうか。

「――案外、気にしてたんだな」

ふつと笑い崩れ落ちるAKYS。だがその前に、葛城は地面に伏せていた。観客、そして大会進行役であるマシユも、一瞬何が起こったのか理解が追い付かなかったものの――

「しよ、勝者！・ 迫真空手部です!!」

一瞬の沈黙が嘘のように、観客席がどつと沸いた。

「うむ。皆聞け！ 余は色々考えたが、やはりこのきたないのは余の闘技場にそぐわないと思う」

試合後。ようやく現れたネロがそう告げると、会場からはブーイングの嵐が起こった。

「という訳でだ！ 終わり！ 閉廷！ 皆解散！」

ネロにそう言われては、カルデアとしては従わざるをえまい。こうして僅か一試合を以て、ネロ祭は他ならぬネロの手で幕を下ろしたのだった。

『そういえばさ』

『どうしたのロマン』

『いやさ。バビロンといえばバビロニアもそうだけど、大淫婦バビロンもあるよね』

ホログラムに移るロマンは満面の笑みを浮かべていた。そこでなんとなく察する。大淫婦バビロン、聖書の黙示録で登場した、古代ローマの暴君を暗喩するものとも。特にキリスト教を迫害したネロなどは正に――あつ。

《葛城蓮の宝具が解放されました》

《秋吉亮の宝具が解放されました》



## カルデアにて。セイバーと

「誰が概念礼装なぞ出て良いと言った!!」

半裸のギルガメッシュが召喚システムに、怒号と王の財宝から取り出した聖晶石をぶつける。その聖晶石の捧げ方や、ドラムのポップコーンをそのままゴミ箱へ投入するかの如き雑さである。しかしその結果は、植木鉢だのアイスティーの入ったガラスコップなどの、最早礼装でも何でもない日用品の数々が排出されるばかり。ひどいなと率直に感じたのは、一定の割合で投入した聖晶石と排出されるものの比率が合わないのだ。ざっと観察したところで二割くらいである。

「ギ、ギルガメッシュ。そろそろ止めた方が」

「ええい我に齒向かうなよ雑種！ 馬鹿野郎お前、我は勝つぞお前！」  
「駄目です先輩。全く聞いてません」

ギルガメッシュがいつになくヒートアップしているのには訳があった。そう、始まりは確か……ロマンの一言だったか。

『召喚システムの修復を頑張ってみたんだけど。今の召喚システムなら、アルトリア・ペンドラゴンが召喚出来るかもしれない』

何の確証もない、であろうとオレは勝手に思っているが。ともかくロマンが晴れ晴れとした笑顔で口走ったその一言が、ギルガメッシュの蒐集家の心に火をつけた。その結果が目の前暴走だ。事の元凶であるドクターは部屋の隅っこで呆然としている。

10分くらいそうしていると、召喚システムに変化があった。召喚前にシステム周辺を回転する光球が金色を帯びたのだ。かつてギルガメッシュを召喚した際も発したこの光。さしもの英雄王の表情も晴れる。

「よくぞ余を選んだ！ 違いの分かるマスター……うむ？」

召喚に応じたお目当ての人物に瓜二つの少女は、自分の真正面に

たギルガメツシユを見て、顔を引きつらせる。

「あ、マスターはこっちだよ」

「ネロさん。この人がマスターです」

「お、おおそうかそうか！ いやまあ良かった！」

嬉しそうにこちらへ駆け寄ってくる様は可愛らしい。だがその薔薇の様な笑みと反比例するように、ギルガメツシユの表情は静かに怒り、目を血走らせていた。普段から激昂しっぱなしの彼であるが、あれだけ身の危険を感じる怒り方は見た事が無い。無機質に投入されていく石のぶつかり合う音のみが、部屋の中に反響していた。

「……ネロ。他のサーヴァントの所に挨拶巡りに行くのはどう？ マシユ、連れて行って」

「う、うむ。そうだな。何というか、すぐに去った方が良さそうな気がする」

「え……でもそれじゃ先輩、とドクターが」

「いざとなったら令呪使うから。早く」

マシユとネロは避難させる。万が一を考えて。そして注意深くギルガメツシユの動向を見守る。いざとなったら男性殺戮兵器を用いてロマンごとギルガメツシユを謀殺する事も視野に入れねばならぬだろう。そうならないなら、それに越したことはないが。

再び召喚システムを囲うように、金の環が顕現する。今度こそ、今度こそアルトリアが来てくれなければ、この金ぴかニートが何をやらかすか分かったものではない。端に山積みとなっている礼装の数々が、これまでの道のりを表していた。

「……？」

ギルガメツシユがらしくもなく眉をひそめる。現れた女性は確かに青いドレスに白銀の甲冑を纏ってこそいるが、はつきり言うように似ていない女性だ。彼女は一目見てわかる通り日本人で、髪は染めているだけで、瞳も茶色。何より年齢が絶対的に違う。一種のコスプレの様にすら映った。オレはこの女性を知っている——恐らく、聖杯から真夏の夜の淫夢の知識を得ているギルガメツシユも。

「あなたは？」

「……NRKです。その、世界が大変なことになっているらしいですね。出来る限りお手伝いします」

NRK姉貴。COATのホモビによく出演していた女優の一人だ。一躍有名になったのは多分、BABYLONシリーズのSTAGE 4 2少年犯罪に収録されている、汚濁の御子という作品に出演したことだろう。『真夏の夜の淫夢』がSTAGE 3 4、誘惑のラビリンスがSTAGE 2 7であるから、それらの後輩作という事になる。汚濁の御子というホモビがこれまた難儀で、厨二な言い回しやそれすらも噛み噛みになっていたり、展開が哲学的であつたりとネタにするにはもつてこいの内容だつた。そしてその出演者の一人が、Fate/stay nightのキャラに似ているという弄りから始まり、NRK姉貴はセイバー姉貴と呼ばれるようになって――

「……Fate/stay night? TYPE―MOON?」

「ぐだ男。無駄な思索は止めよ」

「あ、ああ。ごめん」

「でも確かに霊基は、弱いけどアルトリア・ペンドラゴンのそれだし……わ、分かったぞ! デミサーヴァントだ!」

ロマンが一人合点している。とまれ、NRK姉貴はセイバー姉貴と同一視されることがままあつた。この結果はつまりそういう事なのだろう。ギルガメツシュが納得するかは別にして。

「……雑種。我を誑<sup>オレ</sup>かした貴様は後で殺す」

「ゆ、許してください! なんでもしますから!」

「ん? 今何でもすると言つたな。ならばそこで自慰に興じよ。あくせよ」

「へええっ!? ホ、ホナニーですか!」

駄目だこいつら。一秒たりともシリアスが持たない。

「あそこの馬鹿はほつといいいかな。それよりNRK。一つ聞いておきたいんだけど、君の中に本当にアルトリアはいる?」

「はい。えっと……出ては来れないんですけど、確かに」

……出ては来れない、か。アルトリアがカルデアに加わってくればこの上ない即戦力なのだが。やはりビーストに汚染された召喚シ

システムのせいであろうか。マテリアルに目を通してみると幾つか、気になる記述があった。

【真名】アルトリア・ペンドラゴン

【クラス】セイバー

【属性】秩序・善

【ステータス】

筋力B 耐久力C

敏捷C 魔力B

幸運E 宝具A++

まずステータスがかなり低い。完全な推測だがNRK姉貴という肉体に大きく引きずられた可能性がある。だが特筆すべきはこれだけに留まらない。もう一つ重大な案件があった。

「……真名解放つてのは、出来る？」

「……その、アルトリアさんが言うには出来ないらしいです。仮に出来ても、私の体ではまず耐えられないと」

「そっか」

それは残念だ。というのも――

【宝具】

『風王結界』

『約束された勝利の剣』

『全て遠き理想郷』

「ええ!? アヴァロン持ち!?」

「誰が喋ってよいといった!」

下半身を露出させながらガチビンタを受け、弾き飛ばされるロマン。マッシュ達を避難させて本当に良かったと心から思う。そんな些細な事とはかく、真名解放が出来ないとはいえ『全て遠き理想郷』を保有しているというのはアルトリアという英霊と比べると凄まじい相違点であろう。詳しい経緯は省くがアルトリアは英霊として召喚される際、『全て遠き理想郷』を持ちえない。NRKが持ち込めたのは、恐らく彼女が『セイバー』という要素を後天的にぶち込まれた存在』

であるからだろう。セイバークラスとしての現界なので、ロンゴミニアドは持ち込めなかったようだが。

「……ともかくだ。我はアレが気に食わん。どうにかしろ、ロマン」  
「と、と言われましても……」

「何イ？ 何と言った貴様」

二人は今にも殺しかねない、というよりむしろあのギルガメツシュが手を出していない事が不思議なほど、緊迫した状況に突入している。

「……まあよい」

ギルガメツシュが静かにこちらへと振り返り、王の財宝を展開する。幾つもの原初の宝具が顔を覗かせ、俺の隣にいるNRK姉貴を睨む。

「退くが良いぐだ男。かくなる上はこの我手ずから消し去ろう」  
「!!」

考え得る限り最悪の展開だった。こちら最悪の手札を切るか、一瞬思索を巡らせた、その時。

『——精神の新陳代謝』

そのたどたどしい詠唱は概念礼装の山から聞こえて来た。ギルガメツシュが眉をひそめる。

『性欲とは神に与えられし大罪』

「ま、まさか……この詠唱」

淫夢に精通していると思われるロマンが勘付いた。ああそうだ、この詠唱はあの、衛宮士郎に似ていると言われた——

『逃れられぬカルマ。排泄行為に過ぎない——!!』

詠唱の終わりと共にそれは、カルデアの風景を塗り潰した。

# 無限の野獣製 (Unlimited Tadokoro Works)

ＡＯＫ。『汚濁の御子』の主人公である青年で、Fate／stay nightの衛宮士郎に類似しているとされた。彼の代名詞といえば投影<sup>トレイス</sup>、そして固有結界である『無限の剣製』であろう。自身の視認したことがある武器を投影<sup>トレイス</sup>する彼の能力は、彼自身の経験に基づくもの。例え他の者が如何に非合法な手段を用いて『無限の剣製』を発動した所で、投影出来る武装などありはしない。

——先ほどまでの機械的な部屋から一転、赤土の荒野が彼方まで広がっていた。ＡＯＫが展開した、固有結界であろう。だがそこに、突き刺さっているはずの武器は一振りたりとも存在しなかった。

「……ああアアツ!!」

荒野に佇み、発狂するＡＯＫ。相も変わらず演技と思えない程、迫真の絶叫だ。ドン引きした当時の発掘ホモ達の心情も察するに余りある。ギルガメツシユはＡＯＫに対し、並々ならぬ敵愾心を向けた。

「ＡＯＫ!」

「ああもう滅茶苦茶だよ!」

「ロマンは黙ってて!」

半裸のギルガメツシユの後背に開いた黄金の門から、穂を覗かせていた武器が一斉射される。それらは無情にもＡＯＫへと襲い掛かり

「ンアーツ!?!」

「ファツ!?!」

「イクスギィ!?!」

——その全てが相殺された。余りにも一瞬の出来事に思考が追いつかないが、辛うじて自身の耳が拾ったビーストの声から察せた事がある。どうやらその通りであったようだ。

「……雑種め!」

激昂し目を見開くギルガメツシユ。対するＡＯＫの足元には幾

つもの『野獣先輩の部位で形成された』60fpsで蠢く武器の残滓が、両手には、同じく野獣先輩で形成された双剣が握られていた。あれは夫婦剣、干将・莫耶を模したもの、そして足元に転がっているのは先ほどギルガメッシュが射出したものの、贋作だ。

衛宮士郎の投影は、極めて個人の特性によるもの大きい。NRKがアルトリア・ペンドラゴンとして十全の力を発揮出来ていないのと、似通った部分があるのだろう。ここからは推測だが、『後天的に衛宮士郎』をぶち込まれたAOKに対し、何かしらの要因で修正が入ったのでは無いだろうか。投影が難しいならば、その素体を万能素材たる野獣先輩に頼るという形で。

「ぐだ男さん、あれ！」

「……！」

NRKが指さす先。荒野の果てに一振り、真つ当な剣が突き刺さっていた。見渡すと視界内に数本はそういった武器が存在している。視認した武器、という事か。

「——二度とこの世界にいられないようにしてやろう！」

「Be Quiet! お前の口から最早有益な情報も、カタル、カタルシスに至る逸話も出てこない!!」

糞みたいなガチャ、目当てのモノが全くの別人だったこと、更に喧嘩を吹っ掛けられたうえ、自身の財宝をよりにもよって野獣先輩を用いて模倣された事。それら全ての要因によってギルガメッシュは、既に冷静さを失っていた。王の財宝から原初の武装を次々と射出する。結果は幾重にも鳴り響く野獣の断末魔と、武器同士が弾け合う音が示していた。そしてその全てが複製され、見渡す限り何もなかった荒野には一本、また一本と武器が突き刺さっていく。

——いつの間にか、荒野は武器で埋め尽くされていた。

「……こんなの。こんなの規格外だ。あの英雄王と、互角に戦うなんて」

「でも、凄く危うい均衡だ。何とかしないと……」

だがどうする。これがもうマスター一人の尽力で改善が見込める領域を遥かに超えているのは自明だ。ギルガメッシュの争いを令呪

なぞ使って止めた日には、人類BADENDが待っている。何らかのサーヴァントの力を借りることが不可欠だろう、だが――

「――私。AOK君を助けてきます」

NRK姉貴の決意に、首を縦に振り許可をする。

「アヴァロンがあれば多少のダメージは即座に治癒出来る。でも一つ、警戒するべき宝具がある。多分本人は絶対使わないだろうけど――」

「エア。乖離剣エア。それには注意するように」

天地乖離す開闢の星、ランクEXの対界宝具。あんまりにも規格外の火力を持つ、ギルガメッシュの切り札。だが彼はその性格上、格下にそんなものを振り回すことは絶対にしない。アヴァロンの真名解放が出来れば気にせず突撃させるのもありなのだが……

いや。今俺が考えるべきはこの一連の諍いの終着点だ。必死に思索を巡らせる。使える令呪に限りがある以上、失敗は極力許されない。

「覚悟を決めよう！」

一喝したギルガメッシュ。放たれる宝具の数々に、最早慈悲の欠片も無くなっていた。カリバーンの原典である原罪(メロダック)、バラムンクの原典グラム、デュランダル、邪剣「夜」の原典である邪剣『夜域魔鐘音』、聖拳「月」の由来である聖剣『月』、淫夢の一太刀――

「ぐんぐん！」

その全てを、無数の野獣先輩を用いて一瞬で形成し、相殺する。だがその中に混じっていたAランク宝具を形成する際、僅かな隙が生まれ、蓄積した。高速で飛来する剣に対しそれは、命を奪われるに十分な時間であった。

――AOKと剣の間に体を滑りこませた者がいた。AOKは驚愕し、目を見開く。

「……先生」



「……AOK君」

あの時のように優しく微笑んだNRK。その背には幾本もの宝具が突き刺さっていた。それほどの傷であろうと治癒出来る、それが『ア全て遠き理想郷』。

「……先生ごめんなさい」

AOKが視線を落とし、NRKの持つ『約束された勝利の剣』を一瞥してすぐ背中に刺さった武器を抜く。ギルガメツシュはそれを黙して観察していた。

「女。貴様を消す前に一つ問おう。何故我の前に立ち塞がった」

「……彼女が。私の中にいる彼女が言うのです。『あの暴君に屈してはならない』と」

「……ハ。ハハハ！ そうか！ 貴様の内には曲がりなりにもあの憎らしき女セイバーの志が通っているという事か！」

ゲート・オブ・パレロンギルガメツシュは双眸を見開き、高らかに笑う。その傍らに開いた王の財宝から鍵の形状をした剣を取り出す。

「王律鍵バウ||イル!? ぐだ男君、まずいですよ!」

口調までぶれるほど動揺しきったロマン。そんなことは分かり切っている。あれが出て来たという事は、次に出て来るのは——乖離剣・エア!

「——ならばこれを振るわぬ道理もなからう! 天の理を見よ!」

「——ハハハ、ハハハハ!!」

目を血走らせ、発狂しながらもAOKの手には二対の干将かん→ちよう←・莫耶ぶつちようばが握られている。彼は、英雄王がそれを引き抜くまでに足を踏み出し、握る二対の双剣を投擲した。

——互いが互いを引き寄せ合う特性を持つ干将・莫耶。それを最大限に活用し、回避不能の同時攻撃を実現する、衛宮士郎という青年が築き上げた奥義。鶴翼三連。それを完全に再現している以上、今のAOKが衛宮士郎のデミ・サーヴァントに近いものであるのかもしれない。

「ええい! あくせよ!」

彼の動きを察知したギルガメツシュが焦り、『王の財宝』から普通の

Aランク宝具を数振り取り出そうとする。だがそれすらも間に合わない判断したギルガメツシュは、取り出してすぐの不完全な状態から乖離剣エアを握らざるを得なかった。

『天地乖離す開闢の星』ツ!!』

「令呪を以て命ずる、来い！」

耳が僅かに拾ったダイナマイツなどという苛立たしい声は、乖離剣エアの一振りに掻き消された――

乖離剣のもたらす圧縮された真空波の渦に、固有結界が耐えられる筈もなかった。戦いの舞台はカルデアへと戻る。見慣れた景色の中、先に矛を収めたのは、なんとギルガメツシュだった。

「……興が削がれた。らしくもないが、憑き物が落ちたような心地だ」  
それはNRKやAOKも例外ではないよう――

「もういいよ……先生大丈夫だから」  
「……先生」

投擲された干将・莫耶の姿は何処にもなく、両手に握られていたものはンアーツなどという野獣の咆哮をあげながら消滅した。

「……えっなにこれは。ぐだ男君、どうということなの？（レ）」

「令呪でひでを呼び出した。後はひでが双方の攻撃と憎悪を吸って――」

「あつ、ふーん（察し）」

鶴翼三連と天地乖離す開闢の星を一身に浴びたひではというと、血みどろになったままピクリとも動かない。それでも誰も悲しまない辺りが、ひでである所以であろう。

「ぐだ男」

ギルガメツシュに呼び止められた。緊張を解くには、まだ早いようだ。

「……あの状況で助太刀を入れるとは。貴様は我の契約者たりえぬ」

「いや多分ぐだ男くんは」

「いや。ギルガメツシュの言う通りだ」

そもそもギルガメツシュの息の根を止めるならば、即座にピンキーを投入すればいい話だ。そうすればロマンは犠牲になるが、その程度の穴ならダヴィンチちゃんを馬車馬の如く酷使すれば塞がる。カルデア消滅と天秤にかける必要は微塵も無い。

ただ……出来れば、もつと上手な解決方法が欲しかった。犠牲を最小限に抑えるような、そんな一手が欲しかったんだ。

「……だから特等席から見ていて欲しい。凡夫なりに、与えられた仕事は演じて見せるさ」

「奇特な奴だ。好きにせよ」

「ああ、そうだ。こと喋れる程度の半殺しに陥らせる技術で我の右腕オレに出る者はいない。今ならばその不快な汚物も、間に合うかもしれないぞ?」

「ぼ……ひ、で……」

ふと思いついて返してみると確かに、ギルガメツシュと戦い負けた人は数知れないが、一言も発す隙も無く即死した人というのは、あまりいなかった様な気がする。変なジンクスだと思いつながら、なんだかんだで殺さずに済んだドクターに声をかけるのだった。



「何故余がこのような……うつきたない」

「The night is long

that never finds the day. なあに、二度

目からは人生の如く退屈ですぞー!」

「それって今が辛くて長いのは変わりないですよね!?!」

「自分の名言を自分でレイプしていくのか……」

ついでに俺自身はというと、修正が入ったものを三度ループしてよ  
うやく慣れた身だ。

「マシユ、これは訓練なんだ。魔法少女特異点にひでデビルが湧いた  
以上、何時こういった、●●●による精神攻撃を行う敵が現れるか  
分からない」

あの時こそ軽く流したが、実は結構深刻な問題である。今ここで狼  
狽しているマシユが万が一、敵の脱○で戦闘で役に立たなくなったり  
でもすれば一大事だ。そんな非常識極まる展開があり得るのがホモ  
ビサーヴァントである。バトル淫夢ならせめて真つ当に戦ってほし  
いというのはある。

「く、訓練……訓練、訓練——」

クチュクチュクチュクチュ!! (ドラピオン)

「ひっ!?!」

「音だけだからヘーキヘーキ」

○・ハンバーグが画面に映し出された辺りで、マシユが俺の腕を一  
層強く握る。

「マ、マスターよ。その、余もぎゅつとして良いか。何というか、あれ  
を見ていると現より引き離される感すらしてな……」

「いっよ」

結果的に両手に花となった。○△レストランはホラー映画かなに  
かと思ってしまうが、下手なホラーよりも現実の恐ろしき、そして汚  
さを再確認できると言えば、確かにそうであろう。

しかしこれは、もし敵が○を攻撃に使用してくると予測できた場  
合、最悪こちらはメンバーの選抜からやらねばならないということ。  
特にマシユが欠けるのは痛い。下衆な言い方になるが、最悪俺の首が

飛ばせばその時点で人類史は幕を下ろしかねない以上、盾は不可欠だ。  
○△レストランで僅かにでも●●●●耐性をつけて貰えればと思っ  
たが無謀だったか。

「大変だ！」

我修院達が最悪の試練ミート○スパゲッティに悪戦苦闘し始めた  
辺りで、ロマンが鬼気迫った表情で部屋に転がり込んできた。

「どうしたんだロマン」

「日本に不可思議な特異点が発生した！ このままだと日本が滅亡し  
て、ドミノ倒しの要領で世界が消滅する！」

「そう……（無関心）」

「ちよつと待って。両手に花だからって、関心なさすぎじゃない!？」

「分かった分かった。レイシフト先の詳細は？」

「2005年8月15日火曜日！ 場所は岡山の県北!!」

「フアツ!？」

その場にいた全員が、そのあまりにもド直球な場所、日時に驚愕し  
ていた。聖杯からアレの知識も与えられている以上無理も無い。

8月15日火曜日、岡山の県北の川の土手にて三人の中年男が、近  
所のコンビニで酒を買ってから、持ち寄ったイチジク○腸による●●  
●●乱○を敢行したのだ。いつもの浮浪者のおっさん（当時60）、  
メールを送り参加した土方の兄ちゃん（当時45）、そして怪文書を投  
稿した変態糞土方（当時53）。変態糞土方がプレイの翌日に、ホモ向  
けの掲示板に投稿した文章が勝手に有名となり、瞬く間に淫夢へと吸  
収された。

そう。変態糞土方は本来、全く淫夢とは関係がない。しかし今回の  
特異点の情報から逆算すれば、原因の一端を担っていると疑うには十  
分な一致である。

「……○要素がきつそうだな」

「うっ。また……その、う、う○ちですか」

「マシユ。も一回」

「セクハラは止めてくださいよ先輩！」

マシユの口からう〇ちなんて言葉が聞ける日が来ようとは。もし、もしあの日ビーストを召喚しなければ、恥じらいながらう〇ちと口にするマシユを見る事も叶わなかったのだろうか。

「可憐な淑女に、この変態〇楽聖から一つ助言をしておこうかな！」

下手に恥ずかしがってうんちとか言うより、思い切り糞って啖呵切った方が恥ずかしくなくて良いゾ〜これ」

「そ、そうですねか……ありがとうございますアマデウス（淫夢）さん」  
オルレアンではマリーに下ネタを禁じられていたアマデウスだが、いたらいたで同情を禁じ得ない所だが生憎このカルデアにマリーはいない。アマデウスの下ネタに最早ブレーキは存在せず、このカルデアに来て早々流暢な淫夢語録で語る姿は、実に生き生きしていた。事実、召喚されてすぐに

『シヨパンとモーツアルトをそこのセイバーNRK姉貴が間違えたせいで風評被害受けたと聞いたときは啞然としたけど、案外楽しそうな所だね！ 気に入った、下ネタを解禁してもいいぞ！』

などというノリノリっぷりだった。満足そうだなによりである。

「ロマン。特異点の解決って、何人くらいサーヴァント連れていけそう？」

「ああうん、魔力的には六人以下に収めてくれるのがありがたいかな。強力なサーヴァントを連れて行くんなら五人くらいで」

「そっか。じゃあ、この場にいるサーヴァントを連れて行こう」

この場にいるサーヴァント、つまりマシユ、ネロ、野獣先輩、NRK姉貴、非戦闘要員二人アマデウス（淫夢）・シエイクスピア（淫夢）。攻略が不可能だと判断したらその時点で撤退、二次作戦に移行する。ついでに二次作戦は、扱いの面倒なひで、ピンキー、ALC、そしてAKYSと虐待おじさんを連れ、一般市民の巻き添えも止む無しとして一気に畳みかけるといふものだ。悲惨な出来事を起こさずにいいよう、GOにでも祈ろう。

『特異点K

A D.

2005

ケツアナドトウキョウシユウオカヤマ  
尻穴怒涛強襲岡山

人理定礎値??』



特異点K A.D. 2005 尻穴怒涛強襲岡山

「ここは……」

狭く、暗幕で覆われた小部屋にて意識を取り戻した変態糞親父。

「確かワシは、土方の兄ちゃんを待っていて……糞が！」

「変態糞親父よ」

部屋に響き渡る声。だがしかしそれは糞親父が発したものでなく、壁面に飾られた謎の装飾から発されたものだった。

「誰だ!？」

「私は、『秘密結社メガデス』の首領である。本来ならばここで、貴様を超人サイバーZ3号に……と言いたい所であるが、しばしそこで待っていて欲しい。我々の野望の為に」

「……野望?」

「我々の野望は世界征服。その為に、貴様に怪文書の投稿をさせる訳にはいかぬのだ」

常人ならば頭を抱える事請負いの、くだらない戦いが幕を開けようとしていた。

レイシフト先は2005年8月15日、時刻は午後6時過ぎだった。だがすぐに俺達は異変に気付くこととなった。

『場所は岡山の県北。といってもそれなりにビルもある、地方都市って感じだね』

「先輩。これは……」

カルデアの制服に身を包んだマシユが周囲を見渡す。行き交う人々は誰一人として、こちらを見ようとしなない。こちらが連れているのは、IRANDERSのTシャツ姿の野獣先輩に普段着のNRK、やたらスカート丈の短い真紅の現代衣装に身を包んだネロ、そして普段の格好のまま現代へとやって来たアマデウスとシエイクスピア。

こんな珍奇な格好をした大所帯を連れていけば普通、注目をかき集めて仕方がないはずだ。おまけにエクスカリバーの差し込まれた『ア全て遠き理想郷ロ』を、止む無く『インベジブル・エア風王結界』で隠ぺいして持ち歩いているが、旋風は誤魔化しようがない。行き違う人の髪がそれでふわつと持ち上がった事もあったが、その時すらこちらを気にする様子はなかった。

「……ロマン。これは結界の類？」

『そんな反応はないけど……特異点化の影響かもしれないね。気を付けて』

「……この時代を生きてるといって、ビーストとセイバーだな。どう？」

「ごめんなさい。私、岡山はちよつと……」

「んにやぴ……良く分からないですね」

「んにやぴ警察だー!」

シエイクスピア（淫夢）とアマデウス（淫夢）がほぼ同時に声を発した。一瞬びくつとしたが、本人が誤用する分にまで口出ししなくいいと思う。

「ううむ。街灯が明るいのが良いが、流石に誰にも注目されないのはつまらんど。マスター、なんとかせよ」

ネロにせがまれるが、そもその原因が判明していない現状では如何ともしがたいのでスルーする（激うまギャグ）。こういった時は悩みの種が向こうからやってくるのがお約束であるが……

「ひとまずコンビニを探そう。ロマン、検索して」

『おかのした』

「コンビニ？ 先輩。コンビニで何をするんですか？」

「変態糞親父っていう人物を探そうと思う」

「……え？」

マシユが困惑しきつた表情を浮かべる。そこでようやく、マシユに変態糞土方について教えるのを忘れていた事に気が付いた。ついでに他のサーヴァントは聖杯からその手の知識を受け取っている為理解はしているようだ。ネロは顔をしかめているが。

「言つてなかつたつけ。じゃあ歩きながら説明するから——」  
『待った！ この先に魔力反応複数！ こっちへ向かつてくるぞ！』

「「イイ、ー！」」

曲がり角から奇声を発しつつ現れたのは、白一色の全身タイツを身に纏った、如何にもといった悪の組織の戦闘員であった。それが三人、こちらと睨みあう形で相對する。

「——秘密結社メガデスの戦闘員!? ここにきてちよつとマイナーすぎるんじゃないか!?!」

「+悔い改めて+」

「先輩。さつきから分からないことだらけで申し訳ないのですが、秘密結社メガデスとは一体……」

『超人サイバーZのほんへならカルデアにあるから、後で見れば良いんじゃないかな!』

マシユは、聞いて損したとばかりに表情を曇らせていた。それはともかく、とうとうホモビ関連の敵が出始めたことに戦慄を感じるばかりだ。聖杯は一体何を考えて、こんな連中を投じたのか。いやそもそも、この連中が聖杯に召喚されたものなのか、それとも岡山に自生していたのか。そこからはつきりさせるべきだろう。

「マシユ、ビースト。予定を変更してこいつらを締め上げるぞ。セイバー二人は周囲の警戒を頼む」

「はい！ 私、戦闘の間だけは気楽になれそうです！」

「ほらいくどー！」

それまでアイランダーズのTシャツを着ていたビーストは刹那、狂戦士へとその姿を変えた。黒の肩当てと籠手、黒いマントを羽織り、両手には身の丈を超える巨剣が握られている。ベルセルクと化した先輩。それが今の、ビーストの姿であった。

と、そこで敵陣営に変化があった。戦闘員たちがビーストの姿を見るや否や、前かがみとなって股間を抑え始めたのだ。は?!

「なんですかなく? (ねっとり) まさか感じてるのではないですかなく!?!」

「ああつまり、性別が雄で裸なら何でもいいという事だね！ うんうん雑食なのは良いことだよ！」

NRKとネロの後ろに隠れるように鎮座する畜生キャスター二連星の怒涛の煽りに対し、戦闘員側は「イー……」と弱々しく呻くだけだった。これでは凶星だと白状しているようなものである。

「たあーッ！」

マシユが敵前へと躍り出て一気に場を荒らす。心なしかいつもより勇ましいように感じられた。三人の戦闘員は抵抗することすら出来ぬまま、瞬く間にこちらの虜囚と化した。

「さて。早速だけど幾つか質問いいかな」

「……断る」

マシユが盾の突起を思い切り叩き付けると、戦闘員が絶叫を上げた。道中でこんなことをやれば通報待たなしであろうが周辺の住民は、まるでこちらなど視界に入っていないかのように無視している。

「早く白状せよ！ 余はさつさと帰りたいのだ！ いや正直言うて帰りたくもないのだが、ホモビ絡みの特異点などどつとと終わらせたくて仕方がない！」

「虜囚は一人でも尋問は出来まず、マスター」

「そうだね。じゃけん二人程そつ首叩き落としましょうねー」

「ホラホラホラホラ」

「二す、すいません許してください！ なんでもしますから！」

戦闘員たちが、ホモビデオにおいて令呪を超えるほどの絶対的効力を持つ呪文を唱えると同時に、味方全員が笑みを浮かべた。さながら、こちらが悪役の様ですらあった。

その後、幾つか戦闘員に対し尋問を重ねた。彼らは「なんでもする」という呪縛に縛られているのか、特に言い濁る事無く知り得る限りの情報を垂れ流してくれた。そのお陰で事の全容はある程度見えて来たのだが……

『つまりなんだい!? その秘密結社メガデスの首領は、聖杯を貰う為に、変態糞親父を攫ったって事かい!?』

マシユやネロが頭を抱えている。それは恐らく、事の下らなさに対してであろう。だが彼らから得られた情報にはもう一つ、重大な事実が汚さに包まれるように隠されている。

『「聖杯を与える人物」の存在』

それが虚言癖の愉快犯、あるいは偶然聖杯を得てしまった一般人であればどれほど心安らぐ事か。そうでなければ俺達は最悪、”あの救世主と同等、あるいはそれ以上の存在”とこんな特異点で敵対することになるかもしれないのだ。その前では、人理焼却の実行犯など話にもなるまい。

「……神妙な面持ちをしていますね」

「ああセイバー<sup>N R K</sup>。大丈夫、まだ確定した訳ではないし……ひとまずメガデスの本拠地とやらを目指そう」

俺の提案に、サーヴァント達から快い返事が返って来た。そのまま戦闘員を縛り上げ、尋問しながら歩き始める。流石に本拠地を晒すことには、流石に彼らも抵抗を禁じ得なかったようだが、”なんでもする”というホモ特有の呪文に従い、渋々道順を吐き始めるのだった……

「ところでモブ戦闘員ども。貴様らにまだ一つ質問があるのだが」

ネロが口を開くと、戦闘員たちはまたびくりと背中を震わせる。

「その、変態糞親父とやらはもう手中にあるのだろうか? ——何故貴様らは、あんな所で油を売っていて、何故我々に襲い掛かった?」

その問いかけの終わりと、交差点からそれが弾丸の如く吹き飛ばされたのは、ほぼ同時であった。鈍重な音と共に建物へと叩き付けられたそれは、”漆黒の骨格”を纏い、”朱い槍の爪”を持っていた。

「ほうー。まさかこの『神威の車輪』<sup>ゴルディアス・ホイール</sup>に真正面から立ち塞がるとは!

敵ながら豪胆な奴よ!」

「……言ってる」

ぶつきらぼうに答えた黒骨の鎧を纏った男は、立ち上がり様、ふとこちらへと視線を向けた。その貌は骨格に覆われ見えないが、その声には覚えがあった。

そして間もなく『ゴルディアス・ホイール神威の車輪』に騎乗した赤髪赤髭の大男が交差点から姿を現した。

不幸にもガチサーヴァントと遭遇してしまっただ男達。配下のサーヴァントを庇いすべての責任を負ったぐだ男に対し、生粋のバイ、征服王イスカンダルに言い渡された示談の条件とは――

特異点K A.D. 2005 尻穴怒涛強襲岡山(2)

戦車に騎乗する赤毛の大男はふとこちらへと視線を向ける。かの大男、イスカンドルは俺達を一瞥すると顔をしかめた。

「ふむ。見たことも無い連中だな……いや待て。うぬらの連れるその、薄汚い男。よもや変態糞親父ではないか？」

「ビーストの事を言ってるなら完全に人違いだ。他所を当たつてくれ」

「そういう訳にもいかぬ。貴様ら、そのメガデス戦闘員の仲間ではないか？」

黒骨の鎧を纏う男、クーフーリンもこちらの出方を窺っている。あらかたの事情は察した、つまりこの二人、そして秘密結社メガデスは敵対関係、三つ巴の大合戦がこの岡山で繰り広げられている可能性は極めて高い。

……どうして岡山なんぞで、神話V S 古代V S ホモビなどというところ狂った争いが起こっているのか。それはまだ釈然としないが。

「……イスカンドル、そしてクーフーリン。この戦闘員はこちらが拘束した捕虜だ。今はこいつが吐いた変態糞親父のいる場所へと向かっている途中なんだ」

「……ほう」

——ドンピシャ。こちらの推測の回答は、彼らの反応が雄弁に物語っていた。この二人がイスカンドル、そしてクーフーリンであることは最早疑う余地もない。特にクーフーリンは、先ほどまで覆っていた黒骨の鎧が剥がれ、その素顔が露わとなる。紛れもなく、カルデアにいる彼の顔であった。その邪悪な笑みを除けば。

「俺の名前を晒されちまったら、別にこいつを隠す必要もねえな——  
挟り穿つ塵殺の槍」

刹那、視界は血飛沫に埋め尽くされた。その飛沫が、自身のものではない事に気づく。

「……躲せねえなら心臓で受ければいいってか。ふざけた耐久力だな？」

俺と、飛来した抉り穿つ塵殺の槍の間に体を滑りこませていたNRKは、自身の心臓を穿ったそれを震える手で引き抜いた。すぐさま治癒が始まり、やがて傷一つすら残らず再生する。ただ一つ言える事は、その矛先は心の臓を僅かに逸れていた。恐るべし、持ち主が保有するアヴァロン。

「クーフリーン殿！　クーフリーン殿！」

動いたのは、先ほどまで最後方に控えていたシエイクスピアだった。

「まず吾輩、世間に名の知れた詩人なのですがな！　ここは一旦退いてくれませぬかなー、頼みますぞー！」

「……チツ」

舌打ちを一つ残し、クーフリーンは建物の隙間を縫うように去っていった。

「クーフリーンが生前立てた誓い、ゲツシユの一つに『詩人に逆らわない』というものがある。シエイクスピアと言えばそれこそ、悔しいが全世界が認める劇作家であり、詩人である。今回のクーフリーンがイレギュラーな存在であることは見て理解できるが、流石にゲツシユを真正面から破ってくるほどの変化ではないという事か。

こういうことがあるから、英霊にとつて真名バレほど痛いものはない。こちらはこちらで、シエイクスピアが交渉役として役立つ事を把握出来た。さて後はイスカンドルであるが……

「これでも浴びろオー!!」

芝居がかった声と共に、安っぽい稲光のエフェクトがビルの屋上から降り注ぐ。マシユがさつと盾を構えどうにか俺だけは庇い、NRKがアマデウスをフォロー。シエイクスピアは自己保存でスルーしたが、ビーストとイスカンドルが被弾してしまう。

見上げると屋上には、昆虫の類のような薄気味悪い頭をした、緑の全身スーツに身を包んだ怪人の姿が夕日に照らされていた。

彼の名は知っている、超人サイバーZに出演していた敵役、メガデ



ス怪人。相手を操るホモビームを駆使し濡れ場を構築したり、戦闘員に対しセクハラを敢行したりとやりたい放題の屑である。

「さあ、お前達、この辺りから立ち去るのだ」

「……」

ホモビームを浴びた以上、イスカandalが彼の命令に従わない道理もなかった。戦車を駆り轟音と共に去っていく。周りを見渡した限り、NRKやマシユは全く問題がない様子。女性には効果がないのだろう。ただビームを受けた被害者、ビーストは明らかに男性である。

だが——だが、ビーストはそれに従う事は無かった。いつもの不機嫌そうな面で、ふてぶてしい上目遣いでメガデス怪人を睨む。

「……立たねえなあ。俺が立たせてやるか、しょうがねえな」

「先輩、これは一体……」

マシユも半ば呆然とそれを見ていた。散見される状況証拠、今眼前に厳然と存在する現実。考えられる可能性は、一つしかなかった。

「——ビーストは、男ではなかった……!?!」

我ながら珍推理も良い所だと思う。ただ野獣先輩には『女性説』なるものが存在し、野獣先輩の正体を探るという名目で様々なものと共通点をこじつける動画シリーズ、通称新説シリーズにおいても半数以上が女性キャラを対象としたものである。今の野獣先輩はそれら全てを内包した存在であり、男性とも女性とも区別をつけられない存在なのだろう……ではないだろうか。いやどう見ても男性だしあれが女性などというジョークはホント御免こうむるが。

「な、なんだとお!?! 俺様のホモビームを受けて……」

困惑するメガデス怪人は放置し、捕虜のメガデス戦闘員の吐いた進路を進む。こちらの目的はメガデスの殲滅でもなければ英霊とのガチバトルでもない。ただ特異点を修復してしまえばいい。その条件は変態糞親父に、やったぜ。から始まる例の文書を投稿させる事ならば、その通りにこなすだけだ。

喧噪の遙か遠く。ホテルの一室に、明らかに浮いた人物が存在した。一人は黒いタイツに身を包みし、日本人離れした絶世の美女である。そしてもう一人。

「あもしもし。佐々木さんですか？」

携帯電話を片手に話す褐色肌のギャル男。端正な顔立ちをした彼の片手には、ビール缶が黄金色の輝きを放っていた。それは明らかに異質な、しかし確かに、聖遺物に並ぶほどの神秘を帯びていた。

「良いの見つかつたんすよく、頑張りますんで、はいよろしくウー！」

女——影の国の女王スカサハはそれが俗にいう聖杯とほぼ同等の位を持つこと、そしてそれを自身の目の前で生成して見せた男が、救世主に匹敵あるいはそれ以上の神性を持つことを、十分に理解していた。なにせ微塵も縁のないクーフリーンはおろか自身すら、他ならぬこの男が聖杯を介し召喚したのだから。

「……一つ聞くが」

「何？ なんでも聞いてよ」

電話を終えた男は軽薄に応える。常にこの男は、その実力に見合わぬチャラさを隠そうともしない。

「あれは、何時のクーフリーンだ？」

「うーん、そうだねー」

「……私はあまり気が長い方ではない」

「まま、そう焦らないでよ。大丈夫ヘーキヘーキ、流石に”神殺し”と殺り合う程間抜けじゃないからさ」

男は少し間を置いて、無責任な笑みを浮かべながら言った。

「あれは強いて言うなら未来のクーフリーン。邪悪な女王に望まれ悪に染まった、『君を殺しうる……かもしれないクーフリーン』さ」

刹那、男に対し無数の魔槍が降り注ぐ。だが既にそこに男の姿はなく、スカサハは一人そこに残された。

現在俺達はメガデス怪人を振り切り、古びたビル、秘密結社メガデスのアジトに乗り込んでいる。今は変態糞親父が監禁されているという部屋を探し、闇雲に扉をこじ開けている所だ。幸い魔術的な罠が施されている訳でもない、精々戦闘員や怪人が数名うろろしている程度の拠点である為、探索は順調に進んでいる。イスカンドルやクーフリーンほどの大英雄が突破できなかったのは、恐らく怪人の持つホモビームの存在によるものであろう。あれは、男性サーヴァントでは少々相性が悪い。

「たあッー」

マシユのシールドバツシュにより、扉はいとも容易く弾き飛ばされた。この部屋のみ、他の部屋とは異なり暗室となっており、そして――

『うわあ、変態糞親父だ！』

ロマンの第一声が全てを表していた。ほぼ全裸の状態で寝かされている、スキンヘッドにサングラス、褐色肌の太ったおっさん。言わずと知れた”あの”変態糞親父そのものと言えよう。

――待てよ。

思考を一度リセットする。よくよく考えれば、本物の変態糞親父が”この声”を持っていないはずはない。この声は、変態糞親父の投稿を朗読した兄貴のものだ。

「……………この変態糞親父はサーヴァント、なのか？」

「……………話の筋は全く見えないが、兄ちゃんはわしを助けに来てくれたのか？」

「まあ、一応」

サングラス越しにこちらを訝しげに見つめるその視線は、紛れもなく部外者のそれである。本当に、何の事情も知らないのだろうか。俺達は2005年岡山県北という、安易なキーワードに乗せられたか。だが彼が秘密結社メガデスなどという奇怪な連中に囚われ、更に聖杯との取引に用いられる事が判明している以上、保護しない選択肢はな

い。

「ともかく一度ここから出ましょう。事情はそれからでも——」

マシユが全てを言い終える前にそれは、強引に、壁を蹴り破って躍り出た。

「——お前の出番は終わりだ。消えろ」

メガデスが相手となれば、いずれ敵対する事になると思っただけが。黒いスーツの、某ニチアサの特撮を彷彿とさせるようなライダー。サイバーZ2号。ただ今回は、どうやら俺が真名を語る必要もなさそうだ。

「EMT君ね!？」

「なっ……!?!」

NRKがあっさり、サイバーZ2号の真名を言い当てる。汚濁の御子本編において彼女が、EMT——つまりサイバーZ2号の男優を覆面越しに看破した事がある事に起因する。

「ホラホラホラホラホラ!」

一瞬生まれた隙をつくように、ビーストが動いた。無数の残像を浮かばせる高速の拳撃、噛ませ技と名高いホラホララッシュ。だがしかしこの場面においてそれは、陽動としてこれ以上ないほどの効果を見せた。

盾を構えたマシユを先頭に、俺達は糞親父を連れて一気に飛び出す。部屋の外にはメガデス戦闘員が数名、狭い通路にひしめいていたが鎧袖一触。そのままメガデスのアジトから脱出した。

「ンアアアアアアアッ!!」

ビルの上層から雄たけびを上げながら吹き飛ばされるビースト。足止めとしては十分働いてくれた。即座に令呪を用い、ビーストを一瞬で回収する。

「よくやったビースト」

「……アイキソ」

苦悶の表情を浮かべながら腹を摩るビースト。恐らくサイバース2号から一撃受けたのだろう。それにしても、原作からしてだがサイバース2号はどうやらパワータイプのようだ。

「糞ツ今日はなんだってんだ……土方の兄ちゃんも帰っちゃっただろうなあ」

前言撤回。この男、腐っても変態糞親父である。一般人が巻き込まれれば困惑不可避のこの状況下で真つ先に考えるのが糞遊び。うちの作家サーヴァント達に通ずるものがあるかもしれない。

「さて、ここからだ——」

ともあれ脱出には成功したが、一般人を連れのままサーヴァントから逃亡、あるいは戦闘するなどという困難が立ちまわっているのに変わりはない。そうこうしている内にもサイバース2号が、大穴の開いたビルから飛び降り三点着地を決め、立ち塞がる。剣呑とした空気の中、僅かばかりの睨み合いが続いた。

「——待たせたな！」

聞き覚えのある声と共に、現代的都市に絶望的に馴染まない、二頭の牛が引く戦車に騎乗したイスカンドルが現れる。その後背には、自力でホモビームの催眠を解いたのか、はたまた時間が解決したのか。なんにせよその双眸は、俺達から如何に変態糞親父を奪取するかに向けられているようだ。

「……上手く引きずり出してくれたな。後は刈り取るだけだ、王らしくな」

凶事は重なる。ビルより舞い降りた黒い影。黒骨を身に纏ったクーフリーンだ。これで三方向から、敵に囲まれる事となってしまった。三人に勝てる訳ないだろ！ とはいえ他のサーヴァントは、即座にこちらを襲ってくるわけでもなかった。現状ゲームの勝利条件たる変態糞親父を確保している俺達が最大の敵であるだけで、彼ら同士も敵同士。迂闊に飛び出せば漁夫の利を取られるのがオチという状況であり、必然的に睨み合いが続いた。

「……ねえねえマスター」

背後からひそひそ声で話しかけて来たのは、アマデウスだった。

「なんだアマデウス」

「まず僕さあ、ちよつと試してみたいことがあるんだけど、任せてみない？ 上手くやれば状況を打開できるよ？」

「……任せた」

アマデウスは笑みを浮かべると俺に耳栓を渡し――

「野獣先輩、ネロー！ コーラスはい、よろしくウー！」

即座に全てを察し、渡された耳栓を押し込む。いや正直、生野獣の咆哮コーラスというのも興味がそられない訳ではないが、命には代えられない。そんな思索を巡らしている内にもアマデウスの握る指揮棒が振り下ろされ――

その刹那、景色が反転する。アスファルトの道路にビル群、暗がりの空、全ての垣根が溶け去り、無機質な白一色に埋め尽くされた。ひとまずはめていた耳栓を取り、周囲を窺う。

「ども。こんにちはーす」

最も恐れていた可能性。それが、純白の六翼をはためかせながら降臨した。

G.O。ただのビデオオ業者であり、ガソリンスタンドの従業員を騙してギヤラをピンハネした人間の屑であり、神である。元は影の薄いキヤラであったが、いつのまにかホモの間で神格化が進み、途轍もない濃いキヤラ付けをされた存在。

「自己紹介は不要って感じ？」

「……淫夢サーヴァントで、聖杯を与える存在、となれば黒幕の正体は自ずと絞れる」

にやりと笑むG.O。相対するだけで身を引き裂かれるような、暴力的なまでの神性を纏うG.Oに対し、こちらから打てる手はない。敵わない。届かない。

ただ俺をこの空間に拉致した割に、俺を攻撃しようという気はない

ようだ。折角だ、この際色々聞いてやる。

「……あの岡山。明らかに日本じゃないよな」

「へえ。どうやって気づいた？」

「変態糞親父。彼は明らかにおかしい、現代日本で彼がああ声のはずがないんだ。つまりあれは異世界から紛れ込んだ異物。あるいは――あの岡山自体が、異世界」

そう判断出来る要素は、短い散策の中で幾つかあった。戦闘に何の介入もしない一般人、平然と存在するメガデス本部。そして何より、”岡山の県北”という曖昧な地名。普通のサーヴァントを含め誰も違和感を抱かなかつたのが不思議なほどだが、聖杯により淫夢関連の知識を一通り叩き込まれ、感覚が麻痺してしまったと考えればおかしな話ではない。

「おお、いい推理してるねえ、道理でねえ。そうそう、あの岡山は『淫夢』世界の岡山。心置きなくバトル淫夢が出来て、世界中で俺が信仰されている、そんな環境さ。現代日本の岡山辺りにチャチャチャつとぶちこんで、終わり！」

——真夏の夜の淫夢という名の物語の登場人物。いつだったか。MURを召喚した際にそんな事を言っていた。あの岡山はつまり、現代日本の岡山辺りに捻じ込まれた『淫夢における岡山』。酷い話な上に、スケールもやたら大きい。そしてなにより、どうやってこの特異点に決着をつけるかすらも見えなくなってきた。

「……各勢力に、変態糞親父の投稿を阻止するよう仕向けたのはあんたか」

「こそ」

「何のために？」

「神様がさ、試練与えるのに理由なんている？」

それに関しては仰る通りだ。問題はそんな言葉が、祭り上げられたホモビ男優の口から発せられている現実だが。

「この空間は完全に隔離された異世界。令呪を使っても助けなんかこねえよこの野郎」

「……」

「……その表情いいねえ。いい絶望顔してるねえ！」

GOの手がゆつくりと、弄ぶようにこちらへと伸びる。それが俺へと届く前に——GOは無数の朱槍に穿たれた。鮮血が飛び散り、白色の空間を染める。

「GO is not God. その男は神ではない」

空間を割って現れた、黒タイトの女性。その手にはゲイボルグが握られている。しかも二本。クーフリーンではないのは確かだが、ならば彼女は一体——

「この機を待っていた。青年、彼奴の神性を否定しろ。それで終わりだ」

「なっ——!?!」

一転し、動揺を隠し切れないGO。その背に浮かぶ純白の翼が陽炎の如く揺らぎ、先ほどまで放っていた威圧的なオーラも鳴りを潜めていた。

「世界中から信仰を集め、持てる力を大きく変える。それが奴の本質だ。あの岡山はほぼ全員がGO信徒であるが、今この空間に存在しているのは、私と貴様のみ」

「おおお、大人しくしろ！ ばら撒くぞ！」

GOは翼を大きく広げ、視認でき、質量を持つ程の魔力の奔流を生み出し抵抗している。

——どうかしていた。恐らく心の何処かに隙があったのだ。現実を直視しろ。あれは、GOは決して神にあらず。その素性はホモビ男優、その行いはただひたすらに外道。一切の神格を持ちえる道理がない。

心は定まった。既にGOの背に浮かぶ翼は原形を留めず、放出する魔力は普通のサーヴァントと比較しても微々たるものになっていた。後は、”それ”を言葉に乗せるだけ。

「GO is not God! GO is Dead!」

完全に神格を否定されたGOは、たちまち塵芥へと姿を変え消滅した。それを追うようにこの謎空間にもひびが入り、加速度的に崩壊し



ていく。

死地から帰還した俺達を迎えたのは、耐え難いほどの騒音だった。アマデウスが奏でる『英雄の証』のメロディに合わせ、ネロとピーストが好き勝手にコーラスしている。意識が遠ざかる中、周囲を見渡すと、敵味方関わらず他のサーヴァントも両手で耳をふさぎ苦悶の表情を浮かべている。

「やったぜ。投稿者、変態糞親父——」

視界が暗転する中、耳がそんな声を拾った気がした——

「…………ぐだ男君、お疲れ様」

ロマンとダヴィンチちゃんは愛想笑いを浮かべながら、帰還した俺達を迎えてくれた。結局GOがリアルの岡山に捻じ込んだ、淫夢における岡山はGOの消滅に連なって自壊。召喚されていたサーヴァントもそれに巻き込まれ、特異点は文字通り消滅した。俺達は、ミッションを達成したのだ。ただ一つの予想外を除いて。

「ああ、くたまらねえぜ」

部屋の隅で、ピーストと糞遊びに興じている変態糞親父。レイシフトで帰還する際に、間違えて連れてきてしまったのだ。この変態糞親父は淫夢世界の住人であり、結果リアル現代日本に放流する訳にも行かず、彼への処分は保留となっている。幸い、ちよつとした戦闘は出来るようだから戦力に出来ないこともないだろう。

「しかしまさか、GOまで出て来るとはね。完全な神じゃなくて本当によかったね」

「……ちかれた」

今回の特異点は肉体的にはともかく、精神的にかなりきた。しばらく休憩していたい。召喚ばっかりしてみるというのも悪くないかもしれないな。

ふと視線を逸らすと、召喚システムが独りでに光を放っていた。それも平時のそれではない、虹色の光だ。やがてそこから、一人の男が、後光に照らされながら現れる。

「GOです。ハイ、よろしくう！」

……さりげなく最高戦力確保？

## SCOOP!!! 種火イカセ隊結成!

エクストラクラス・ビースト。カルデアでは観測出来ていなかったそれについて、ダヴィンチちゃんを始めとする研究員達に別口で解析を行って貰っていた。そもそもビーストという名称自体自然と受け入れてこそいたが、出所さんは曖昧なままだった。

—— 黙示録の獣。

解析を続けた結果、浮かび上がったワード。そしてピンキーの口内に残留していた残滓から、レフ——魔神柱の残滓と照合した結果、ビーストと似通った霊子構成をしている事が判明したのだった。ソロモン72柱、そして黙示録の獣。野獣先輩は果たして、それらと同一視されるほどの悪行を成したのだろうか。仮にも人類史焼却を回避する為に、召喚に応じた彼が。

「——Target. Body Sensor」

無辜の魔獣は黄金の皮を纏い、ゴーグル越しに狙いを定める。その体躯は人の身を遥かに超え、300cmはあろうかといったほどに達している。手を振るえば重厚な金属音が響き、移動は僅かに浮いた足裏から有り余る魔力を噴射して行く。圧倒的、規格外。

サイクロップス先輩。解析が進んだ結果、変化可能だと判明した新しい形態。魔神柱にも迫るような、破壊の権化。その魔力反応は悪魔そのものであり、最早サーヴァントの域を軽く超えている。

「——<sup>Body Sensor</sup> 戊辰 戦争」

対象は3kmほど前方に群れている、黎明の神腕という名の敵性存在。人理には特に影響がない為、本来ならば捨て置いても良いはずなのだが……彼らを撃破することで手に入る、通称種火と呼ばれる存在。それをサーヴァントに用いることで、サーヴァントを強化できるのだ。となれば人理修復のため、犠牲になっていただくより他ないという結論は、誰しもが導けよう。

「EMRATED EMRATED EMRATED——」

ビーストのゴーグルから光が漏れだし、それは光線として射出され

た。光線であるが、極限まで鍛え上げられた武の達人であれば見てから躲せる程度の速度。しかし腕というフォルムでそのような挙動を行え、というのが土台無理な話。束の間に光に呑まれた。

『——生体反応なし。戦闘終了だ、帰還してくれ』

ロマンに告げられると同時にビーストの体は縮小を始め、元の姿に戻った。いつでも元に戻れるのだが、あの形態を保つのは魔力供給以前に時間制限が存在する。精々数分程度といったところ、連続使用も出来ない。実戦では切り札として温存することも視野に入るだろう。変化を終え元の体躯に戻ったビーストを伴って、帰還した。

「さて。すぐ行くぞビースト」

「ぬわああああん疲れたもおおおん！ 辞めたくくなりますよ〜周回〜」

駄々をこねるビースト。だがしかし種火は、そもそも一度の出撃では必要量に全く届かないのだ。一つや二つで限界まで強化できる訳ではない。そして喜ばしい事でもあるのだが、カルデアは非常に賑わっており、右も左もホモビサーヴァントが闊歩している。その頭数全てを強化していかねばならないのだが、ここで追い討ちをかけるように飛んできたのがGOからの、『限界突破』の提案だ。

『俺が作った聖杯でさ、パパパツと転臨して、終わり！』

聖杯転臨。万能の願望器たる聖杯を、それを得る為のサーヴァントに注ぐという一見して本末転倒な使い方。およそ幾つもの聖杯を英霊たちと得る機会がある今回の案件以外で活躍するシステムとも思えない上に、貴重な聖杯を用いるという時点で二の足を踏んでいた。だがそれも聖杯を『作れる』GOの登場によって、数という枷は消えた。元々問題点さえ解消すれば、霊基が大英霊たちに比べて弱く単純なスペック面で劣るホモビサーヴァント達とはきわめて合致するシステムだ。利用しない手はない——

という訳で。一体一体の上限まで上がったから、必要な種火の数は更に増した。こちらはこちらで度重なる周回を効率よく終わらせる

ため、周回用のチームというのを模索してはいるのだが、上手く定まらない。サイクロップス先輩は腕の一群を一瞬にして破壊する攻撃力こそ有しているが、変身の為の魔力を蓄積する際のロスが大きかった。サイクロップス化が、宝具に相当するからである。

「魔力生成出来るKMRを入れて……あと一人といった所か」

さて誰を連れていくか。単純に戦闘力の高いサーヴァントを連れて行ってもいいだろうが、悲しいことに強いサーヴァントはAKYSといいHNSといい虐おじといい、個人戦に特化している。GOに至っては正に神そのもの、その神性の高さから主従関係というものが全く成立していない以上、こういった苦痛を伴う作業に駆り出すのは難しい。

「兄ちゃん、わしも連れて行ってくれや！」

珍しく、変態糞親父に声をかけられる。

「……大丈夫？ 戦える？」

「あのGOとかいう兄ちゃんが言うには、わしの能力は戦闘補助にはうってつけらしいんや」

「……なお不安になったんだけど」

GOの言う事は、基本的に適當過ぎて当てにならない。たまにもう一つの意味で適當な事を言う事もあるが……神話の神様が完璧な助言をくれ、先導してくれる確率を考慮すれば、当てにしようとは思わない。だがまあ今回はかりは連れて行こう。実のところ、今まで変態糞親父を外へと出した事はなかった。一度目で見て把握しておきたいのは、確かにあった。

「なんで不毛なマラソンに付き合う必要があるんですか」

至極嫌そうな顔をしながら、KMRに毒突かれる。今回の種火狩りに連れて来たのは、野獣先輩、KMR、そして変態糞親父の三人だ。

「ああ、外の空気はたまらねえぜ！ ケツの穴がひくひくしてる」

陽光の元ではしやく変態糞親父。やはりというか、感性は性癖関連を除いて一般人のそれに近いように思う。野獣先輩は出会い頭から雑に戦闘をこなしていたし、他の淫夢サーヴァントも一部を除き自然と戦闘に参加していたからこれまで疑問を抱かなかつたが、果たして出自からしてサーヴァントでない変態糞親父に戦闘が可能なのだろうか。

「ビースト、KMR。手筈通り」

「ん、おかのした」

「わかりました……」

此方の作戦は接敵前の魔力集中。サイクロップス化を終えてから索敵を開始、アウトレンジからの一蹴を狙う。相手は特に知能などは無さそうな謎生命体なので、こちらの作戦が読まれている等という事は――

「ッ!? 兄ちゃん、敵や!」

変態糞親父が指さす先、こちらと100m程度ほど離れた木陰に黎明の神腕はいた。ご丁寧にも三体揃って。

「どうする、まだビーストが変身するには魔力が……」

「僕が覚醒して撃破しますね……」

「いやそれは魔力供給が滞るしな……」

特異点修復に比べれば、あくまである程度安全が確保された作業である以上、KMRを覚醒させてまで時間効率を落とす必要性も薄い。「対魔力の高いKMRに受けて貰う、その間に魔力を溜めて一網打尽に――」

そう、言いかけた所だった。

『――やらないで』

どこからともなく聞こえて来た、変態糞親父の低く渋い声。

『やらないで。投稿者：川の土手――』

『やらないで。投稿者：堅木――』

『やらないで。投稿者：腐葉土――』

やったぜ。の文章の改変コピペの様な文章が、断続的に、幾度となく発される。しきりに懇願している声の主はすぐに分かった。この大地、自然だ。

変態糞親父の方を見やると、ぶつぶつと何かを唱えている。そして、全てを唱え終わると――

『おうこんきらめくはくだくのきようえん黄金煌く白濁の狂宴』

変態糞親父を起点に、怒涛の勢いで大地から吐き出される”鼻腔をつんざく様な悪臭を放つ、茶色い半固形物と白い液体”。余りの惨劇に戦慄が走るのと、野獣とKMRと共にそれに巻き込まれるのはほぼ同時だった。

「う、うわあああああああ!!?」

「やめてくれよ……!!? あれ、マスター……」

KMRが驚きの声を上げる。それもそのはず、怒涛の勢いで押し寄せた謎の物体は、こちらの予想している不快極まる物質とは、明らかに乖離していたのだ。確かに触感嫌なものであり、物量に押し込まれるが決して押し潰されることはない。ダメージを受ける事はなく、むしろ身体的な疲れを吸収し、更に得体の知れない力が体の奥底から沸き上がるのを感じた。

そうこうしている内に物体は、影も形もなく消えていた。文字通り、服にすら一切の残留物は残らなかった。残ったのは俺達と神腕、そして全てを吸い取られ、荒廃し果てた自然だけであった。ビーストの魔力量は、あの奔流の前は、KMRの魔力生成込みで後五分は必要であろうといった量であったのに、いつの間にか充填が完了していた。後は指示を出すのみ。

「やっっちゃえ、ビースト!」

「いきますよーイクイク、ヌツ!!」

声と共に肥大化し、黄金の獣は咆哮をあげる。神腕たちが殲滅されたのは、それから間もなくの事であった。

事が終わり、カルデアと通信を取った。

「……ロマン！ 今の見てたなら解析！」

『ねえホント無理無理無理！』

「ロマン、ひでレベルの精神崩壊起こしてるな……ダヴィンチちゃん！」

『はあい！ こちらで観測できたのは、”それ”は大量の魔力を伴った幻影で、見かけによらず数人しか巻き込めない対人宝具。それも味方の魔力やステータスを補強する効果を持つてるらしい！ 本人の申告通り、補助用だね！』

……生きた心地はしなかったが、確かに物理的殺傷力はほぼ有していないようだ。もしかしたら変態糞親父側である程度のコントロールが効くのかもかもしれないが。ともかく臭いと感触さえ我慢すれば、速攻でビーストをサイクロップス化させられるという事か。

「これは……もしかしたら種火パ完成じゃな？」

「フアツ!？」

「やめてくれよ……というかやめてください。本当に」

KMRが敬語で訴えてくるあたりが、必死さを感じられる。束の間の辛抱だ、我慢してもらおう。そして今は、最速周回種火パが完成したことを喜ぶとしよう。

「——やったぜ。」



クリスマスレ○プ！ようじよと化した先輩！

以前、夢を見た。このカルデアでは有り得ない夢。雪のように白い肌の、黒い衣を纏った女サンタ。そのトナカイとして様々な、正常な英霊の元へ赴き、プレゼントを配った。

昨日も夢を見た。外も肌寒くなってきた晩秋に、ジャンヌ・ダルク・オルタを名乗る少女のサンタクロースのトナカイとして働いた。

——ぬっ！

そういつた夢を見て、起きた時にふと虚しさを感じる。自分が人理焼却という前代未聞の危機に瀕してなお、ここまで女つ気を求めているのだと、自分の能天気さに打ちひしがれた。だが、だがそれでも。

「——おぉん！」

この仕打ちはあんまりではないだろうか。現実逃避の為にベッドで寝転がっていた俺を揺すっているのは、『女物のサンタのコスプレを纏い、肉体まで幼児化した野獣先輩』。ステロイドで造られた偽りの肉体は見る影もなくなり、代わりに胸には黒のブラジャーが巻かれている。ぶつちやけ筆舌に尽くしがたい程、視界に入れるだけで腹の底から沸々と怒りが沸き上がってくる外見に仕上がっていた。それが舌足らずで、ステロイド服用者特有の高い声で『んあー≡∏≡↑』などどぬかすのだ。ひでまひろたるとじゅんぺいに勝るとも劣らぬ汚物の誕生である。

「殺意感じるんでしたよね」

「先輩！　まずいですよ!!」

拳を握る右腕を、マシユに抑えられる。自室、それも寝起きになん不快な生命体を目の当たりにして、憤怒の一つでも沸き上がらないのはそれこそ聖人くらいであろう。

「……マシユはこれに不快感を抱いたりしないのか」

「いえその、確かに吐き気を催すレベルで気色悪いですけど……でもビーストさんはこれまでカルデアの為に頑張ってくれた方ですし」

「……それもそうだ」

そうだ。こんな姿になってしまってもビーストは、一応このカルデア

アの古参サーヴァントであり、最速種火周回パの核を担っている。これまでの功績に免じて、暴力は止めよう。令呪はガンガン使うが。

「あ、ここにいたのか皆」

他人の部屋にずけずけと侵入してくるロマン。そういえばふと思ったが、マシユは何時の間に部屋に入って来たのだろうか。

「で、その『野獣・先輩・サンタ・リリイ』についてなんだけど」

「やめろ。その呼び方はやめろ、代替案を出してくれ」

「じゃあ縮めて幼女サンタ先輩で。今回の主犯であるギルガメッシュ（淫夢）曰く、『良いだろ貴様聖人の日だぞ（意味不明）』との事。つまり彼なりの悪ふざけだと断定していいだろう」

「ちゃんと意味が通ってるじゃないか（憤怒）。今日は別段聖人クリスマスの日でも何でもなく、一月ほど気が早い。やはりホモはせっかちだった。

「今ギルガメッシュ（淫夢）が、王の財宝の中から対処可能な薬を探している所だ。カルデアのスタッフやダヴィンチちゃんでも、普段の業務の片手間にも解析を試みるし、最悪GO頼みだ」

「つまり全く当てにならないと」

「そうだよ（肯定）。気長に待ってて、どうぞ」

それだけ言い残し、部屋を去っていくロマン。その背中がドアの向こうに消えるのを確認してから、マシユと顔を見合わせる。

「どうしよう」

「……してみます?」

「なにを?」

「その、サンタクロース……」

「ぬっ!・ぬっ!!」

マシユの提案とほぼ同時に突然自己主張を始めたビースト……ビーストサンタ。その肩には、身の丈に及ぶほどの、何かが詰まった白い袋がかかっている。いつの間に用意したのかは不明だが、推測するに彼は、サンタの真似事がやりたいのだろう。

よくよく考えれば、このカルデアには娯楽が少ないような気がする

る。世界の危機に遊び呆けるのは論外だが、一日くらい羽を伸ばすのも悪くないかもしれない。

「ぬっー！」

「おうおうご丁寧に手紙まであるぞー」

「先輩投げやりすぎます」

ビーストサンタは袋の中から取り出した、数通の手紙を俺に見せびらかす。確認すると不思議な事に、サーヴァント達の名前が記されていた。皆揃いも揃ってどうしたんだろうか、クリスマスは一か月は先な上に、本来プレゼントを貰える歳でも無かろうに。

「……夜に行くか。マシユ、ついてくる？」

「はいー！」

「んあー≡∏≡！」

「一件目は……MURさんのところですね」

皆が寝静まった頃を見計らい、マシユとビーストサンタを伴って部屋を出る。ビーストサンタは存外筋力が高く、ぎっしり中身の詰まっているように見える身の丈ほどの袋を肩にかけても普通に動いていた。どうやらトナカイもソリも不要なようだ。

間もなくMUR……というか三馬鹿空手部共用の部屋まで辿り着く。扉を開けると――

「あ。こんばんは」

「KMR。起きてたのか」

例のあの部屋を完全再現した、風呂場付きの畳部屋。その隅でKMRは雑誌を広げていた。KMRはこちらに――正確にはビーストサンタに気が付くと、何とも言えない笑みを見せた。

「……ああ。例の、鈴木先輩ですか。お疲れ様です」

「ホントにAUO（淫夢）には困ったもんだね。MURは？」

「そこです」

KMRが指さす先、MURは畳に敷かれた布団にくるまり、いびきを立てていた。何故か縦割れアナルがもろ出しになっており、気が付いてしまったマシユがSANチェックに失敗して軽く悲鳴を上げたが、MURが起きる事は無かった。

「MURへのプレゼントは……まあ大体わかるけど」

「いいすかあ〜？ デ デ ド ン ！」

ビーストサンタがSEを声に出しながら袋から取り出したのは、大方予想通りではあるがポケモン的一种であるポツチャマのぬいぐるみだった。

「ありがとうございます……」

「じゃあ俺、プレゼント置いて帰るから」

「季節外れのサンタさん、頑張ってください」

KMRから激励の言葉を受け、俺達は部屋を後にする。……以後もこんな真つ当なやり取りが、続けばいいなあ。

「二人目はアマデウスさんですね」

「どうやら俺の願いは果たされなさそうだ。」

「アマデウス……糞かな？」

「や、やめてください先輩。流石にそこまで性悪では……」

「だって……アマデウス（淫夢）だよ？」

「ま、待ってください先輩。音楽関連である可能性だって微粒子レベルで存在するはずですよ」

「ええ〜ほんとにござるか〜？」

「ほ、ほんとでござるよお？」

ノリのいいマシユというのも珍しい。いつまでもこうして漫才を続けていたい気すらしたが、生憎廊下を歩きながらである。歩みを進めていけば、自ずと目的地には着いてしまうのだった。

「うんうん。プレゼント、持ってきてくれたんだね？」

「……何故みんなこんな時間まで起きてるんだ」

「まあ、天才には色々あるんだよ」

……帰りたい。ああそうだプレゼントだプレゼント。あれを渡せば、すぐに次に移れるのだから。

「デ デ ド ン ！」

ビーストサンタが袋から取り出したのは予想外の代物だった。

「……パソコン、ですか」

「ロマンに聞いたんだけど、現代には音MADというのがあるそうじゃないか。折角こんな特異な環境に生まれたんだ。一回やってみようと思ってるね。ついでに素材には野獣先輩の喘ぎ声なんか良く使われるらしいね」

モーツアルト直々に淫夢音MAD作成か。話題には事欠かなさそうだが、やはりオリジナル曲で作るのだろうか。まあいい。最悪のネタは回避したからな。

「彼が治ったら教えてね」

「おう、考えておくよ。じゃあ」

「子守りも良いけど、あんまり真夜中まで連れ歩くんじゃないよー」  
立ち去り際に煽られたが、先にこちらが煽ってるのでノーカウント。俗に言うじゃれ合いみたいなものだ。しかしアマデウス（淫夢）すらこれとは、もしかしたら何一つ障害なく無難に終わってくれるんじゃないだろうか。

「三つ目。これが最後ですね、ピンキーさんです」

「ああああああああもうやだああああああああ!!!」

駄目でした。深夜帯である為、声を極力抑えての絶叫だが、声を大にして言いたい。帰っていいですか。こんな事なら夜中になんか来るべきではなかった。

「一度取りやめて、朝方に伺う事を提案する」

「え、ええ……そんなに嫌ですか」

「男だったら誰しもそう言うと思う。マシユには分からないと思うけど」

ぶつちやけ朝になつても行きたくないと言う人の方が大半だと思

うが。

「でもほら。野獣先輩・サンタ・リリイさんは……」

「あれは例外。幼女だから」

「……先輩。あれをどうとう幼女と認めてしまうのですね」

実に悔しいが、男性の天敵としての側面を極限まで凝縮した対男性用最終兵器たるピンキーの部屋に、鼻歌混じりで向かう後ろ姿を見てしまった以上、あれが男でないことを認めざるを得ない。

ピンキーの部屋の扉前までやって来た。扉には紋様の描かれた札が何枚も貼られ、扉の向こうからは、言語にて形容できない直感的な悪寒が、全身の神経を穿つように迫る。全身を締め上げられるような錯覚すら覚え、自然と額を脂汗が伝った。かつて大英雄に遭遇した時の、生命体として死期を予感してしまった、あの時の感覚に似たものがあるかもしれない。

「先輩今すっごい失礼なこと考えてませんか？　ピンキーさんも女性ですし、流石に傷つくと思いますよ？」

ここまで来た以上、何もせずに帰るといふのは損というものだ。どの道ビーストサンタがこの扉をくぐるには、背丈的に俺かマシユの助力が不可欠。決意を奮い立たせ息を吸い、扉を開いた。

部屋の中央に浮遊する生首。それがこちらを振り返るまでのたった一瞬が、無限に等しく感じられた。振り返った名状しがたき怪物の眼と、不幸にも目が合ってしまう。異常に肥大化した両眼は、俺の意識を深淵へと落とし込み四肢の自由を奪う。

——殺られる。蛇に睨まれた蛙。蛇が跳躍するまでの、刹那の余生。その間に震える暇すら与えられなかった。両対称の歪んだ笑みを浮かべ、飛来するピンキー。

テレレレレレレ→コンヤハ、カエシタクナイ。

はつと意識が現実を引き戻される。ビーストサンタの手には、柔らかなスマホが握られていた。その画面にはお茶の間フリーズとして著名な、例の不倫シミュレーションゲームのCMがループで流れている。テレレレレ→が鳴る度に意識が戻ってくるのは、ピンキーの意識がそちらへと逸れたからであろうか。

「先輩……凄い汗ですよ。大丈夫ですか？」

「大丈夫な訳ないんだよなあ……」

当の災厄の根源はというと、ビーストサンタからやわらかスマホを受け取るや否や今夜で検索しようとしていた。人理が焼却されている今、インターネットが機能するはずがないのだが、そんな些細な事はどうでもいい。使命は果たされた。後は速やかにこの地を離れるのみだ。

「せ、先輩!？」

「ぬっ!？」

能気なマシユとビーストサンタの手を握り、引っ張る様にしてその場を後にした。クリスマスは、終わったのだ。

「マシユから聞いたよ。昨日は大変だったみたいだねえ」

朝。ロマンは他人事ながら、こちらの気苦労を察してはくれたようだ。俺は俺で、愛想笑いを浮かべるくらいであった。

「笑顔だけか貴様は」

傍にいたギルガメツシュ（淫夢）がこちらを睨みつける。昨日のピンキーに比べれば実に気楽な相手だ。

「……元を辿ればギルガメツシュのせいなんだよなあ。はあ」

「……我に嘆息とは、死にたいのか？」

「あ。そろそろみたいだね」

丁度良いタイミングでロマンがこちらのやり取りを遮った。医療室から出て来たのは、GOだ。結局の所ビーストの体を元に戻す解決策が見つからず、困ったときのGO頼みをするはめになったのだ。正直全く信用できないが……

「どうだった？」

「まー安心してよ。大丈夫、ヘーキヘーキ。ヘーキだから」

「やっぱり駄目じゃないか（憤怒）」

GOのはぐらかすような答えから、結果など見るまでもない——はずだった。

「ぬわああああんきつかったっすね昨日は」

「んあー≡∩≡」

一同唾然である。医療室から出て来たのは、元の姿に戻ったビーストと、サンタの格好をした幼女ビースト。精々数刻の間に、同一人物が分裂したのだった。カルデアに新たな(?)サーヴァントが加入した瞬間である。

「どうしてくれるんだよこれよおなあ! どうやったんだよこれよお!」

「パパパッとやって、終わりッ!」

GOの浮かべる笑みは正に、邪神のそれであった。





ロワが露わになるという独特の容姿だが、全く違和感なく戦闘を行っていた。聖杯により霊基を補強されており、単純な物理攻撃では死に至らないとはいえ、あの大英雄相手に戦う時点で相当なものである。

後方へ跳躍し、ヘラクレスから一定の距離を取ったKNN姉貴。全身から紅蓮の炎——高純度の魔力を滾らせる。ヘラクレスはというとKNN姉貴を無視し、真っ先にALCへと駆け出した。

「こちらの狙いは当たりつてことか……!」

例え狂化しようが、サーヴァント。それが放つ魔力を視て、自身に危害を及ぼすことを本能的に理解したのだろう。アークを用いてヘラクレスを嵌める案の時には考慮されたが、相手にそれを判断する理性が残っていると断定するならば、こちらの勝ち筋はほぼ確定した。

「KNN姉貴!」

「プライベート——スクウェア!」

次の瞬間、KNNの渾身の蹴撃がヘラクレスの横顔を薙ぎ、その巨体を揺らめかせる。達人めいた縮地の効果もあるが、それ以上に彼女が発動した宝具『プライベートスクウェア』に秘密がある。有体に表現するならばそれは、時間停止。彼女だけの時間を、世界に捻じ込む術。明らかに物理法則を超越しておりサーヴァントとはいえ個人が用いる能力からは逸脱している為、当然抑止力案件である。そのリスクは——

『ぐだ男君! KNN姉貴! もう、カルデアの傷を抉るような事はしないでください!』

カルデアから蕎麦をすする様な音と共に悲痛な叫びがあがる。『蘇生』といい『時間停止』といい、強力無比な分莫大な魔力を消費している。一度や二度発動した所でどうという事もないが、今後の特異点のことも考慮に入れ、一戦で何十発も乱発されると不安になる程度の出費らしい。くれぐれもKNN姉貴は温存しろと釘を刺されてはいるが、正念場で手を緩めるのは弱者か、パワーインフレの末落としどころが無くなった悪役がやる事だ。

「KNN! 気にするな、全力で戦え!」

「何言ってるのよ! 最初から全力でやってるわよ!」

「ならよしー」

KNN姉貴は果敢にヘラクレスに向かい、その隙にALCが距離を取る。ALCの狂化スキルが低くて助かった。こういった細やかな戦術、サーヴァント間の連携は、知性なしでは成り立たない。

「マシユとエウリュアレはここで待機」

「は、はい」

「……結構サバサバしてるのね貴方」

庇護対象であるエウリュアレから冷たい視線を背中受ける。言いたい事は分かるが、船での戦いは仕方なかった。あの場には他に、敵方のサーヴァントもいたから。今こうして戦えているのも、敵がヘラクレスを単騎で走らせる愚を犯していたからである。

「■■■■■■■■■■——!!」

大英雄の力づくで振るわれる武器。けた外れの一撃を刹那で見切り、瞬時に地面を蹴って躲すKNN。傍から見れば確かに拮抗しているのだが……少し不味いことになっている。

こちらは決定的に決め手が欠けているのだ。KNN姉貴は隙を見ながら一撃をお見舞いしているが、全く効いている気配がない。リンク未満の攻撃を無効にしているならば、そもそも止めの一撃まで持っていくのが難しいのだが……

「……さて。カルデアのマスターはどうするつもりかしら」

「宝具なら当てがある……」

丁度今頃、他のアーチャーに混ざって宝具をぶっ放している頃だろう。

「令呪を以て命ず。UDK。来い」

ALCの耳に入らぬよう、あくまで小声でUDKを召集する。

「はぁーいUDK来ましたよー」

「イワナ、書かなかった？ 船への攻撃は程々で切り上げてこっちはいいって」

「……知らないなあ」

へつたくそな演技ですつとぼけるUDK。大方、ヘラクレスと戦わ



飛翔し、ヘラクレスの背後へと回ったALCが口端を吊り上げ、ギリシンの刃を頸椎へと降り落とす。鮮血が噴き出し、ALCの白い肌を真紅に染め上げた。巖の如き大英雄が揺らいだのを視界の端で確認したALCが、返す刀でヘラクレスの首を撥ね飛ばす。彼が消滅したのは、それからすぐの事だった。

「……ヘラクレス、撃破」

『あ、ああうん。反応は消えたね……いやあ。まさか勝てるとは』

「不死殺しが効いてよかった」

あれが効かなきゃ根底から覆るからな。しかし最後の引き撃ち。もしあれが、バーサーカー以外のヘラクレスであれば、ああ上手く行く事は無かつただろう。そもそもアーチャーと呼ばれ、ヒュドラの毒矢など携えていた日には当初のアークに頼る案すら使えなかつたはずだ。そしてこちらのサーヴァントも聖杯によって強化されている。二つの有利が重なった、奇跡的な勝利といって良いだろう。

「いやーきつかつたつすね今日」

「何かしたかUDK」

「——何よ?」

「いえ何でもないですUDKさんお疲れさまでした」

「デユフフ」

……背後にALCの気配を感じれば弱腰になるのも無理は無いだろう。UDKや、傍で観戦していたエウリュアレからも笑いが漏れているが無視だ無視。バーサーカーに正面から喧嘩を売るマスターは、そうそういない。

「ALC、ありがとう」

「ふふ。お粗末様でした」

ALCも、あのようUDKが絡まなければ基本聖人であるし、戦闘においても機転が利く優良サーヴァントなのだ。ふと、肩にどつと疲れが乗ってくる。

「マスター」

「……KNN姉貴」

「ナカナカヤルジヤナイ。ここの解決ももう少しなんだから、あんたも頑張りなさい」

「……はい」

この特異点もあと少しで終わりだ。さっさとイアソンを撃破して風呂にでも入りたい。疲労した体に鞭打ち、一步を踏み出した

昏睡レ○プ！デンジャラスビーストと化したマシユ  
！

「♪」

アマデウス（淫夢）がかつてない上機嫌で指揮棒を振っている。彼は基本的にド屑だが、こと音楽となると話が違う。音楽に対する態度のみ真摯そのもの、少なくとも彼にとって音楽は、人理よりも遥かに大事なもののだろう。

「アーツ！」

そして、アマデウスの指揮に従い透き通るような喘ぎ声をあげてみせるのは、我らが世界のトオノ。真夏の夜の淫夢第四章にて野獣先輩と共演し、昏睡レイプされた被害者である。水泳部員である事くらいしか情報の無い彼がこのような美声を発する事が出来るのは、恐らく後世の音MADにて、世界のトオノとしてもはやされた事に起因する宝具だ。

演奏が終わった後、隣に座っていたマシユが目を輝かせながら拍手をしていた。こういった芸術を鑑賞する経験が少なかつたのだろうか。感極まって涙を浮かべたり、演奏中に俺と手が重なり、顔を染めたりと案外忙しかった。俺としても、予想外に世界のトオノの完成度が高かつた事と、アマデウス腐っても楽聖の音楽センスが重なり合った演奏というのは聞きごたえがあり、時間も忘れて聞き入ってしまった。

「先輩、綺麗な歌声でしたね。男の人であんな声出せるなんて知りませんでした」

「あれの元ネタ喘ぎ声なんだよね」

「えっ……あつ（察し）」

マシユはとても残念そうに、片手で頭を抱え溜息をつく。しまった、完全に墓穴だったか。いやだが真実を伝えるのは、決して悪い事ではないはずだ。こんなカルデアにいては、ホモビ関連の知識は遅かれ早かれ叩き込まれることになるのだから。

マシユはその後、ロマンの元へと向かった。どうやら彼女、ロマンからの呼び出しを忘れていたらしく、館内放送を聞いた時の慌てようったら無かった。

「珍しいな、マシユがあんなこと。普段しつかりしてるからなおさらだ」

「そりやまあ、意中の人に呼び止められた挙句音楽鑑賞デートのお誘いなんて受けたら、多少はね？」

「もしかして俺のせいとでも——」

そう反論しようとして、頭の中で直近の行動を整理するとどう足掻いてもある結論に達するのだ。

「……マシユからすれば、音楽鑑賞デートであった可能性が微粒子レベルで存在する？」

「微粒子も糞もないだろうに。糞だけに……埋め合わせして（提案）」  
「ア、アマデウスに真面目に説教された……」

埋め合わせ、なんてものは言うまでもない。中々にショックを受けていた様子は見て取れたし、彼女に限って特異点での不調に繋がるなんてことも無いだろうが用心に越した事は無い。

「あつそうだ（唐突）おいダヴィンチちゃん、録音は終わった？（話題逸らし）」

「うんうんバッチリだよ」

ダヴィンチちゃんが頷く。元はといえばこの演奏は、遠野の歌声を録音する為のものだった。依頼者は当然、アマデウスである。彼は淫夢音MADを作るために、わざわざ英霊の声を録音する事を提案したのだった。俺達はというと、それを傍で勝手に聞いていたに過ぎない。俺としても生の世界のトオノを聞いてみたいという気持ちはあったし、実際大満足の出来であった。例え後世に語られ、付与されたものであっても、彼の絶唱は正に、かの嬌声の再現であった。

「遠野、良い声してたよ」

「ありがとうございます」

遠野は照れくさそうに、はにかみながら答える。服装は、最早見飽



きた青いTシャツであり、その裏には決して剥がれないレシートが残されていた。

実は、遠野が召喚出来た事は野獣先輩及び、野獣先輩・サンタ・リイには伝えていない。今後も極力距離を置かせる方針だ。何故かと言われれば実に単純な話であり、生前の二人の関係を考えると、悪影響を及ぼす可能性が高いと踏んだのだ。具体的な内容には敢えて言及を避ける。思えば複数人のサーヴァントを召喚するこのシステムにおいて、今まで生前の遺恨を骨子とした軋轢が無かった事が奇跡と言えよう。

ともかく、野獣と遠野は会わせてはならない。直感がそう訴えるのだ。

「ぬわあぁん……ハッ」

医療班の健診の帰路にて、口走ったそれをマシユは押し込む。幸い廊下には誰もおらず、彼女の失言を耳に入れる者は誰一人としていなかった。マシユはそれに安堵を覚えるとともに、先ほどの失態を思い出して顔を赤く染める。

「——この辺にい、遠野の気配、するらしいっすよ。じゃけん夜行きましようね」

「いいゾーこれ」

自分が察知したのに伝聞調で語る男、マシユが少なからず影響を受けてしまった男である野獣先輩と、その隣で談笑するMUR。二人の手には、黄金色に輝くビール缶が収まっていた。このカルデア内において驚きの聖杯インフレを形成した、GOが生成した聖杯である。

「マシユ姉貴オツスオツス」

「あ、こんにちは……」

丁度と鉢合わせする形となった野獣たちと、自然な流れで挨拶を交わす。不幸があつたとすれば、今のMURが理性が蒸発した池沼モードで無く、天賦の叡智を惜しみなく発揮する知将モードであつたことか。彼はマシユの異変を一瞬で見抜いた。

「あつ（察し）……何か悩んでる顔だゾ。困ったら誰かに相談するのが良いゾゝこれ」

「MURさん……その、実はですね」

マシユがそれを語るにつれ、野獣もMURも顔を歪ませる。そしてあろうことか、二人はマシユの悩みに便乗し様々な不要な知識を吹き込んだのだつた。

「マシユ、最早解決策は一択だゾ。教えた通りにやれば楽勝だゾ」

「頑張つてくれよなあー俺も頑張るからさあ。アイスティーしかないけど、いいかな？」

「……何を頑張るんでしょう。あ、頂きます」

マシユが野獣先輩から缶ビール状の聖杯に並々に注がれたアイスティーを受け取った後、野獣先輩とMURはその場を立ち去った。残されたマシユは密かな決意を固め、強く一步を踏み出したのだつた。

「先輩、アイスティーは如何ですか？」

「——ツ!？」

座っていた椅子から転げ落ちそうになる。突然マシユが部屋に入って来たかと思えば、GOの聖杯に入ったアイスティーを勧められた。

なんせあのアイスティーである。細かい種類については知った事じゃないが、真夏の夜の淫夢においてそれは限りなくバッドエンドに近づく選択肢、小道具である。そもそも飲み物全体に気をつけねばならないというツツコミは抜きにして。

「飲んでください。どうぞ」

マシユは平時と変わらぬ屈託のない笑顔を投げかけてくる。そこに、例えば野獣の眼光の様な悪巧みの感情を見る事は、出来なかった。だがそれでも警戒を解く訳にはいかない――

『……それは飲めない。信用出来ない』

そんな言葉を一瞬でも口にしようとしたが、それは、目の前の彼女の表情に僅かに露わとなった陰に阻まれる。先ほどの失態もあるし、これ以上彼女の願いを無下にするのも憚られた。まあ最悪、アイスティーを用いて後輩を昏睡レイプしたアイツと共謀でなければいい。マシユはそういった事を企む子ではないだろうから、最悪の事態にはハツテンしないだろう。

ならば男らしく、堂々と頂くとするか。

駄目でした。混濁しながらも、辛うじて視界が帰って来た時には両手を縛られベッドに寝かされていた。そして目の前では、何故か妙に露出度の高い、コスプレ姿のマシユが、獲物を見定めるかの如く俺を見下ろしている。

「……怒らないから本当の事言っつて？」

「……野獣さんから、えーと『ホモコロリ』？の入ったアイスティーを渡されて……」

「何たる……何たる不名誉……」

ぐだ男ノンケだよ、ホモじゃないよ。四肢は麻痺し、縛られていない足ですら鉛のように重い。意識は朦朧とし、視界はぼやけ、正常な思考が働かない。薬は十二分に効いているようだ。

「……で、マシユはこれから何をしたいんだ？」

「あの、MURさんは一緒に寝ればいいと」

「そうかあの三馬鹿……二馬鹿か。あいつらにも最低限のブレーキは

存在したんだ……」

いや、そもそも無垢な女の子に昏睡レイプを教え込むという畜生行為を働いたことに関しては許されない事だが、それでもコウノトリを信じている子供に無修正のポルノを見せつけるような連中では無かった訳だ。

「……一緒に寝るくらいなら睡眠薬なんて使わなくていいから（良心）」

「はっ！ た、確かにそうです！」

「ええ……（困惑）」

すぐにマシユは手の拘束を外してくれた。彼女自体に危害を加える意図は、本当になかったらしい。流石に冷えるだろうから普段の格好に着替えさせ、言ってしまったものは仕方ないので同衾する。先ほどの衣装もこう、男心をくすぐるものはあつたし多少の勿体なさは感じたが、普段の戦闘服も大概エロいので今更感が強い。

「……それにしても野獣さんとMURさんが言ってたのって何だったんでしょう」

「……マシユはまだ知らなくていいんじゃない？」

「いえ。その……二人が言ってたんです。夜、遠野さんの所に行くと。さっきの聖杯は、その時二つあったものの一つを貰っただけで……」

……

「——令呪二画を以て命ず。野獣先輩とMURは即刻ピンクীর部屋へと転移せよ」

遙か遠く。ピンクীর部屋がある方向から、野太い野獣の咆哮が聞こえたが、因果応報である。

何処にでもいて、何処にもいない獣

ソロモンと名乗る男。四本もの魔神柱を用い、圧倒的な火力を以てその場にいた幾多の英霊を瞬殺してみせた。グラントキャスター、人類悪に対抗する冠位の一つというが。実力の差を否応なく突き付けられる。

「――だが疑問が残る。何故だ、何故貴様がそちらにいる」

ソロモンの差す貴様、それは即ちビーストの事だ。束の間の戦闘であつたが、アレは敢えてビーストには攻撃を加えなかった。

対するビーストは野獣の眼光をぎらつかせ、ソロモンの動向を注視している。

「……ビーストがどうかしたか」

「知らぬか。救いようのない程の馬鹿だな貴様、まあいい。精々それを使いこなせぬまま燃え尽きろ。それは少々、人の身に余る獣だ」

『――人類悪の獣、ビースト。それが僕らの見解だけど』

ロマンの言葉を聞くとソロモンは、醜悪な笑みを浮かべた。

「なるほど！ なるほどな、その矮小な頭でそう結論付けたか。生憎だが人類悪は既に満席でな、その獣が収まる席はない」

あからさまな嘲弄が降る。ソロモンという魔術師視点から見て最高峰のビッグネームのだが、先ほどから繰り出され続ける小物ムーブにより、心は勝手に冷静さを取り戻していた。

野獣先輩という存在が人類悪、人類を滅ぼす災害と呼ばれるまでに強大であるか。答えは当然否。彼はただのホモビ男優である。ならば何故彼がビーストの適性を持っていたか。

「……あつ、そっかあ」

俺よりも先に、同行していたMURが真相に辿り着いたようだ。

「鈴木はなんにでもなれるし何処にでもいるんだゾ」

「……は？（威圧）」

「最も正解に近いな。見かけの割にきれるではないか」

まるで野獣先輩メタモン説のようだと考え、結論に至った。

「――野獣先輩、新説」

野獸先輩新説シリーズ。野獸先輩の正体を考察し、得られた推論を根拠1：などの形で述べていく、伝統の論説である。この手の説の大半は、野獸先輩との類似点を述べていくという俗にいう箇条書きマジックの形式を取っているため無限に説が膨張し、女性説や苦学生説、アニメキャラや無機物、歴史人物や情報生命体に至るまでに拡散している。

このようなこじ付けが、英霊になる際に通じるか。その点に関する問題も、『同一視された人物』の能力を得ると置き換えれば、出来ぬ道理はない。アーサーペンドラゴンの、ワイルドハントの主とされた一側面を俺達はいさつき目の当たりにしたばかりだ。

現在、未来、過去、あらゆる平行世界や架空の世界に無数に存在し、それら全てが物理的無理を超えて結集した概念存在。それが”たまたま”人類悪の要素を強く表面化させ、召喚に応じた。それが今の、ビーストクラスの野獸先輩。

「……待てよ。それってつまり」

「マスターの推測が正しいゾ〜これ。あの光帯が縦に積み重なっていると例えるなら、鈴木は”横”と”縦”に積み重ねてるんだゾ。単純な熱量なら、敗北はあり得ない」

MURが告げると、ソロモンの表情が醜く歪む。

「——ああそうだ。単純な総量で測れば、私が積み重ねたあれを軽く凌駕する。私の計画に彼が付き合ってくれたならば、それこそこのよくな三文芝居を打つ必要すらなかった。だがそれが貴様ら人類に与する道理はない、何故なら今のその役割は人類悪、人に手を貸す事など有りえない」

「それは違うー！」

それだけは、彼の語る事だけは、違う。それは断言出来る。これまでの行動を見て来た、マシユやロマン、カルデアのスタッフだって、同じ意見のはずだ。

「ビーストは召喚に応じた。世界の危機に、人類の危機に召喚に応じたんだ！ ビーストだけじゃない。彼を骨子として色んな人が、このカルデアに力を貸している。お前の野望を挫くために！」

「愚かな——」

ソロモンが手を振り上げたその時だった。

「もういいよ、やばいやばい……」

それまで傍に控えていたビーストが、目頭を押さえ俺の肩に触れる。そして彼は一步、二歩と踏み出し——

「——ビースト、†悔い改めて†」

——夢でも見ているのだろうか。一瞬の間に、空間は野獣先輩に埋め尽くされた。人の波と化し、様々な形を取った無数の野獣先輩が、各々臨戦態勢を取りソロモンを見据える。上空には翼を生やしたり、飛行可能なものに擬態したものなどが空間を埋め尽くさんばかりに密集し、空を塞いでいる。これにはソロモンも動揺を隠せなかったように、顔を引きつらせる。

『疑似展開・野獣と化した先輩』

彼のストックするBB素材は、彼を起点としてしか展開できない。でなければ展開した瞬間に同一存在が二つに分裂しどちらが真かが認識できない形となって、結果元の一個体に戻る事が出来なくなるため。サンタリイ事件が記憶に新しいが、あの要領らしい。

それをビーストは、一度にこれだけの数を展開して見せた。これは

「……ッ！」

空間が裂け、ソロモンの姿はそこへ溶け込む。裂けた空間は主を喰らうや即刻閉じ、一匹の野獣先輩も通さないままに消滅した。

「——ロマン？」

『あ、ああうん。ソロモン消滅確認。逃げたねあれは』

「……はあー」

緊張の糸が途切れ、マッシュともども膝をつく。聖杯は回収したし、この特異点でやる事は全て終えた。

「ぬわああああん疲れたもおおおおん。辞めたくくなりますよ〜人理救済〜」

「どうすっかなあ〜俺もなー」

声の上があった方を見ると、たった一人に戻った野獣先輩が池沼モードに突入したMURといつかどこかで見たやり取りをしていた。どうやらきちんと戻れたようで、これは今までには無かったことだ。最悪一匹だけ回収して、他の野獣先輩はテムズ川に放流する羽目になるかと思っていたのだが。

「ロマン、何か解析できた？」

『……ソロモンが場に出ている間だけ、ビーストの霊基に異常があった。今は正常値に戻ってるけど、一応今後も気にかけておいて』

「……了解」

もしかしたら彼こそが、ソロモンとの最終決戦における切り札になるかもしれない。そんな希望を抱きながら、カルデアへとレイシフトするのだった。



七つの大罪感じるんでしたよね？

諸々の経緯を簡潔にまとめるとこうだ。俺の精神は監獄塔シャトー・ディフとやらに囚われ、現地で知り合ったアヴェンジャーと行動を共にしている。脱出する為には七つの『裁きの間』を越えねばならないらしい。

途中アヴェンジャーというクラスに言及されたが、ひでというエクストラ中のエクストラを知っていた俺からすれば、目の前の男に変なイメージが付かぬよう必死に自制するのが精一杯であった。

「さあ、第一の間だ。お前が七つの夜を生き抜くための第一の劇場だ」  
アヴェンジャーが笑みを浮かべ、門を開けた――

ビンビンビンビン

チクツ

あああああああ!!!

アーク チーン

嫉妬には気を付けよう！

テレーテレーテレー

「支配者、自壊しやがりましたが」

アヴェンジャーは愕然としている。部屋で繰り広げられた光景はどれも彼の筋書、思惑とは違ったものようだ。それはともかくとして、流石にこれは説明不可欠だろう。

男優に、その男優の顔を嵌められたスズメバチが音を立てて近づいていく。その後乳首を一突き、男優は声をあげて悶え苦しみ、やがて全身が青く染まり、傾いて死ぬ。その後突然鳴り出した軽妙な音楽に合わせて、先の男優が3体現れる。その背後に、『嫉妬には気を付けよう！』と一文を浮かべながら。

「――ゆうさく？」

随分マイナーなホモビ男優だ。「乳首感じるんでしたよね？」という台詞があるくらいしか知らないが、この寸劇は一体なんだ。今まで

の淫夢生において見た事がない。MADかなにかだろうか。それにしても随分短い、ひとくち淫夢程度の時間だが。

「……さあ、第二の間へ向かうぞ」

「あれは倒さなくていいのか……」

ピンピンピンピンピン

チクツ

ああああああああ!!!

アーク      チーン

性欲には気を付けよう!

テレーテレーテレー

ピンピンピンピンピン

チクツ

ああああああああ!!!

アーク      チーン

怠惰には気を付けよう!

テレーテレーテレー

メルセデスという女性を救出した以外は、そんな裁きの繰り返し。アヴェンジャーの言葉を借りるならばオートメーションか。本当に単調に、順当に裁きの間をクリアしていく。最初は不機嫌だったアヴェンジャーも、やがて何の感情も表に出さなくなっていた。

そんなこんなで今は、第四の裁きの間を控えて――

「あ、ジャンヌさんご無沙汰じゃないですか」

オレルアンで会って以来一度も遭遇することが無かった、聖女ジャンヌダルク。召喚システムが正常であれば彼女がカルデアにいた未来もあっただろうが、今はその兆候すら見えない状態だ。ともあれ対面するのは凄く久々な気がする。

「そういった反応を返されるとは思いませんでした……あの、貴方に聞かせたい話があります。一人の男の物語です」

「も、もしかしてジャンヌ……」

一人の男の物語と、ジャンヌは語った。今この場において、喉から手が出るほど欲しい答えがある。このシャトー・デイフに来て、最もわからない事が。

「——ゆうさくのあの寸劇を知ってるのか!？」

ジャンヌは一瞬面くらった様子だったが、俺の言葉の意味を飲み込んだのか顔を赤らめてしまう。

「……し、知りません！ 貴方が知らないホ……ホモビ男優なんて、私が知ってる訳ないじゃないですか！」

「それもそうだ。大デユマのモンテ・クリスト伯は分かったんだけどさ、あつちは皆目見当もつかなくて」

「そう。私が話しに来たのはあのアヴェンジャーの事で……えっ!？」

どうもジャンヌは本当に、モンテ・クリスト伯について話しに来たようだ。言葉に詰まった彼女の輪郭が、どんどん薄れていく。

「あ、待ってー！ どうかいかないで！ 乳首感じるんでしたよね!？」

「……随分楽しい夢だったようだな？」

……アヴェンジャーに思い切り釘を刺され、メルセデスにはゴミを見る目で見つめられながら、第四の裁きの間へと向かう。アヴェンジャーは、今日はいつものにもまして不機嫌だ。今度こそ、今度こそ真つ当な英霊でありますように……待て。ゆうさくの方が戦闘も起こらず楽に突破できるのではなからうか。ああ神様、どうか次の試練もゆうさくでありますように——

「アヴェンジャー。私は、あなたを止めるために此処へと至った」

「……やっっちゃえアヴェンジャー」

「女ア！ 殺すツ!!」

……神はもの見事に期待を裏切ってくれる。ジャンヌダルクの登場に、アヴェンジャーはマジギレ。怒涛の勢いとクラス相性、スキル相性で人間要塞ルーラーを削り飛ばしてしまった。

結論。困ったときの神頼みには気を付けよう！

「さつきはすみませんでした。議論しましょう議論」

「……」

夢の中に再び現れたジャンヌに平謝り。流石にやつちやえアヴェンジャーは酷かった。

「……その。ゆうさくの寸劇とやらについてですね。一つ推測があるのです」

「ん？」

「その……真夏の夜の淫夢の、男優というのはかくあれと願う人々の思念の影響を強く受けている現代の英霊、なのですよね？」

オルレアンの時に、そんな事を語ったような語っていないような。ただあの時は「聖女にさ、ホモビの話題振ったらどうなる？ 魔女の誕生ですか？」などとぬかしたシェイクスピア（淫夢）に唆されて、話半分に語ったような気がする。彼女がここまで真摯に覚えていてくれたとは、罪悪感を抉られるようだ。

「そして今回……カルデアにおけるサーヴァントというのは、並行世界の方もいらっしやると」

「そんな話もあるらしいね」

歴史のIF、というかバリエーション違いだ。当カルデアでは一向に観測出来ていないが。しかし並行世界の英霊としても疑問が残る。あんな一門のマイナー男優が、2013、14、15年辺りで流行る道理があるだろうか。まだまだ野獣で遊べるだろうに、他の男優に人が流れるだろうか。

「——まさか」

「その、ゆうさくというのは『人理焼却が起こらなかった平穏な2016年においてブームが来た男優さん』、なのではないでしょうか。あくまで、推論に過ぎませんが」

ジャンヌがおっ立てたあまりにも唐突な、今後の流行に対するネタバレ。つまりあの寸劇も、人理焼却さえなければニコ動で出会えたはずなのだ。命の駆け引きだのとは無縁の、ぐーたらな日常の中で。

「絶対に許さねえぞ、魔術王！」

「夢見が良いなマスター。結構な事だ、いくぞ」

ピンピンピンピンピン

チクツ

あああああああ!!!

アーク チーン

暴食には気を付けよう！

テレーテレーテレー

第5の裁きも以前と同じ、ゆうさくが現れてスズメバチにすぐに刺されて自壊するパターン。これはもう第7の裁きまで、戦闘無しで一気に突破できるのではなからうか。そんな甘い事を考えつつ第6の裁きの間へと至り——考えを改めた。

「——乳首感じるんでしたよね？」

これまで何の抵抗もなく自壊していた、野獣系王道の好青年は裁きの間の中央に仁王立ちし、はにかみながらこちらを見据える。両手にはそれぞれ鋏の片刃を握り、さながら二刀流の剣士の様だ。

「……予定とは違ったが。あれは亡者だ、貴様を貪り喰らう事しか考えぬ、罪の権化だ。殺せ、躊躇なく」

「力を貸してくれ、アヴェンジャー」

ゆうさくとアヴェンジャーが地を蹴ったのは、ほぼ同時だった。繰り広げられるのは目にも止まらぬ高速戦闘。アヴェンジャーが拳を放てばゆうさくは鋏刃を合わせ、アヴェンジャーが恩讐の炎を放てばゆうさくが回避する。

「お前のデカマラ……突っ込んでくれよ！」

「……フン」

ゆうさくの挑発を受け流すアヴェンジャー。一進一退のまま進んでいたが——戦闘中に耳障りな音が幾重にもこだました、そのタイミ

ングでアヴェンジャーの動きに変化が表れる。攻撃の兆候もない自身の周囲に黒炎を展開し、注意力が散漫となっているのか、明らかに攻め手が緩くなっている。互角だった戦況ははじりじりとゆうさくへと傾きつつあった。

—ビンビンビンビン……—

ゆうさくの声を切り取って無理矢理作成したような音声、ここへ至るまでの間、散々聞いて来たあの音。

「……羽音、ハチか！」

ハチを何らかの方法で使役、展開して攻撃に用い、アヴェンジャーの攻勢を押しとどめているという事か。アヴェンジャーが周囲に展開する炎はハチに対応するもの、注意が散漫なものも言うに及ばず。しかしこの展開は、不味い。ゆうさくとアヴェンジャーは切り結んでこそのいるものの、じりじりと追い詰められているのに変わりはない。ハチの弾数が尽きる予兆すら存在しない。

この状況でマスターたる俺に期待されているのは、一発逆転の策。待て、しかして希望せよ。これまで拾い上げた”ゆうさく”を練り上げ——閃いた。

「——アヴェンジャー！　ハチを、ハチをゆうさくに誘導しろ！」

その言葉が聞こえたのかどうかは定かでないが、アヴェンジャーの高速移動の軌道が変わったのは見て取れた。あまり分の良い賭けで無い事は百も承知だが——

チクッ

あああああああ!!!

ア—イク　　チ—ン

ゆうさくの最後は恐ろしく呆気ないものであった。自らが使役したハチに刺されたかと思うと、悶え苦しみ始め、やがて引っくり返って死んでしまう。第6の裁きの間、強敵だったが、なんとか攻略できた。いやあ、アイルランドの民並に弱点もろ出して助かった。

……それと同時に視界が暗がりにもまれていく。これは夢から覚め、束の間、現実世界の様子を見る事が出来る兆候だ。頼むから第7の裁きの間は気楽なものであるように祈って。

「乳首感じるんでしたよね」

「……先輩っ!？」

偶然俺の顔を覗き込んでいたマシユに堂々とセクハラをかましてしまった。……天井には気を付けよう！